

当事者研究、脳の多様性、間テクスト性、芸術効果、心的外傷後成長 自己エスノグラフィーに依拠して

横道 誠

1. 目的

1.1. 当事者研究への貢献

当事者研究とは、生きる上での苦勞を抱えた「当事者」が、自分の苦勞の仕組みを自身で考察するとともに、仲間の協力も得て自分の考えを掘りさげることで、その仕組みの全体像への洞察を得て、結果として生きづらさを緩和させる自助グループ的研究会活動を指している。熊谷晋一郎は、つぎのように説明している。「自分の力を過少にも過大にも捉えず、①変えられない自分のパターン——そこにはパターンとしての生得的な期待や身体が含まれる——を慎重に探ること、過去を正直に振り返り、②欺瞞のない自分史——先行研究の概念を用いるとしたら真理性の高い自己の物語——を紡ぐことはどれも、等身大の自分を発見しようという試みである。研究の前提としてある、いまだ自分は等身大の自分をつかみきれていないという無知の知は、自らを他者の視点や解釈、知識を求める③共同性に向かわせる。等身大の自分を変えようとはせずに、パターンや経験をある程度共有する④自分と類似した他者ととも、予期と現実の誤差を縮小するように互いの「後天的な期待」と「予測（知識）」を更新し合い、そして更新した予期を仲間の外に向けて⑤公開していくことで、社会が広く共有する規範や知識を更新する実践ということが出来る」（熊谷 2000, 81-82）。

当事者研究は北海道の「浦河べてるの家」で、精神保健福祉士の向谷地生良らによって開発され、最初の実践者は統合失調症の患者だった（向谷地 2005, 3）。当事者研究は、原則としてはグループワークの場を設定し、ホワイトボードなどに当事者と協力する仲間たちの発言を書いたり図示したりする様式を取る。これを発展させて、当事者研究の成果を自己エスノグラフィーとして総括する試みもなされるようになったが、これについては少しあとに改めて説明したい。

人文学の分野では、普遍性の記述をおこなう自然科学の多くの分野とは対照的に、個性の記述が注力される。それに似て、「普遍性を目指さない」人間研究が、当事者研究の課題と言って良い（河野 2013, 101-102）。他方で、浦河べてるの家では「統合失調症〇〇型」のような「自己病名」が好んで命名されるし、前述した「当事者研究の自己エスノグラフィー」では医学的言説が活用されている。つまり「当事者研究は、医学的な定義に違和感を覚え、オリジナルな言葉を紡いでいくときにも、医学と概念的には連続性を保つ」という自然科学的側面と無縁ではない（石原 2013, 128）。かつ当事者研究には、当事者と社会の関係をほぐしていく実践的な社会科学という役割もある。当事者研究は人文学、社会科学、自然科学を独自に総合する独特な知的営為と呼ぶことができるだろう。

熊谷は2020年、当事者研究を先端的な自然科学の手法によって増強する試みを発表した（熊谷 2020, 93-168）。本稿では「当事者研究のエスノグラフィー」を作成し、考察する。エスノグラフィーは人文学、社会科学、自然科学のいずれでも制作されるから、学問の広大な領域に関わる形式と言える。さらにエスノグラフィーの制作は、学問的営為だけでは成立せず、創作という芸術的営為を必要とする。本稿の内部には、被観察者（私自身）の体験世界を記述するという一種の創作的側面（ただしノンフィクション）と、それに「自注」をつけ、ときには人文学的な、ときには社会科学的な、ときには自然科学的な解説を付けてゆくという別種の創作的な側面（一種の批評）が並存している。

1.2. 「脳の多様性」、ASD/ADHD 研究、多重スティグマ

私——本稿は自己エスノグラフィーに依拠して書かれるため、「筆者」という呼称をこの単純な一人称単数によって置きかえたい——は、「脳が別様」（neurodivergent）な人間として生きている。「脳が別様」は、「脳の多様性」（neurodiversity）運動の用語に属する。私は、医学の用語で言えば〈neurodevelopmental disorders〉（神経発達症群）の当事者にあたる。それは日本での一般的な言い方では「発達障害者」ということだ。「脳の多様性」運動は、日本では一般に「健常者」と呼ばれ、「発達障害者」の「界限」（コミュニティ）では一般に「定型発達者」（または「定型者」）と呼ばれる多数派、「脳が典型的な」（neurotypical）な人々に対する権利要求運動として展開されている。それは私たち少数派が、「健常者」対「障害者」という枠組みを崩すために用いる表現と言える。本稿では、「脳が別様な」仲間たちを、簡単に「私たち」や「私と仲間たち」などと表現しよう。

私が「脳の多様性」運動を支持するのは、差別される側からの運動の伝統を受けてのことだ。脳性麻痺の当事者たちによる障害者解放運動団体「青い芝の会」を率いた横塚晃一は、つぎのように書いた。「私達障害者の意識構造は、障害者以外は全て苦しみも悩みもない完全な人間のよう錯覚し、健全者を至上目標にするようにできあがっております。つまり健全者は正しくよいものであり、障害者の問題は間違いなのだからたとえ一歩でも健全者に近づきたいというのであります」（横塚 2007, 64）、「以上述べた如き意識構造を私は健全者幻想と名づけてみました。このような健全者幻想を振り払わない限り本当の自己主張はできないと思います」（横塚 2007, 64-65）、「小説家にしろ彫刻家にしろ絵かきにしろそれぞれの分野で自分の世界をつくっております。それは理解して貰うというよりもその作品をもって己を世に問う、あるいは強烈な自己主張をたたきつけるということではないでしょうか」（横塚 2007, 65-66）、「私達脳性マヒ者には、他の人になく独特のものがあることに気づかなければなりません。そして、その独特な考え方なり物の見方なりを集積してそこに私達の世界をつくり世に問うことができたならば、これこそ本当の自己主張ではないでしょうか」（横塚 2007, 66）。「青い芝の会」の主張も、「脳の多様性」運動も、黒人解放運動で、「黒」は汚い色、死を思わせる不吉な色、悪魔の色だと考える伝統的美意識に逆らって、〈BLACK IS BEAUTIFUL〉（「黒は美しい」）を標語

として反差別を掲げたことに対応する。それは障害者の世界観の提示を前面に押し出した解放運動だ。

「脳の多様性」運動は、2015年に国連で採択された、「誰一人取り残さない」(leave no one behind)を標語としたSDGs(持続可能な開発目標)にも合致している。筑波大学は「SDGsを越えて、共に創る未来社会」という目標を掲げ、「高等教育におけるニューロダイバーシティの実現に関する研究」を進めている。この筑波大学の営為が、全国のほかの大学でも取りくまれてしかるべきだろう。

私は「脳の多様性」運動が、しばしば医学に過度に敵対的になることには疑問を頂いている。「脳の多様性」に賛同する私はASD/ADHDの診断を、つまり自閉スペクトラムと注意欠如・多動症が併発しているという診断を受けることによって、自己に対する認識を根本的に深めることができた。だから、私は本稿がこの医学的「障害」の研究資料に使われることがあっても、それを厭わない。たとえ医学の既存の価値観が、しばしば醜悪だという事実があるにせよ、医学の発展が私たちにとって悪いことばかりだとは思えない。

参考として挙げれば、アメリカ精神医学会(American Psychiatric Association)が発行している『精神疾患の診断・統計マニュアル 第5版』(以下これをDSM-5と呼び、引用の著者名はAPAとする)は、「近年」のASDの「有病率」を「米国および米国以外の諸国」では1%、ADHDの「有病率」を「ほとんどの文化圏」で、「子どもの約5%および成人の約2.5%」と説明している(APA, 2014, 54; 60)。日本の文部科学省は、「発達障害者」の児童の割合を6.5%程度と発表している(文部科学省 2020)。

国内のASD研究ではさまざまな自閉スペクトラム症者(以下、「ASD者」と呼ぶ)の自伝、当事者研究、対談、インタビューのたぐいが使用されてきた。ドナ・ウィリアムズ、テンプル・グランディン、森口奈緒美、グニラ・ガーランド、ウェンディ・ローソン、ケネス・ホール、リアン・ホリデー・ウィリー、トーマス・A. マッキーン、泉流星、ニキ・リンコ、藤家寛子、ルーク・ジャクソン、アクセル・ブラウンズ、東田直樹、綾屋紗月(利用した自伝等の国内での出版順)——私は彼らの本を読み、本稿で積極的に活用した。一般にASD当事者の男性は女性の4倍多いと指摘されるが(APA 2014, 56)、上に挙げた著者たちの多数派は女性だということが注目されて良い。

なお、女性のASD当事者は、診断されにくい傾向にあるようだ。彼女たちは、女兒のときは「何となくおとなしい子」と見なされ、就業したのちは転退職を繰り返しても「女だから」と問題視されず、妻や母として生きていれば社会的な問題になりにくく、専門医を訪れても、そのときに併発している精神疾患の問題と誤診され、さらに男性よりも社会適応のスキルを身につけざるをえないことから、容易に見過ごされる(砂川 2015, 90-92)。

上に挙げた当事者たちの多くは、正確には自分自身の「自閉症」や「アスペルガー症候群」や「広汎性発達障害」や「高機能自閉症」について書いているのだが、これらの症例は、現在ではASDとして一括されたり、ASDとADHDの併発として解釈されたりする(APA 2014, 52; 57)。いささか驚くべきことに、注意欠如・多動症者(以下、ADHD者と呼ぶ)の自伝等は、マンガ

の形態では散見されるものの、伝統的な様式のもの国内の刊行物には見当たらなかった。

ADHD は ASD よりも症状が軽いと見なされ、それだけ特筆すべきことが少ないと判断され、話題性に乏しいと判断されているのだろうか。マンガ作品を利用することも検討したが、それらはマンガの特性を反映し、誇張など演出の要素を多く含むため、本稿では使用することを断念した。

当事者研究の会合をおこなっているときでも、当事者の自伝等を読んでいるときでも、私は仲間とのあいだでもこれほど多様性（ダイヴァーシテイ）の広がり大きいのかと、しばしば驚かされる。私と同様、ASD と ADHD が併発している事例はきわめて多く、ある研究は未就学の自閉スペクトラム症児（以下、「ASD 児」と呼ぶ）の 30～50%が ADHD を併発していると指摘する（Davis / Kollins 2012, 518–530）。ASD/ADHD として併発するのが標準形と見なされるようになる未来もありえそう。また、ASD には別の「神経発達症」の DCD（発達性協調運動症）や、医学的な位置づけは曖昧だが、APD（聴覚情報処理障害）がよく併発し、私もその例に漏れない。人によっては鬱病、双極性障害（躁鬱病）、統合失調症、解離性同一性障害（いわゆる多重人格）、各種のパーソナリティ障害を二次障害として併発している場合もある。アメリカ精神医学会は、ASD 者の 70%にはひとつの別の精神疾患が、40%にはふたつ以上の別の精神疾患が併発していると指摘する（APA 2014, 57）。ウィリアムズは、このありさまをリンゴだけに見えても実はブドウ混じりの、あるいはブドウではなくプラム混じりの、さらにはベリーや数種類のバナナが入っているかもしれない「フルーツサラダ」に喩えている（ウィリアムズ 2008, 12–13）。

私の場合は、この「フルーツサラダ」が当事者研究で注目される「多重スティグマ」（multiple stigma）として意識されている。この語に込められる意味合いは多種多様だが（熊谷 2018, 65–82）、本稿では個人が背負っている、複合的な理由にもとづく多層的な「汚名」を「多重スティグマ」と呼びたい。私の場合は、ASD/ADHD を矯正するために、親から厳しい体罰を受け、その結果として AC（アダルトチルドレン、つまり機能不全家族の出身者）としてのスティグマも負った。親の子に対する肉体的暴力は、親が信仰していたカルト宗教によって肯定され、私はカルト宗教の教義を教えこまれながら児童期を過ごした。この経験から、私は「新興宗教 2 世」のスティグマを負った。ASD/ADHD が原因で、私のジェンダーやセクシュアリティは不安定になり、「性的少数者」のスティグマを負った（詳しくは「3.2.」の自注 [45] ～ [47] を参照）。このように私には、ASD/ADHD を核とした多重スティグマがある。

1.3. 自己エスノグラフィーの実験

かつてローレル・リチャードソンは、つぎのように書いた。「ポスト構造主義、フェミニズム、批判的人種理論、クエア理論の結果として、現在、エスノグラフィーはさまざまな形でさまざまな場所に出現している。エスノグラフィー的なもののジャンルは不鮮明になり、拡大され、変更された。以下のようなものはどれもエスノグラフィー的なものでありえる。自己エスノグラフィー、詩、演劇、会話、ニュー・ジャーナリズム、朗読劇、パフォーマンス、ハイパーテキスト、フィクション、ファクション、創作混じりのノンフィクション、まったくのフィクション、箴言、

コメディ、風刺、重層的なテキスト、物語、歌、美術館のインスタレーション、写真、ボディペインティング、振付」(Richardson 1999, 660、原文英語。本稿で原文の原語を記している場合、すべて拙訳)。

彼女はここで、実験的なエスノグラフィー、あるいはエスノグラフィーを利用した実験について言及し、その筆頭に「自己エスノグラフィー」を挙げている。キャロライン・エリスとアーサー・ボクナーは、「自己エスノグラフィーを執筆し、調査する分野は、個人に関するものを文化に関するものへと接続しながら、意識の多層を提示する」(Ellis / Bochner 2000, 739)ものと説明している。ガランス・マレシャルは、「自己エスノグラフィーは、エスノグラフィーのための実地調査と執筆を文脈に置いて、自己観察と反省的調査をおこなう研究の形式または方法のことだ」(Maréchal 2010, 43)と要約する。

残念ながら、自己エスノグラフィーはしばしば安易で自己満足的な自己語りへと墮落してしまう。リチャードソンはつぎの5点をエスノグラフィーの基準として挙げているが、これらは自己エスノグラフィーの基準としても守られるべきだろう。(1) 社会生活に対する私たちの理解に実質的に貢献するものか、(2) 美的な観点から見て成功していて、退屈ではないか、(3) 十分な反省的考察を経た上で構築されているか、(4) 読者に対して、現実への行動を促すような衝撃力あるいは影響力のあるものか、(5) 生きられた体験にもとづいた、現実を表現するものか(Richardson 2000, 254)。

当事者研究の一部は、自己エスノグラフィーの形を取って世に送りだされてきたが、それらはいずれも公には「自己エスノグラフィー」と銘打っておらず、単に「当事者研究」と呼ばれている。それらの「当事者研究の自己エスノグラフィー」には、つぎのようなものがある。綾屋紗月とその協力者の熊谷晋一郎による発達障害研究(綾屋 / 熊谷 2008)、熊谷晋一郎の脳性麻痺研究(熊谷 2009)、伊藤亜紗による、当事者研究の自己エスノグラフィー似た体裁を取りながらも、先行研究とインタビューを重視した吃音症研究(伊藤 2018)、樋口直美がエッセイ調で記したレビー小体型認知症研究(樋口 2020)、坂口恭平が講義調で記した双極性障害研究(坂口 2020)など。本稿は、これらに似た「当事者研究の自己エスノグラフィー」を含んでいる(「3.」を参照)。本稿は管見の限り国内で初めてのASD/ADHDの自己エスノグラフィーとしての価値を有する。また、そのエスノグラフィーの様式は実験的なものと言える(「4.1.」を参照)。

1.4. 文学研究と文化研究の未開地を探索する

本稿は、文学研究および文化研究の分野での開拓的研究としての側面も有する。自己エスノグラフィーの作成にあたって、文学研究や文化研究を通じて私が獲得してきた知識が活用され、外国文学の翻訳が結合され、映画、美術、音楽、サブカルチャー全般に関する制作物——それらを以下では「文化的コンテンツ」と総称する——への言及がおこなわれた。本稿は、文学研究や文化研究を当事者研究と統合する革新的実践なのだ。

綾屋はその当事者研究で、自分の内面で、心的外傷とは無関係の「フラッシュバック」から「ヒトリ反省会」が立ちあがり、それが別の人格との「ヒトリタイワ」に、さらに白昼夢めいた空想

世界の「オハナシ」に発展すること、ときとして自己嫌悪の連鎖を意味する「シュトコー」に陥ることもあることを述べている（綾屋 / 熊谷 2008, 87-100）。私の場合は、「フラッシュバック」と「ひとり反省会」が連続した時点で、文化的コンテンツの鑑賞、文学作品の翻訳、収集物の愛玩などに自分を差しむけ、「ひとりタイワ」と「シュトコー」に続く回路を切断するという習慣を有する。そのような体験様式を持つために、本稿は文化的コンテンツへのおびたしい言及なしには成立しなかった。

また、心的外傷と絡まった侵襲的記憶を制御することは、私にとって、生きる上で高い優先順位を占めてきた。無数の文化的コンテンツは、まさにその制御を可能にしてくれたし（「4.2.」を参照）、私は、自分が大量の異質な「テキスト」のあいだに生まれた「間テキスト性」だとも実感するに至った。だが、これらの問題については、もっとあとに扱うべきだろう（「4.1.」を参照）。

2. 方法

本稿の基盤を成す当事者研究は、自分ひとりによる省察、すなわち自己研究（「ぼっち研究」等とも呼ばれる）と、会合での仲間との意見交換を往復する形で進められた。自己研究は2020年1月から同年8月まで、自由時間を利用して進められた。会合は2020年4月から同年8月まで、「リアル」（オフライン）で5回、オンラインで51回開催された。リアル開催とオンライン開催のこの数字の開きには、オンライン開催の方が簡易に実行できるという理由のほかに、実施期間がコロナウイルス対策の時期と重なっていて、リアル開催がしばしば困難だったという事情が関係している。会合では、私の体験世界をまず話して、仲間から応答を受けたこともあるし、逆に仲間の体験世界に応答するために、参考になると判断して私の体験世界を話して、それにさらに仲間からの応答を得たということもあった。毎回の会合の内容は、もちろん自己研究を推進する役割を果たした。ちょうど「自分自身で、ともに」という当事者研究の標語（向谷地 2005, 5）に即すように、内省と会合の往還が、本稿の骨格を成立させたのだった。

私が作成した「当事者研究の自己エスノグラフィー」は、「3.1.」と「3.2.」に示したとおり、2部から構成される。「3.1.」では「体験世界の記述」を掲載し、1文ごとに番号をつけており、全部で50番までである。「3.2.」には「自注」を記したが、そこでは体験世界の記述が1文ごとに解説されるようにした。このように本稿のエスノグラフィーが2部に分かれた理由については、後述する（「4.1.」を参照）。

3. 結果

3.1.自己エスノグラフィー (1) 体験世界の記述

[1] 私は晴れやかな現実と甘く濁った想像が浸潤しあっている世界を生きている。[2] 心が時の恵みを受けているときには、私はときには穏やかに「物の見えたる光」と「正午の海」を味わい、ときには天才たちのチェロやピアノの演奏に包まれ、ときには死を意識しながらも仕事を謳歌し、まれには疲労が「a次元」にまで接近する（文学や芸術に憑かれた私という人間）。

[3] しかし、実際には私は大抵のときを自分が絶えず水中世界で揺らめいているという感覚のなかで生きていて、そこではくぐもった音がずぶずぶと泡立ったり絶叫したりし、全体は美しい悪夢に彩られている。[4] 陸の世界のなかにながら、さまざまな姿を見せる水が私を包み、そのつどに異なる濃度の水溶液のなかで、私は透明な膜に封印されて、しかし私は呼吸し、自分の体を操縦する。[5] こちら側から見た世界は、一枚の平面的なスクリーンのようにも見え、プラネタリウムに入ったときを思いださせる。[6] じっと観察していると、諸事物はその巨大なスクリーンの上を無制限に離合集散しているように見えてくる。[7] 諸実物はまた、私に向かって透明の管を伸ばし、私の四肢はそれらに結ばれ、私は何をどのように操作すべきか混乱しながら動きまわる。

[8] 世界の朦朧とした光景のなかで、さまざまに神聖な連合現象が起こり、そのつどの出来事が立ちあがり、美しいときは「エリゼの庭」のように、醜いときはその庭の荒廃した姿のような景観を見せてくれる。[9] 出来事の記憶は断片化して、脳に焼きついてゆくが、それを私は水による私への侵襲として理解している。[10] 私は重い潜水服を着て、ゴポゴポと音を立てながら深海に落ちてゆくこともあれば、ドレスを着た女性として水葬されてゆくこともあり、また培養液の入った水槽に浮かんだたくさんの死体のひとつになっていることもある。[11] 私は事物を透明にする力を振るい、すべてを透明にしようとするが、不注意などの失敗によって、多くの場合には私だけが透明にされてしまい、恐怖に包まれたゲル化した半液体状の怪物として、世界の吐瀉物になって、見捨てられる。[12] 頭が完全に冴えわたったときにだけ、私はこの水の世界から出ることができるため、私はその機会をいつも狂おしく求めている。[13] 水からあがった私は、うるおう水際のシダ植物として佇んでいると感じるが、そのようなことはほとんどないために、私はその代わりに空気が水で溢れる雨季を楽しみに生きています。[14] 偽りの水に苦しめられている私は、本物の清らかな水に敬意を抱き、水が光の下で青く煌めく様子に帰依している。

[15] さて、私は水の中から出るときには水から解放されているが、それは宇宙空間へと投げだされることをも意味する。[16] そうして私は自分がいかに周囲から孤絶しているかを実感し、宇宙空間でひとりぼっちだと感じる。[17] 地球にはさまざまな知的生命体が住んでいて、それが地球の知的生命体の多様性を保証していると考えれば、一抹の不安を覚えつつも幸せだ。[18] というのも、そう考えることで、私は地球にやってきて、地球人に捕獲され、今か

らどのような恐ろしい出来事に巻き込まれるか分からず、怯えている、そんな哀れな生き物だと感じなくてすむからだ。

[19] かつては宇宙のあちこちの天体に地球外生命体がいる、地球人も含めてみなで大合唱をあげていると考えた思想家もいるが、私はそのような考えを単純に荒唐無稽と感じるし、本来の意味での地球外生命体の実在に関しては、不可知論の立場を取っている。[20] 私は夜の街を歩くときに、視界の全体に宇宙を透かし見ては喜ぶ。

[21] 視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚は洪水のように私につねに押しよせ、快樂や苦痛への敏感さは罪だと感じられ、寒暖差への反応はむしろ鈍く、共感覚はないが、混乱のなかで私は「火」と「薔薇」がひとつに、「鳥の声」と「私の心」と「雲」と「水」とが悟られるときを願う。[22] 聴覚情報はしばしば雑音が高まるラジオ放送のように感受され、心のなかでオウム返しが発生し、小さな反響音が受けとめられる。[23] 私は神経質に細かいのに大雑把なときがあり、自分でも冷や汗が出るほど頑固なことがあるのに、気まぐれで寛大でもあり、関心の範囲が狭く深いのに、ときには無理に手を広げようとしてしまうため、自分を「ウインスロー」、「キカイダー」、「オドラデク」などの怪物の名で呼んで、苦笑いすることもある。[24] 私の体は「こだわり」に奉仕するため、誤作動を起こすことが多々あり、自分自身を統制下に置くことに手を焼いている。[25] 部屋の整理という長年の問題を、私は自分の部屋を神話的空間めいたものへと仕立てることで解決し、忘れ物を防ぐためにかなりの工夫を編みだし、街中で迷子にならなくなった。[26] 歩くときは自分の操縦に手間取り、ズシーン、ズシーンと歩いている気がするが、周囲の人にはペタリ、ペタリ、ペタリと亡霊めいて歩いている印象を与えるらしい。

[27] 水と同様に、人は私に容易に侵入することができるから、私はたくさんの寄生生物に蝕まれて生きざるをえない。[28] だが私は逆に他者へと入りこんで、その一部を自分に写しとり、それを自分なりに育むことに長けているから、私は仲間とともにこれを「擬態」と呼んでいる。[29] 私と仲間たちの想像力や共感力や共感力は独特で、サイコパスと誹謗されることがあり、雑談に苦しみを感じ、いわゆる「地雷」を踏むことにかけては名人級で、自分の辺縁に女性性を感じるものの、いわゆる「女心」を異なる知的生命体の文化のように感じる。[30] 私には微弱な吃音があり、視線の同調圧力が疎ましく感じられ、顔を忘れることでは卓越した水準にあり、顔の表情は独特で、対人距離が平均より狭い。[31] 子どものころに独特の私的言語や誤った連想を楽しむ傾向があったし、いまでも冗談の感性が個性的で、主語をオウム返しにするのが稀にあり、嘘がへたで、思春期には話しつづけると黙りつづけるときの分裂していた。[32] 「魔法」の力を頼ったり、過剰に「橋を焼」いたりする傾向に関しては、私は反省し、炎の夢を見る。[33] 人は私を傲慢と感じ、口には出さずとも「所詮は障害者のくせに」と感じるかもしれないが、障害者を製造するものとしての社会に対して、人間の人間に対する搾取に対して私なりに戦うつもりでいる。

[34] 私の仲間たちには、しばしば突如として神が己に降臨するのを体験し、永遠と無限とを見て、「6000 フィート」の上空に立ち、一瞬ごとの再生を夢見て、水面が円を描いて波打つを感じ、体が炎や蒸気や電磁波を帯びているかのように夢想する。[35] 私は人生がただ一

度だけしかないということを感じるとともに受け入れるものの、それはともすれば呪いとして私に強迫してくる [36] 私は昼間、観光先でこの強烈な状態に囚われたときの感覚を再現するべく、そのときに心に焼きついた擬宝珠の印象を写真加工で再現したことがあった。 [37] 私に起こる降神は、私を無益な精神の炎へと変形させ、私を薙ぎたおして終わり、恐怖とともに振りかえられることが多いため、これらの体験は努めて遠ざけられているものの、それでも私はそれらに繰り返して襲われて、結果として事物を固定的に見ることからは自由になっている。

[38] 私の仲間たちは、さまざまな時間跳躍を経験しているが、少年時代の私はカルト宗教によって洗脳されていたために、地獄行きのタイムマシンが毎日のように私を乗せて走る。 [39] 私は同じような行動を反復するが、それによって自分を呪いから解放しようとしているという面もある。 [40] だが、そのような呪いの浄化方法はしばしば不気味で、ときとして他者から忌避の対象になっていると感じる。 [41] 私は静寂で自分を浄化し、文学作品のなかの水と植物でも浄化し、雨に濡れることや、蛍光色を浴びることや、自分の呪いと共振する爆音でも浄化する。 [42] 私が物を集め、並べて遊ぶ傾向にあったことはいささか残念な気がするが、他方で、知識を集めて並べて遊ぶのを好んできたことは、私の人生をおおむね明るくしたと思う。 [43] 食べたものや飲んだものを通じて自分を浄化しようという試みは、単純な失敗をもたらした。

[44] だが、いまや私は自分で自分を研究し、仲間の助けも借りることを学んでいるから、私の未来が大きく開かれたと感じている。

[45] 子どものころ、男なのか女なのか分からないと言われることは、人間の成りそこないのように感じられて苦痛だったから、思春期から青年期にかけて、私はもっぱら男性性を求めているように装ったが、隠れた仕方で女性性への憧れを深めた。 [46] 書物の世界で、女性的な印象の男性という描写を見たり、女性が水浴びしている場面を見たりしたときには、自分がそのように観察される側だったら良かったと考えたものの、私が事実として性自認と性的指向の少数派なのかという問題には留保がつく。 [47] 私は男として女に、男として男に、女として男に、女として女に惹かれるかのように混乱し、自分の名前に親しみを感じながら、男たちと女たちの植物めいた不思議さに呆然とし、植物を礼賛する。 [48] だが、呪いの力が私をつねに性的なものから遠ざけもする。

[49] 死を思うとき、呪いがあるために私には神仏が絢爛と顕現する時空は疎ましく感じられ、死は別の空間へと抜けでることや地水火風の変転のようなものだと考えることが多く、あるいは若くしてヘチマを眺めて死んだ俳人よりはずっと長く生きたと考えて、自分を慰めることもある。 [50] 生きているあいだは、できる限り自然の神気を吸い、噴水を見つめる機会が多くあるようにと願っている。

[51] 排泄、性的衝動、身の回りの清掃などに関して、私にはいくつかの困り事があるが、私のなかでは、それをほかのことと同様に平等に書くべきだという「こだわり」と、そのような尾籠な物事については書かずにいるのが節度というものだという別の「こだわり」とが葛藤を起こし、本稿ではついにその決着がつかなかった。

3.2. 自己エスノグラフィー (2) ——体験世界への自注

[1] 「現実」と「想像」の「浸潤」は、精神医学の世界で「妄想」や「解離」の名で説明される。一般的に ASD や ADHD の場合は、現実と夢の区別がつきにくくなるほどではなく、現実がつねに夢に浸されているような印象がある。私もその例に漏れない。区別はつけられるが、完全に覚醒するのが困難なのだ。綾屋は、これを「夢侵入」と呼び、「起きているにもかかわらず滑り込んでくる夢の状態」で、「特に疲れたり眠くなったりしてくると、このような状態に置かれることが多い」と説明しているが(綾屋 / 熊谷 2008, 81)、私にも同様のことが言える。

「現実」と「想像」の浸潤という表現は、ローベルト・ムージルの戯曲『熱狂家たち』で第 1 幕の舞台として指示された「現実と想像が同程度に再現されていなくてはならない」(Musil 1981, 310、原文ドイツ語)より。

「AS の人たち」(つまりアスペルガー症候群者)は「みんなと同じ地球で生まれたのではないと感じる」ために(自注 [17] 参照)、「SF や幻想物語を好む」という指摘があるから(シモン 2011, 88)、「現実」と「想像」の浸潤にも同様の動因が関与しているのかもしれない。

[2] 「物の見えたる光」は、服部土芳の『三冊子』によって伝えられた松尾芭蕉の遺語、「物の見へたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし」(穎原 1939, 104)より。「正午の海」はポール・ヴァレリーの詩「海辺の墓地」の「鳩が歩いてゆくこの静かな屋根が／松と松とのあいだで鼓動する。墓と墓とのあいだでだ。／正確にも正午が炎だけで構成するのは／海だ、海だ、つねに新しく始まる！／ああ、思索のあとの報酬は／神々の静寂をゆっくり眺められることにある」(Valéry 1933, 157、原文フランス語)より。「現実」が特に効果的に「想像」を制御しているときに、私はこれらの詩をよく思い出す。

「天才たちのチェロやピアノの演奏に包まれ」るとき、「現実」はわずかに「想像」に押されている。楽器は、パブロ・カザルスによるバッハの「チェロ無伴奏組曲」と、グレン・グールドによる同じくバッハの「ゴルトベルク変奏曲」を意識したもの。「死を意識しながらも仕事を謳歌」するのは、ハンス・ホルバインの絵画「大使たち」のイメージ。疲れが溜まって覚醒し、「現実」が「想像」に屈していないときに、この絵がよく思いだされてくる。「a 次元」は高村光太郎の『智恵子抄』に収められた「智恵子と遊ぶ」より。絶望と覚醒の混交状態、あるいは「想像」の「現実」に対する勝利。「智恵子の所在は a 次元。／a 次元こそ絶対現実。／岩手の山に智恵子と遊ぶ／夢幻ゆめまぼろしの生の真実。／フレンチ平原に茸は生えても／智恵子の遊びに変わりはない。／二合の飯は今日のままごと。／牛のしつぽに蕈を刻む。／強敵糠蚊とたたかひながら／三畝の畑にいのちを託す。／あばら骨に錐は刺され／肺気腫噴射のとめどない咳。／造型は自然の中軸。／この世存在のシネ クワ ノン。／一切は智恵子 a 次元の逍遙遊。／遊ぶ時人はわずかに卑しくなくなる」(高村 2003, 122-123)。

「文学や芸術に憑かれた私という人間」。多数派と少数派の乖離は、文化的コンテンツの取捨選択によっても起こる。この種の問題について、アルベルト・モラヴィアは、大多数のハナムグリがバラを愛するという世界で、キャベツを偏愛するハナムグリの娘の話「薔薇」で、諧謔と哀

感を混ぜて表現している。「多数派とは違った風に生まれてきて、面倒ね。なぜどうしてそうなるのかは分からないけれど、違っているということが、それだけで欠陥、劣等性、罪悪、犯罪になる。私と多数派のあいだにあるのは、数の関係だけなのに。たまたまハナムグリの大多数がバラを愛している。すると、バラを愛することが良いということになる。まったくたいしたものね。それでも私はキャベツを愛していて、キャベツ以外は愛せない。私はそんなふうにできていて、自分を変えることなんてできやしない」(Moravia 1976, 640、原文イタリア語)。

「文学や芸術に憑かれ」と、ごく一部の状況で特別な人と見なされ、好意的に見られることもあるが、日常生活ではむしろ、それによって異端視され、社会の辺縁に押しつけられることが多いように思われる。

[3] 「自分が絶えず水中世界で揺らめいているという感覚」は、綾屋がいう「水フィルター」に似ている。彼女によると、「対人的なやりとりが追いつかなくなり、周囲からおいてけぼりをくらったと感じたときや、感覚飽和や行動のフリーズが起きたとき、ショックな出来事に触れたときなどに起きる現象」として、「3センチぐらいの厚さでぶよぶよしたビニール状のフィルターのようなものがサッと目の前を覆い、水中にいるかのように視界をぼやけさせる」ことが起こるといふ(綾屋 / 熊谷 2008, 84)。私の場合には、自分が常日頃から、この「水フィルター」に当たるものに包まれていると感じ、これを「水中世界」と呼んでいる。

水のなかでの揺らめきに関して、私にはグスタフ・クリムトの絵画(「水流」、「水蛇」、「水の精」など)が連想されてくる。私にとってクリムトの作品はそれほど親しいものではないが、水に対する感受性に親近感を抱くことがある。

「くぐもった音がずぶずぶと泡立ったり絶叫したり」するとき、裸のラリーズや灰野敬二のサイケデリック・ロックの音響世界が連想されてくる。「全体は美しい悪夢に彩られている」ため、私は好んでデイヴィッド・リンチの映画『マルホランド・ドライブ』やクリス・マルケルの映画『ラ・ジュテ』に思いを馳せる。

医学的に分析すれば、このような体験世界は第一には、ASDの感覚過敏(自注[21]を参照)に関係があるだろう。視覚や聴覚の過敏さと、そこから来る疲労が、現実を水のなかの世界のように錯覚させているのだ。第二に、ADHDによる脳の多動が、朦朧感を立ちあげているようだ。そして第三に、DCDによる自分の体をまっすぐに保てないという現象、つまり前庭覚の弱さや、「自分の身体の各部位がどうつながっているのか知覚できていないし、動くときには体をどう使えばいいのかも理解していない」感覚(ガーランド 2000, 190)、つまり固有受容覚の弱さが、水のなかにあるかのような体の動きを体感させてしまうのだと考えられる。おそらく第四に、自分の世界観に「こだわり」をもって執着するASDの特性(自注[24]を参照)が、この感覚を強化している。

脳の可塑性が高い子どものうちに、神経系の発達促進をおこなう感覚統合療法を受ける機会があったならば、このような感覚を失っていたのかもしれない(岩永 / ニキ / 藤家 2009, 39-40)。ミラーニューロンに関する仮説(自注[30]を参照)が正しければ、多くのASD者に

DCD が併発している理由は、説明できると考える。すなわち他者の動きを取りこみ、再現するのが不器用なのだ。

[4] 「さまざまな姿を見せる水」に、私は『正法眼蔵』「山水経」の、いわゆる「一水四見」の記述をよく連想する。「一般に山水を見ることは、存在者の種類ごとに異なっている。一水四見と言うように、天人は水を装身具と見るが、それでも装身具を水とは見なさない。人間が見ている何を、天人は水と見なすだろうか。天人の装身具を、人間は水と見なすのだ。水を極美の花と見なす存在者もいるが、それでもその者たちは花を水として用いるわけではない。餓鬼たちは水を猛火、膿、血と見なす。龍や魚は水を宮殿や楼台と見なす。種族によっては、水は七宝や摩尼宝珠と見なされ、樹林や垣根や壁と見なされる。水を清浄で解脱した事物の本質と見なす者もいるし、まったくの人体と見なす者もいる。外見や内面と見なす者もいる。人間が水と見なしているものが、水であるか水でないかは、水との関わり方に拠っている。見方は多岐に分かれるのだから、何かを見るときはとりあえず疑う方が良い」（道元 2006, 236-237、原文古文）。

「私は透明な膜に封印されて、しかし私は呼吸し、自分の体を操縦する」と書くときの、私を包む「膜」のイメージには、10代のころ夢中になった庵野秀明のアニメ作品『新世紀エヴァンゲリオン』が関係している。巨大なロボット風の人造人間の操縦席にいる少年少女たちは、周囲を液体で満たされたまま呼吸し、人造人間を操る。私は水のなかに飲まれながら自分の体を操縦する。水のなかに膜があり、そのなかに私がいるという構造理解には、マルティン・ハイデガーの「世界内存在」からの連想がある（自注 [7] を参照）。また、ここにはいわゆる「中動態」の発想がある。「能動と受動の対立においては、するかされるかが問題になる」のに対して、「能動と中動の対立においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題になる」（國分 2017, 88）。

東田も「僕たちは、自分の体さえ自分の思い通りにならなくて、じっとしていることも、言われた通りに動くこともできず、まるで不良品のロボットを運転しているようなものです」と語る（東田 2007, 30）。

私を包む水は、「そのつどに異なる濃度の水溶液」に感じられる。私のなかで「現実」と「想像」の浸潤の比率が刻々と変化し、それに応じて知覚や意識の濃度が変わってゆくと感じられるからだ。「現実」に対する「想像」の比率が高ければ、濃度が高まり、呼吸も苦しく感じられ、ますます自分が水溶液に圧迫されてくる印象が生まれる。

[5] ASD の世界像として、しばしば「一枚の平面的なスクリーン」としての外部世界が言及されてきた。ガーランドは、少女時代の体験世界について、つぎのように書いている。「世界は写真のように見えていた。このことの影響は、さまざまな形をとって表れた。たとえば私は、近所の家々にも内部があるということを知らなかった。すべては芝居の書き割りのように見えていたからである。自分の家の内部には空間があることは知っていたのに、その知識を、向かいの家

に適用することはできなかった。向かいの家は、紙と同じ、平面でしかなかった」（ガーランド 2000, 70）。

私の場合にも、ガーランドほど強くないが「すべては芝居の書き割りのように見えていた」という記憶がある。いまでも周囲のものごとを立体として把握することに困難を感じる場面がある。プラネタリウムが思いださせるのは、私にとって宇宙が親しいもののため（自注 [20] 以下を参照）。

[6] 「諸事物はその巨大なスクリーンの上を無制限に離合集散している」という感覚は、エルンスト・マッハの知覚世界を透かし見たもの。マッハは『感覚の分析』で、世界は要素の構成体だということ、要素とその構成体が離合集散して現象を立ちあげており、自我もまた現象にすぎず、伝統的な意味合いでの主体としての「自我」は虚構なのだと主張した。内海健は、ASDの知覚世界で「事物は一面しか自らを示さない」と指摘し、マッハが掲げた図像を示している（内海 2015, 83）。これはかなり妥当性が高い解説だが、マッハの知覚体験が図像では静態的な印象を与えるため（マッハの責任でもある）、やや誤解を招くと思われる。ASDの知覚では——少なくとも私の体験世界では——もっと脆く、流動的な印象が支配している。なおマッハ自身は、そのような知覚世界を ASD を念頭に置いてではなく、人間一般の固定観念に囚われない世界体験として記述している（Mach 1886, 1-24）。

[7] ハイデガーは、『存在と時間』で、人間の本質を「現に在る」ことを認識できる場と考えて、人間を「現存在」と呼ぶ（Heidegger 2001, 12）。事物に人間が関わるときの「周囲世界」が注目され、「現存在」の特徴は「世界内存在」と規定される（Heidegger 2001, 66）。「世界内存在」としての「人間」、つまり「現存在」の存在の仕方は、さまざまな物事や他者への「心配」にあると見なされ、人間生活の遂行が道具の使用なしに考えられないことから、道具と人間の出会われ方が論じられる（Heidegger 2001, 57; 69）。

若いころにハイデガーの論述に惹かれ、——その人間性に懐疑を抱きつつも——納得できる点が多かったことが、私の「水中世界」や「膜」に関する知覚と不可分に結びついているために、「諸実物はまた、私に向かって透明の管を伸ばし、私の四肢はそれらに結ばれ、私は何をどのように操作すべきか混乱しながら動きまわる」と感じられる。

私のこの知覚は、綾屋が「アフォーダンス」、つまり「モノが人に対して行動を促す様子」が「飽和」しているという仕方で説明しているものに、対応するだろう。「外界のあらゆる事物は私たちに、自分が何者かを「自己紹介」してくる。また同時にモノは、「食べる？」「投げる？」「歩く？」など、私の行動選択を促すような自己主張もしてくる」（綾屋 / 熊谷 2008, 68）。

より分かりやすく言えば、これは ASD 者や ADHD 者にとって、優先順位をつけるのが困難、あるいは無意味な行動に時間を取られてしまうという困り事として実体化する。ハイデガーは人間（現存在）は道具への「対処」によって「世界のうちに在ること」に「没入」していると指摘しているが（Heidegger 2001, 76）、私たちはその「没入」を平均よりも深いものとして経験

していると言える。というのも、私たちは没入から混乱の渦が起こってくるのに対処し、渦を制御するために、ますます没入するからだ。このような道具からの触発を、私自身は「周囲世界による混乱の渦」と呼んでいる。このような没入はマイクロ過集中（自注 [37] を参照）の典型的様態と言える。

ここには、やはり「中動態」がある（自注 [4]、[11] を参照）。

[8] 「神聖な連合現象」は、ハイデガーの後期思想が念頭にある表現。彼は「天、地、死すべきもの、神的なもの」の「輪」が「四方域」としての「世界」を開示すると説く（Heidegger 1954, 178）。

「世界の朦朧とした光景」のなかで、「刻々」と「連合現象」が起きると書くのは、自注 [6] に記したマッハ思想の反響。

私は、カルト宗教の元2世信者として洗脳を受け（自注 [38]、[48] を参照）それを解くために、伝統的な宗教、そして宗教性を取りこんだ思想的営為から多くを学んできた。その結果、このような神秘主義的な知覚体験や記述の思考が、私の感性と不即不離になっている。

「美しいときはエリゼの庭のように、醜いときはその庭の荒廃した姿のような景観を見せてくれる」。ジャン＝ジャック・ルソーは『ジュリ——新エロイーズ』で、その庭を描写している。私はどれほどその描写に陶醉し、自分の体験世界に密接に関わるものとして思いかえしたのだろうか。「このいわゆる果樹園に入ると、ぼんやりとした木陰、鮮やかで生き生きとした緑、四方に散りばめられた花々、せせらぐ流水、そしてたくさんの鳥のさえずりが、清々しい気持ちとして、私を包みました。それらは私の感覚にも、それと同じくらい想像力にも、届けられました」、「しかし同時に、私は自然のなかのもっとも荒れた、もっとも寂しい場所を見たとも思いました、そして私がこの砂漠に分けいった最初の間であるかのように思えました」、「あなたはその草がかなり乾燥していて、樹木がかなりまばらで充分には日陰を与えていないこと、そして水も流れていなかったことを知っていますね。でもほら、いまはみずみずしく、緑豊かで、衣装を仕立てられて、飾りたてられ、花が咲いて、水が通っています」、「私は、このように変成させられた果樹園を昂揚しながら歩きはじめました。インドから輸入された異国情緒を誘う植物や産物には出くわしませんでした。この国の食部や産物が、もっと快適でもっと心地よい効果を発揮するように統一的に配置されていることに気づきました。草地は緑豊かでしたが、短く固く刈られ、ジャコウソウ、レモンバーム、タイム、マジョラムや、ほかの香りのよいハーブと混ぜられていました。無数の野花が煌めいているのが見えたが、なかには庭同士が自然に一緒になって成長したかのように見えるものがあり、びっくりさせられました。ときどき陽光を透過できないような暗い木陰に行きあたり、きわめて深い森のようでした。木陰は柔軟きわまる樹木で成り、枝はたわみ、地面に垂れさがって、根を張っていました。アメリカではマングローブが自然におこなっていることが、人工的にしつらえられていたのです。もっと開けた場所では、ここそこで秩序も均整もなく、バラの茂み、キイチゴ、グロゼイユ、ライラックの茂み、ヘーゼルナッツ、ニワトコ、バイカウツギ、エニシダ、トリフォリウムが見られ、地面を飾って、休耕地のように見

せていました。私は、これらの花の咲く小さな森に隣りあった曲がりくねった不規則な小道を、辿っていきました。小道はハナズオウ、ヴァージニア・クリーパー、ホップ、ヒルガオ、ブリオニア、クレマチス、そしてこのたぐいのほかの植物の蔓で覆われていました。スイカズラやジャスミンも混ざるように設計されていました。それらの花のついた蔓は、樹木から樹木へとぎっくり投げられたように見え、かつて森のなかで同様の眺めに気づいたことがあります。とはいえ、それらは、私たちが砂や草もゴツゴツした芽もない、柔らかな苔の上をすいすいと快適に軽やかに歩いていると、頭上で太陽から私たちを守ってくれるカーテンのようなものを作ってくれるのでした」(Rousseau 1964, 471-473、原文フランス語)。

[9] 「出来事の記憶」の「断片化」については、自注 [38] を参照。それが「脳に焼きついてゆく」という感覚を私はつねに有する。

「水による私への侵襲」について、ガーランドが「水中世界」の感覚を抜いた形で説明してくれている。「私はときおり、遠近感を失ってしまうことがあった。こちらに近づいてくる物のスピードが速かったり、こちらが予測していなかったりすると、とてつもなく巨大に見えてしまう」(ガーランド 2000, 27)。また彼女は、暗闇に放りこまれたときのこととして、「気体」のようなものになる恐怖を書いている。「身体まで失われてしまった。上とか下とかいう概念も、もはや存在しない。どれが自分で、どれが部屋なのか、区別する感覚もない。自分が別の物質に変わってしまったような、たとえば何かの気体になってしまったような、薄まってしまったような感じだった」(ガーランド 2000, 80)。

[10] ASD や ADHD には「実行機能障害」と呼ばれるものがあり、それが日常生活を大きく阻害している。この自己エスノグラフィーの多くの部分は、この障害が私にどのように具体化しているかを説明したものと言えるだろう。

「重い潜水服を着て、ゴポゴポと音を立てながら深海に落ちてゆく」のは、ジュリアン・シュナーベルの映画『潜水服は蝶の夢を見る』の一場面の反映。この映画の主人公は、全身の身体機能を失い、わずかに動かせる左目で意思疎通をする男性。その身体感覚に対して、彼はその深海のイメージを思いうかべる。「ドレスを着た女性として水葬されてゆく」は、ビル・エヴァンスとジム・ホールによる『アンダーカレント』のジャケット写真からの連想。私は自分の一部としての女性性を(自注 [46] を参照)、感覚過敏(自注 [21] を参照)や過集中(自注 [34] を参照)に疲れてぐったりしたときの心境に重ねあわせている。

「培養液の入った水槽に浮かんだたくさんの死体」は、大江健三郎の「死者の奢り」より。「死者たちは、厚ぼったく重い声で囁きつづけ、それらの数かずの声は交じりあって聞きとりにくい。時どき、ひっそりして、彼らの全てが黙りこみ、それからただちに、ざわめきが回復する。ざわめきは苛立たしい緩慢さで盛り上がり、低まり、また急にひっそりする。死者たちの一人が、ゆっくり体を回転させ、肩から液の深みへ沈みこんで行く。硬直した腕だけが暫く液の表面から差出されており、それから再び彼は静かに浮かび上がって来る」(大江 2018, 21)。

[11] 「事物を透明にする力を振るい、すべてを透明にしようとする」。この感覚は、ウィリアムズが「恐怖心」を除くための「透視」として説明したことに妥当する。「物自体を見ずに、その向こう側を透視するように見ること、何か他の物を見ているように見える」のは、「自分のまわりで起こっていることを受け容れるため、それを視覚の上で間接的なものに変え、恐怖心を取り除こうとしている」のだと彼女は語る（ウィリアムズ 1993, 276）。

他方、「多くの場合には私だけが透明にされてしま」うのだが、これをガーランドはつぎのように表現している。「自分が透明になったような感覚、向こうから人が来ても、自分の中を通りぬけて後ろに出られそうな感覚、まるで自分が全く別の物質になったような感覚だった。感覚的にだけではない。今では、頭で考えても、周り自分との間に何らかの関係があるということが把握できなくなった」（ガーランド 2000, 169）。

透明化の問題には、おそらく人間の、あるいは生物の身体が「中動態」（自注 [4]、[7] を参照）を生きているという事実が関与している。

透明化は、宮沢賢治の場合には、歓喜として体験される。詩「種山ヶ原」の下書稿「第一形態」で彼は歌う。「海の縞のやうに幾層ながれる山稜と／しづかにしづかにふくらみ沈む天末線／あゝ何もかももうみんな透明だ／雲が風と水と虚空と光と核の塵とでなりたつときに／風も水も地殻もまたわたくしもそれとひとしく組成され／じつにわたくしは水や風やそれらの核の一部分で／それをわたくしが感ずることは水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ」（宮沢 1975, 734）。

ウタ・フリスは、ASD の基本特性を「弱い全体的統合」に見、ASD 者には「文脈を無視する独特の能力」があり（フリス 2009, 277）、「対象を一つの全体として、ゲシュタルトとして見ようとする、自然の傾向性」（フリス 2009, 278）が弱いと説明する。これは身体イメージにも妥当するだろう。綾屋は「自閉」を「身体内外からの情報を絞り込み、意味や行動にまとめあげるのがゆっくりな状態。／また、一度できた意味や行動のまとめあげパターンも容易にほどけやすい」（綾屋 / 熊谷 2008, 76）と定義する。この性質が、透明化を引きおこすと考えられる。

ADHD の診断基準には、「不注意」の例としてつぎのようなものが挙げられている。「学業、仕事、または他の活動中に、しばしば綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする（例：細部を見過ごしたり、見逃してしまう、作業が不正確である）」、「課題または遊びの活動中に、しばしば注意を持続することが困難である（例：講義、会話、または長時間の読書に集中し続けることが難しい）」、「直接話しかけられたときに、しばしば聞いていないように見える（例：明らかな注意を逸らすものがない状況でさえ、心がどこか他所にあるように見える）」、「しばしば指示に従えず、学業、用事、職場での義務をやり遂げることができない（例：課題を始めるがすぐに集中できなくなる、また容易に脱線する）」、「課題や活動を順序立てることがしばしば困難である（例：一連の課題を遂行することが難しい、資料や持ち物を整理しておくことが難しい、作業が乱雑でまとまりがない、時間の管理が苦手、締め切りを守れない）」、「精神

的努力の持続を要する課題（例：学業や宿題、青年期後期および成人では報告書の作成、書類に漏れなく記入すること、長い文書を見直すこと）に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う」、「課題や活動に使うようなもの（例：学校教材、鉛筆、本、道具、財布、鍵、書類、眼鏡、携帯電話）をしばしばなくしてしまう」、「しばしば外的な刺激（青年期後期および成人では無関係な考えも含まれる）によってすぐ気が散ってしまう」、「しばしば日々の活動（例：用事を足すこと、お使いをすること、青年期後期および成人では、電話を折り返しかけること、お金の支払い、会合の約束を守ること）で忘れっぽい」（APA 2014, 58）。

これらの特性は、加齢、専用の薬の服薬の開始、さまざまな生活上の工夫（ライフハック）によって和らげられた。

「ゲル化した半液体状の怪物として、世界の吐瀉物になって、見捨てられる」と書くから、私の不安定な身体感覚は、「見捨てられ不安」の反映と見なすことができるかもしれない。ACの典型的問題として、「見捨てられることを恐れ、見捨てられる痛みの感情を経験しないですむように、人との関係が切れないようにするためになら、どんなことでもしようとするほどだ」ということが指摘されている（アダルト・チルドレン・アノニマス 2015, 3）。自尊感情の不全が、身体感覚に影を落としているのだろう。

「恐怖」について、マッキーンはそれが「自閉症の人の感情」で「主流」を占めていると指摘する。「自分は何を怖がっているのか、本人にはわかっていないことが多いのだが、ぼくは、この恐怖は感情のオーバーロードのせいだと思う。誰のことも信用できない状態だ」（マッキーン 2003, 96）。感覚過敏（自注 [21] を参照）や過集中（自注 [34] を参照）によって、たしかに私たちは感情が積載過剰になりがちかもしれない。そうして心理的に無防備になり、それだけ恐ろしい体験をする。加えて、頻発する侵入的想起（自注 [38] を参照）や杞憂の悪癖（「4.3.」を参照）が、私たちを「怖がり」にしているという側面もあるだろう。

「ゲル化した半液体状の怪物」というイメージには、性自認と性的指向の曖昧さ（自注 [46]、[47] を参照）も関係している。

[12] ADHD の薬を飲んだり、向精神薬を飲んでよく眠ったりすることで、頭は冴える。それでも、「水の世界から出ることができる」くらい「冴えわたった」気分はなかなか得られない。

「私はその機会をいつも狂おしく求め」、銭湯やスポーツジムなどで温水浴と冷水浴を交互に何度も繰り返す。街中を歩行中、自動車事故に遭いかけたことがあったが、そのときには短時間、水の世界から完全に解放されていた。特殊な状況で平常の感覚を維持できなくなったのだと思われる。

[13] 「水からあがった私は、うるおう水際のシダ植物として佇んでいると感じる」。私は植物に並々ならぬ親しみを感じてきた。綾屋は「煩雑な人間世界のルールがよくわからない自分に寄り添い、包み込んでくれていたのは、いつも草木や花の放出する柔らかなエネルギーのようなものだった」と回想している（綾屋 / 熊谷 2008, 182-183）。東田は「実際にはありえな

い話」と断った上で、「光や砂や水に愛着を感じる自閉症の人たちには、人としての遺伝子以外にも、植物のような要素を持つ遺伝子が組み込まれているのではないかと考えると、とてもおもしろいと思います」（東田 2010, 77）、「僕たちの理想の居場所」は「森の奥深くか、深海の海の底にしかない」（東田 2007, 121）と説明している。ASD 児と定型発達児を比較すると、緑色は際立って前者に好まれやすいという研究結果もある（京都大学 2016, 1-5）。

「うるおう水際のシダ植物」のイメージには、植物への憧れが付与されている。というのも多くの植物には、雌雄両性が備わっているからだ（自注 [47] を参照）。輪廻、転生、不滅の命などを私はいっさい信じていないが、それでも来世に何になりたいかと言えば、「うるおう水際のシダ植物」ということになる。私は『碧巖録』第 82 則で、肉体は滅ぶが、真理そのものは堅固か」と問われた和尚の大龍智洪が「山の花は開いて錦のようだし、川の水はうるおって藍のようだ」と答えたことを思い出す（入矢 / 溝口 / 末木 / 伊藤 1996, 100）。私は勝手に、その山の花と川の水に並ぶものとして、水際のシダ植物を付けくわえる。

私は空気が水で溢れる雨季を楽しみに生きている。梅雨や台風は一般に嫌われているが、私には人間と世界が「同期」したかのように感じられてくる。東南アジアや南米の気候が憧れに満ちて想起されてくる。

[14] 「水中世界」は「偽りの水」と見なされ、「本物の清らかな水」への思慕がある。東田は、なぜ水中を好むのかと問われて、「僕たちは原始の感覚を残したまま生まれた人間だから」（東田 2007, 96）、現実では「自由がない」（東田 2007, 97）と感じ、「水の中にいれば、静かで自由で幸せ」だ（東田 2007, 96）、「水などが流れ続けること」も「快感」（東田 2007, 94）だと述べている。ホールもつぎのように書く。「ときどき、ぼくは海のために生まれてきたんじゃないかって感じるぐらいだ。海に関係することは何でも好き——海の声、景色、雰囲気も」（ホール 2001, 34）。

「水が光の下で青く煌めく様子」には、心が激しく揺さぶられる。私は空の青や身の回りの青いものに際立って執着する。青は ASD のテーマカラーで、国連が定めた「世界自閉症啓発デー」の 4 月 2 日には、日本でもさまざまな場所が青く光る。青は一般的にも人気のある色だが、赤の人気には劣る。ところが ASD 児のあいだでは、青は赤よりも好まれやすくもっとも人気が高い（京都大学 2016, 1-5）。ローソンも書く。「私のお気に入りの色は、深いエメラルド色、ぐんじょう色、むらさき、ターコイズ・ブルー。そして、これらの中にある色なら、なんでも好き」（ローソン 2001, 23-24）。

[15] 平常の体制のもとで知覚は不安定になる。だが当然と言うべきか、その平常の体制が崩れると、知覚はなおさら不安定なのだ。ガーランドは、聴覚情報が飽和したときの感覚（自注 [21] を参照）を「真空の宇宙にふっ飛ばされるような感じだった」と説明する（ガーランド 2000, 28）。彼女は、前転に苦労した末（DCD が原因だろう）、「とうとう思い切って転がることのできた」ときのことを「まさに身の毛のよだつ経験だった」と語る。「まっすぐ、真

空の宇宙空間に放り出され、私の感覚器官は、動きについていくことができなかった。とにかく、言葉で表すことなどできない辛さだった」（ガーランド 2000, 122）。私はガーランドほどではないが、ジェットコースターのたぐいに心から怯える。フリスのいう「弱い全体的統合」、綾屋が指摘する「一度できた意味や行動のまとめあげパターンも容易にほどけやすい」特徴ゆえに、私たちの身体感覚はかなり脆い（自注 [11] を参照）。

[16] 「孤絶」の感覚について、ウィリアムズは「ガラス張りの世界」から「行き交う人を、外の世界を」「静かに見つめている」と表現する（ウィリアムズ 1993, 7）。ローソンは自分を「永遠の傍観者」と呼ぶ（ローソン 2001, 20）。綾屋は「人々が楽しそうにしている世界は、水の中から、もしくはガラス越しに外の世界を見ているかのように、自分とは隔絶された世界だと感じる」（綾屋 / 熊谷 2008, 80）。

この感覚は容易に宇宙を連想させる。藤家は語っている。「私はいつも寂しかった。何に寂しいのかは分からないけど、いつも漠然とした孤独感で押し潰されてしまいそうだった。何万光年も離れた宇宙の片隅で独りきりであるような、そんな感じだったわ」（藤家 2004, 183）。

「宇宙空間でひとりぼっち」という表現は、村上春樹の『スプートニクの恋人』より。「枠組みがいつぱんに取り払われてしまったような頼りなさ。引力の絆もなく、真っ暗な宇宙の空間をひとりぼっちでながさされているような気持ち。自分がどこに向かっているのか分からない」（村上, 1993, 96-99）。

[17] 上の自注 [16] でも記したとおり、自分を地球外知的生命体と感じる傾向は、ASD 者に広く見られる。

グランディンは、定型発達者を理解できないと感じるときに、自分を「火星の人類学者」と感じてしまうと語っている（サックス 1997, 274）。泉は自分を「地球に生まれた異星人（エイリアン）のようなもの」と表現する（泉 2003, 262）。

幼いころに、自分のほうが特殊だと気づかない場合、逆の感じ方、つまり周囲の人間が地球外から来た者のような感じ方をすることもある。ブラウنزは、「僕の周りの人間たち」は、「まるで宇宙から僕の世界に舞い落ちる雪」に思われたと報告している（ブラウنز 2005, 16）。

ニキ・リンコは、子どものころすべてのファスナーには「YKK」の刻印があるものだと誤解していたため、そうでないファスナーを初めて見たときには「別の宇宙」に「閉じこめられてしまったのではないだろうか」と呆然としたという（ニキ 2005, 100）。彼女の個人ウェブサイトは、「自閉連邦在地球領事館附属図書館」と名づけられている。

ホールも似たような感覚について書いている。「この星では、大人がいつも自分は物知りだと思っているけど、それにはぜんぜん正当な理由がない。でも、一部の大人は許せる。ぼくは家族がいないと寂しいから、ほかの星に行って住みたくはない」（ホール 2001, 112）。

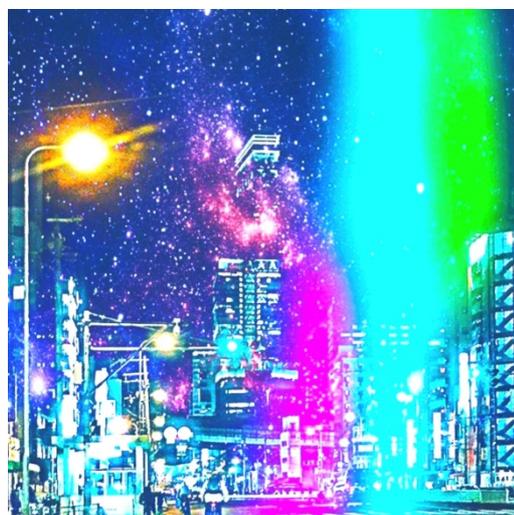
地球に「さまざまな」知的生命体が住んでいて、それが地球の知的生命体の「多様性」を保証しているという見解はもちろん「脳の多様性」（「1.2.」を参照）の観念を反映している。

「一抹の不安」があるのは、このような「脳の多様性」がオカルト的な発想と親和性が高いからだ。ASD 者の吉濱ツトムは、発達障害に関する著作で広く読者を獲得しているが、当事者としての苦難を自分で慰撫したかったのか、一部の著作ではオカルトに耽溺している。彼の主張によると、地球はもとは「地獄星」（吉濱 2016, 70）だったが、1987 年の夏ごろから地球の波動が上昇し、「苦しみを担う星」ではなくなりつつある（吉濱 2016, 86-87）。地球は 70 年から 80 年後には極楽浄土に近い「半霊半物質」の世界になり、200 年から 300 年のちには「地球人がアセンションしてプレアデス人みたいになる」（吉濱 2016, 43）。地球には「宇宙人の魂を持つ人」も住んでいて、人類は「プレアデス系」、「シリウス系」、「エササニ系」、「地球系」、「アルクトゥルス系」に大別できるという（吉濱 2016, 44-67）。彼は、発達障害者のうち「なかでもアスペルガーと ADHD は、「宇宙人の魂を持つ人」たちと極めて特性が似て」と書く（吉濱 2016, 183）。

[18] 20 世紀に都市伝説として有名になった、ふたりの人間に連行されている小さな火星に関する写真のイメージ。この写真は本来、1950 年の西ドイツで発刊されたエイプリル・フールのためのジョーク記事に使うべく、作成されたい。

[19] 「宇宙のあちこちの天体に地球外生命体がいる、地球人も含めてみなで大合唱をあげていると考えた思想家」はヨハン・ゴットフリート・ヘルダー。18 世紀のヨーロッパでは、地球外知的生命体の実在を推測する知識人は多く、ヘルダーは『人類の歴史の哲学の諸構想』で、このイメージを提出している（Herder 2002, 19）。

「本来の意味での地球外生命体の実在に関しては不可知論の立場を取っている」と書いているのは、「脳の多様性」論をオカルト絡みにされることへの忌避感があるため（自注 [17] を参照）。



[20] この感覚を再現するべく、大阪の新世界から「あべのハルカス」を眺め、撮影した写真を加工して遊んだことがある（右の写真を参照）。

この光景を見ながら、私はアーサー・C. クラークの『幼年期の終わり』を思いだしていた。「人類は 2 種類に裂かれてしまうだろう。戻り道はない。あなたたちが知っている世界の未来はない。あなたたち人類の希望や夢はすべていま終わったのだ。あなたたち人類は後継者を生んだが、悲劇的なことに、あなたたちはその後継者を決して理解できないだろう。——彼らの心と意思疎通することすらできないのだ。実に、彼らはあなたたちが知っているような心を所有しない。彼らは一個の統一体で、あなたたちが無数の細胞の総計であるのとは異なる。あなた

たちは彼らを人間とは考えないだろう。そして、それは正しい」(Clarke 2010, 216、原文英語)。

[21] ASDの感覚過敏と感覚鈍麻は、かつてはそれほど認知されていなかったが、現在では診断基準に採用されている(APA 2014, 49)。ASD者の感覚過敏の知覚世界を、池上英子は「過剰な情報を過剰なままに取り込んでいるハイパーワールド」と表現する(池上 2017, 8-9)。

ASD者たちの界限では「視覚優位」ということ、つまり私たちが視覚性を敏感に感受したり、視覚に惹きつけられやすかったりする性質がよく話題になる。実際、私の「水中世界」や「宇宙」に関する体験世界の記述(自注[3]から[20]を参照)は、私の「視覚優位」に関係して生まれていると考えられる。

ブラウنزは子どものころに、ボイラー室のドアが露で煌めいているのに感動したことを回想している。「ミルクみたいなドアの白は蛍光灯の下で見るとまるで雲のクリームみたいだ。バルコニーの白よりキラキラを見るのに向いているし、感じの良さでは空の青や砂の黄色にも負けないくらいだ。一瞬一瞬が溶け合い、時間は音をなくした」(ブラウنز 2005, 36)。私の人生にも、この種の特権的瞬間が繰り返されもたらされた。

「視覚優位」は、APDと対になる表現でもある。聴覚の過敏さ、あるいは処理の深さが混乱を引き起こすという現象は、その混乱の程度はさまざまながら、ほとんどのASD者に共通しているようだ。ガーランドは「犬の吠える声、それに、バイクやトラクター、車などのエンジン音は、私の内部で破裂して、自分の身体が周囲の世界とつながっているという感覚が失われてしまう。それは、なんの予告もなく、真空の宇宙にふっ飛ばされるような感じだった」と述べる(ガーランド 2000, 28)。東田は「音がうるさいというのとは、少し違います。気になる音を聞き続けたら、自分が今どこにいるのか分からなくなる感じなのです。その時には地面が揺れて、回りの景色が自分を襲ってくるような恐怖があります」と語る(東田 2007, 70)。

聴覚の過敏さは、別の身体感覚と合わさることで、私たちをさらに混乱へと追いこむ。綾屋は、学校でバスケットボールのドリブルが「恐怖の対象」だったと回想している。「ドリブル用の動きを反復的に繰り返す手の感覚、目で捉えているボールの反復的な上下運動、ボールが体育館の床にぶつかり、だぶんだぶんと足元から聞こえるドリブルの音や体に伝わる響き、その音が体育館の壁に反響している音」などが「バラバラな知覚情報として私の身体に戻ってくる」体験を、彼女は思いかえしている(綾屋 / 熊谷 2010, 28-29)。

私の場合は、さまざまな音が混ざりあいながら雑音として押しよせてくるのを、水のなかの独特のくぐもった音に重ねあわせてきた。それは、私の「水中世界」(自注[3]を参照)の世界観を織りあげる一要素として機能している。

綾屋はまた、プールサイドでは水が音を吸収するためプール側が低く感じられ、そちらに体が傾きそうになり、歩くのが怖いと訴えるが(綾屋 / 熊谷 2008, 62-63)、私も職場で、吹き抜けの大きな空間の傍を歩くときに、同様の不安を感じざるをえない。想像のなかで、私は何百回も転落死を遂げている。

触覚の過敏さに関して、多くの ASD 者は抱きしめられるのを嫌だと語るが、私の場合にはその感覚は分からない。しかし、服の素材や皮膚への密着度に関する不満が、ASD 者から出てくるとき、私は全面的に賛成せざるをえない。グランディンは、帽子をかぶるのが苦痛だったことを報告する（グランディン / スカリアノ 1994, 23-24）。綾屋は「首にタグが触れるのがちくちくして耐えられない」、「服は木綿 100%でないと耐えられない」と書く（綾屋 / 熊谷 2008, 60）。少女たちには、ひだ飾り、紐、レース、ポリエステル、ワイヤー、ホック、フリルなどが天敵になる（シモン 2011, 50）。私には、中学時代は制服の詰襟が、その後はタートルネック、マフラー、ヘッドホン、手袋などが苦しみをもたらした。

触覚の過敏さと矛盾するようだが、ASD 者の多くが圧迫される喜びを切実に求めている。自閉症児は猫や栗鼠さながら、「マットレスの下にもぐったり、毛布にくるまったり、好んで狭い隙間に入る」ことを楽しむ（グランディン 1997, 7）。ホールも「ちょっと変だけど、ぎゅっとぺちゃんこにされるのも大好き」と告白する（ホール 2001, 45）。グランディンが ASD のための胴体の「締めつけ機」を開発したり（グランディン / スカリアノ 1994, 120-123: 248-250）、マッキーが「救命胴衣をウェットスーツの下に着る」という「圧迫スーツ」（マッキー 2003, 152）を試行錯誤したりした話には、私も共鳴してしまう。おそらく私たちは、姿勢が傾いていることが多いために（自注 [26] を参照）、そのように圧迫され、背筋が伸びることを求めているのだろう。私の場合は、温水浴と冷水浴を交互におこなうことで（自注 [12] を参照）、水圧によっても血圧によっても自分を圧迫してきた。

嗅覚の敏感さも重要だが、私に関しては鼻腔の粘膜が敏感すぎて、花粉症の時期でなくてもつねに腫れ、そうしてむしろ周囲の匂いに鈍感になっている。藤家はプールの腰洗い（2001 年以降、撤廃）で「消毒液のにおいがきつくてこわかった」と語っているが（ニキ / 藤家 2004, 25）、私もあの悪臭には地獄の池を連想させられた。ウィリーは書いている。「生物学の授業は、学期の真っ最中にいきなり放棄してしまう。教授が私の目の前にホルマリン漬けのブタの胎児を置いたそのときを境に、二度と授業に出なかった。激しい臭いに襲われ、とても耐えられなかったのだ」（ウィリー 2002, 64）。私は理科の実習が好きだったが、理科室で嗅ぐさまざまな匂いには辟易した。

ASD の診断基準には、「同一性への固執、習慣への頑ななこだわり」として、「同じ食物を食べたりすることへの要求」が例示されている（APA 2004, 49）。偏食の典型的な例は、マッキーが自分の好みとして語ったようなものだ。「まず好きなのはピザ。ピザはシンプルでなくてはならない。できればチーズだけのがいいけど、人のおつき合いなどで、どうしても必要とあれば、ペパロニサラミが乗っているくらいは何とかがまんでできる。ホットドッグとハンバーガーも好き。ただし、外のパンは抜き。パンがついていると味が台なしになってしまう。できることなら、スライスチーズが一枚か二枚乗っているとうれしい。チーズに関しては、スイス至上主義者だ。マカロニ・アンド・チーズ（既製品より、手作りの方がいい！）、ロマンフ・ヌードル、クリームソースと粉チーズのフェトゥチーネも好き。どれも、ツナとかよぶんな物を入れずに、具なしでなくてはならない。マッシュポテトも好き（インスタントよりも本物の方がいい）だし、

母の作るデヴィルド・エッグとミートローフも好きだ。ただしこれは、ほかのみんなにも人気がある。牛乳は真っ白はいいけど、チョコレート味はだめ。粉末ジュースのクールエイド(レモン、オレンジ、グレープ、ワイルドチェリー、それに、パープルザウルス・レックスはみんなが知らないうちから作った)と、ハワイアン・パンチも好き。牛のリブステーキもとてもおいしいけど、同じ骨つきでもTボーンステーキはあまりおいしいと思っただことがない。食べられるものは以上」(マッキー 2003, 102-103)。すなわち、「ちゃんと野菜や魚も食べましょう」と叱られてしまうような嗜好だ。

このような嗜好の原因として最大のものは、味覚が過敏すぎて、味の混雑に気分が悪くなってしまふからということがある。私は小学生のあいだに「食べるときはバキュームカーになる」と念じることにし、そうして偏食を克服したが、これが私にとって人生最初の成功体験だった。とはいえ、偏食傾向そのものが治ったわけではなく、毎朝、毎昼、毎晩ずっと同じものを食べつづけても、それらが好物ならば、特に不満を感じない。

イチローがASD者かどうかという問題については、さまざまな憶測のみが語られているが、毎朝カレーライスを食べるという有名な発言は、いかにもそれらしいと感じさせる側面だ。「こだわり」に満ちた発言の数々、ASDにつねにDCDが付属するわけではないこと、不可解なTシャツを無数に集め、それらを着て人前に現れるという現役時代の挙動、引退記者会見などでの表情や体の動きなども、「やはり仲間なのだろう」と親愛の念を抱かせる。もちろん、すべては憶測でしかないのだが。

視覚や聴覚が「洪水のように押しよせ」るのを避けるために、一部の仲間たちは、サングラス、耳栓、ノイズキャンセリング・ヘッドホン、イヤーマフラーなどを愛用する(岩永 / ニキ / 藤家 2008, 159-171)。私もサングラスをありがたく感じるが、日本の因習は私がこれを常用することを許さなかった。耳に関する装着物は、耳周りの触覚過敏のために、むしろ苦痛を感じる。ただし小さなイヤホンだけなら、おおむね耐えられる。

「快楽や苦痛への敏感さは罪だと感じられ」る。「快楽」への「敏感さ」を「罪」と感じるのは、カルト宗教が私に、純潔の理想や性的行為の原則的忌避を教えこんだことの余波だ(自注[48]参照)。「快楽」も「罪」だと感じるのは、それが自分の弱さにつけこんでくるからにはかならない。ADHDに快楽に誘惑されやすい傾向があるということは、よく指摘されてきた。米国の調査によると、ADHD者の15.2%が、アルコール依存を含めた物質使用障害に陥っている(岩波 2015, 88)。別の調査では、ADHD者の50%以上が、アルコール依存と薬物依存の問題を抱えており、これは一般集団の2倍になる(岩波 2015, 60)。ADHD者のこのような傾向は、身体および脳の多動によって、ストレスが通常よりも大きいということに関係しているのではないだろうか。

ASDの診断基準には、「痛み」に「無関心のように見える」事例が言及されている(APA 2014, 49)。ASD者はしばしば苦痛への感受性がきわだって鈍いことを証言しているが、それは私とは正反対と言えるため、肉体的虐待や外科手術などで苦しんだ経験が多い私には、彼らがとても羨ましい。

ガーランドは、子どものころに学校でいじめの対象になったが、自分は「殴って面白みのある相手ではなかったかもしれない」（ガーランド 2000, 98）、「私に乱暴をしても、それはある意味では乱暴として成立しなかった」（ガーランド 2000, 96）、「ある意味で、私はいじめられてもいじめられなかった」（ibid.）と記している。彼女の場合は加齢とともに痛みに対する鈍感さが高まり、子どものころは「知覚できないといっても、特定の数種類の痛みだけだった」のだが、やがて「それが全種類に及んでいた」という（ガーランド 2000, 169）。ブラウズは、体罰として臀部を剥きだしにされ、「ハハの手が僕の裸のお尻に打ち下ろされ」たときの経験を、つぎのように記している。「怒り狂ったハハは、どんどん強く叩きはじめた。けれどその一発一発は僕の世界には届かなかった。疲れたようにハハが叩くのを止めた」（ブラウズ 2005, 129）。彼は、サッカーの怪我で膝が血塗れになり、治療を受けたときに、教師や医者への心配にもかかわらず痛みを感じなかったことも記している（ブラウズ 2005, 186-187）。私にも似た経験があるが、私の場合は悲しいことに、人並外れて「痛がり」だった。

「寒暖差への反応はむしろ鈍」い。「体温」に「無関心のように見える」ことも ASD の診断基準の実例に挙がっている（APA 2004, 49）。東田は「寒いときに、寒いと感じているのに、自分で上着を着るなど簡単な衣服の調整もできない」と記している（東田 2010, 28）。私も季節の変化、毎日の気候、室内と室外の移動に合わせて衣服の調整をおこなうことを時として困難に感じる。知覚が遅延したり、ほかの器官の感覚過敏に翻弄されたりして、気が回らないのだろう。

「疲れへの反応」が鈍いことは、仕事への支障になりやすいため、私は普段からよく自分の体調を気づかっているが、それでも自覚しにくい。米田衆介は「自己モニター障害特性群」（米田 2011, 65）という語で、この種の性質を表現している。この性質の原因は視床下部や脳幹の機能にあるようだ（岩永 / ニキ / 藤家 2009, 65）。ASD 者は、喉の渇き、空腹感、体温、満腹感、病気の兆候など内受容感覚に鈍麻の傾向があるとの研究も提出されている（Fiene / Brownlow 2015, 709-716）。

「共感覚」、つまり色や図形に音色や匂いを感じたり、聴覚や味覚が色彩として受容されたり、文字や数字が鳴ったり香ったりするのを知覚する感受性が、私には欠けている。ASD 当事者は共感覚を持つ確率が高いようだから（池上 2017, 245-252）、このことは残念でならない。共感覚ではないが、幼いころに感覚の些細なもつれのようなものがあつた。ジャクソンは、「灯りが急に点いたり消えたりしたときに、あわてて耳をふさぐ」、「キツイにおいがするからって、ぎゅっと目をつぶって」しまうなど、ASD 者には「複数の感覚が混線することがけっこうある」ことを指摘する（ジャクソン 2005, 106）。室内での光に対する敏感さは、LED 照明が普及してから緩和された。私には「光くしゃみ反射」があるが、これは定型発達者にも広く見られる。

「火」と「薔薇」は T. S. エリオットの『四つの四重奏』、「リトル・ギディング」より。「すべての人に幸いになり／すべての物事に幸いがあるときとは／炎の舌が火の王冠に結ばれて／火と薔薇とが合一するときだ」（Eliot 1944, 44, 原文英語）。「鳥の声」と「私の心」と「雲」と「水」は空海の詩より。「夜明けの時刻、静かな林の草堂にひとり座している／一羽の仏法僧

が鳴いている／一羽の鳥の鳴き声が、人間には心になる／鳥の声と私の心と雲と川の水がともに悟られてくる」（空海 1984, 776; 677、原文漢文）。感覚過敏によって、詩を理解するための私の素養も耕された。

[22] 「聴覚情報がしばしば雑音が高まるラジオ放送のように感受され」る経験は、聴覚情報処理障害（自注 [21] を参照）によって起こるが、他者との断絶感（自注 [16] を参照）も動因になっているのかもしれない。

ブラウنزはこの「響きも意味も聞きとることができな」い「雑音」のため、つぎのような自己の特徴が形成されたと考えている。「僕の中に静寂が訪れた。僕の世界を他人と分かちあいたいという衝動が失われた。僕の唇は疲れて動かなくなった。僕がなにかを言うと、舌からは病んだ言葉が引きずり出されてきた。僕が話す文章はだんだん簡素に、短くなっていった。各音節は乾ききり、埃のようになった。やがて僕は、どもりながらしか話せなくなった」（ブラウنز 2005, 17）。

私は音が聞こえるのに音の処理ができず、意味が分からないというこの状況から、村上龍の『五分後の世界』をよく思いだす。「四声の弦がゆっくりと低く異様に長い音で流れ始めた。小田桐に、ワカマツの言葉が蘇ってきた。ドイツ帝国の崩壊を知ったりヒヤルト・シュトラウスが遠くから砲声が聞こえるゲーミッシュの山荘でこの曲を書いている姿がボクには見える、ちょうどノルマンディの海岸でドビュッシーが『海』のモチーフを掴んだみたいに、本当に映画の一シーンのようにありありと見えるんだ。自分の老いと第三帝国の終末が重なって、ベートーベンやワグナーの旋律を核にして絶望と美の結晶の変奏曲を書いた、ボクはそれを小節単位でバラバラにして導入部を作ったんだけど、それはたぶん永遠に終わることのない美しい耳鳴りのようなものになるはずなんだ、聞く人が何か他のものへの飢えをはっきりと感ずることができるよう、出口を見つけたくて発狂しそうになる暗い洞窟に引き込む、誰も身動きさえできないような暗く湿って死の匂いのする洞窟で、入ったら最後、足を動かすどころか呼吸をすることも忘れてしまう、それで洞窟の方が動き出す、エスカレーターのようにさらに闇へと聞く人を運んでいく、洞窟が生きているのがわかるだろう、巨大な動物に食べられてしまったようなものだ、ある意志の力をしだいに強く感じるはずで、洞窟の出口にあるものがその意志を具体化したものだと気付いた時、人々は恐怖を忘れて走り始める、意志の力ははっきりしない、突然足先に冷たい感触がよぎる、出口に通じるもの、意志の正体に触れたと感ずる、それはとても小さいが荒れ狂う大河につながる水の流れなんだ、その水の流れそのものが、洞窟を支配していた意志の力の具体化なんだ、そして、その水の流れとはもちろんビートのことなんだよ。その耳鳴りは、巨大な円筒形の超低音用スピーカーからの地鳴りのような音を加え、ほとんど耐え難いとさえ感じられるものになった。それも音がうるさいとか、ハーモニーが不快であるとか気持ちよく聞いているのに途中で音が切れるとか旋律が単調で退屈するというわけではない。危うい均衡の三声の弦の響きに、それとははっきりわからないように音量や音色やピッチに手を加えてこっそりと不協和となる音を加えられる」（村上 1994, 198-199）。

ASD 者のオウム返しは「エコラリア」（「反響言語」の意味）と呼ばれ、ASD の診断基準の事例にも入っている（APA 2014, 49）。相手の発言をオウム返しにするほか、自分のつぶやきを反復するなどの行動がある。

ブラウنزはメレンゲを意味する「ベゼー」や蒸気ローラーを意味する「ダンプフヴァルツェ」を何度も唱える癖があったこと（ブラウنز 2005, 27-30; 45）、母親から「やめなさい！ オウムじゃないんだから！」と叱られたことを回想している（ブラウنز 2005, 193）。グランディンは「テープレコーダー」という綽名を付けられたという（グランディン 1997, 37）。

私にも同じようなオウム返しの癖があり、村上春樹の作品で主人公がしばしばオウム返しをするのに親近感を覚える。また、実際に口にしなくても、心の中では頻繁にオウム返しが起こっている。買い物のときに店員が言った「532 円お預かりします」や古い友人が言った私への「ツッコミ」の「なんでやねん」といった現実での会話のセリフ、『ラ・ラ・ランド』を劇場で見たときに聞いた〈OK, I was an asshole. I can admit that.〉、劇場アニメ『機動戦士ガンダム III めぐりあい宇宙編』を DVD で見たときに耳にした「人はいつか時間さえ支配することができるさ」のような創作物上の音声、遠藤周作の小説『沈黙』で読んだときに天から聞こえてくるような気がした「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている」（遠藤 1999, 312）のような、本来は音声がない創作物での想像上の疑似的な音声、さらには印象に残った作品の題名などが、無際限に頭のなかでオウム返しを起こしている。

これらのオウム返しがなぜ起こるのかは、分からない。ASD 者が、気に入った言葉を何度も繰り返すことで快樂を得ているという可能性はある。だが、上に挙げた私の例でいうと、気に入った言葉もそうでもないものも混ざっている。重要度の高い情報や濃密な情報の処理に時間がかかり、それらが反芻されている可能性がある。オウム返しは記憶のなかにあるものを呼びさましておこなわれることもあり、そのときにはフラッシュバックに似たものになる。ASD 者のフラッシュバックは必ずしもトラウマに関係しておらず、記憶の重要性に関係がないことが多い（自注 [38] 参照）。

[23] 私は ASD 者として、診断基準にもある「こだわり」の特性（自注 [24] を参照）によって、「神経質に細かい」、「自分でも冷や汗が出るほど頑固なことがある」、「関心の範囲が狭く深い」などの側面を持ち、他方で ADHD 者として、その「不注意」の特性（自注 [11] を参照）によって、「大雑把なことがある」、「気まぐれで寛大でもあり」、「しばしば無理に手を広げようとしてしまう」。

「自分を「ウインスロー」、「キカイダー」、「オドラデク」などの怪物の名で呼んで、苦笑いすることもある」。名を挙げたキャラクターは、いずれも私にとって、悲しさと可笑しさがめちやくちやくに混融して見える者たちと言える。ブランアン・デ・パルマの映画『ファントム・オブ・パラダイス』の主人公で、顔と声を潰され、仮面を被って生きるウインスロー。石森章太郎（のちに石ノ森章太郎）のマンガ『人造人間キカイダー』の主人公ロボットは、人体模型をモチーフにした、青と赤が混ざった全身や脳部が透けて見える頭を有するデザインで、その怪物っ

ばさに私は親近感を覚える。フランツ・カフカの短編「家父長の懸念」に登場する正体不明の生き物、「オドラデク」。「それは、パッと見たところ、平たい星型の糸巻きのような。実際に糸が巻きついているようだが、しかし古いフェルトの糸屑を種類も色も違うのを気にせず繋ぎあわせたようだ。ただの糸巻きではなく、星型の真ん中から小さな棒が突きでていて、別の小さな棒が付いている。オドラデクは、その別の小さな棒と星型の本体の先端のひとつを両足にして立っている」(Kafka 1994, 282-283)、「それは屋根裏にいたり、階段にいたり、廊下にいたり、玄関にいたりする。しばしば何ヶ月も姿を見せないが、よそのうちに引っ越しをしていたのに、きつとまた戻ってくる。扉をあけると、ちょうど階段の手すりに寄りかかっている」(Kafka 1994, 283)。

[24] ASD 者をもっとも特徴づける性質は、その強烈な「こだわり」(固執)かもしれない。診断基準には「強度または対象において異常なほど、きわめた限定され執着する興味」が言及され、例として「一般的ではない対象への強い愛着または没頭、過度に限局したまたは固執した趣味」(APA 2014, 49) が述べられている。

ガーランドは母語の学習に関して、「綴りかたが何通りもある単語が出てくると、私は全部のスペルを知っていて、一番古典的な、語源に近いスペルに固執した。それが一番正しいスペルだと信じていたからである」と書いている(ガーランド 2000, 160)。私も日本語の学習でそのようなことを体験し、使いたい単語や構文と使いたくないそれらを峻別することに夢中になった。

「同じ動きを反復して誤作動を起こすことが多々ある」ことを含めて、「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」があること、「常同的または反復的な身体の運動、物の使用、または会話」をおこなうことは、ASD の診断基準に入っている (APA 2014, 49)。

東田は「じっとしていると、本当に自分はこの体に閉じ込められていることを実感させられます。とにかくいつも動いていれば落ち着くのです」(東田 2007, 134) と記す。行動はきわめて多くの場合に、独特の「こだわり」にもとづいた反復的なものになり、「常同行動」や「儀式的行動」、または「自己刺激行動」とも呼ばれる。ガーランドは曲面のあるものに触りたがるという行動を「必要に迫られてやっている」(ガーランド 2000, 8) と述べ、互いに隙間なく密着するものや嵌るものにも執着したことを報告している(ガーランド 2000, 23-24)。

その他、つぎのような行動が典型的と言える。「ボールやトランポリンの上で弾む、おもちゃで遊ぶ、腕を振る、特定の布地をこする、つめを噛む、身体を揺らす(前後あるいは左右に)、物を回す、リズムをつけて足を蹴るように動かす、何かを太鼓のように叩く、左手の甲で顔をこする、くねくねと身をよじる、親指と薬指を打ち合わせる、歩き回る、身体をふらふらと揺らす、脚を頻繁に組み変える、覚えたことをささやく、指で物をはじく、指をぶらぶらさせる、あるいはこすり合わせる、人前でもかかるとに重心を置いて身体を揺らす、一定の音で鼻歌を歌う、歌う、同じことを繰り返す、ひとりごとを言う、腹部をこする、犬を撫でる、雲を見つめる、好きな映画を何度も見る、文章の音節に合わせて呼吸をする」(シモン 2011, 61)。

私自身もよくよく集中しないと、これらの行動のいくつかをやってしまう。外出できず、温水浴と冷水浴を交互に繰り返すこと（自注 [12] を参照）ができないとき、温水シャワーと冷水シャワーを交互に浴びることで代用するが、冬には1日に2回、夏には5回も6回もやってしまうことがある。このような行動も、常同行動に近いと感じる。毎日同じものを食べたがる（自注 [21] を参照）のもそうだろう。これらの行動は感覚過敏などによるストレスの除去のために発生すると推測される。

常同行動は、チックにも似たところがある。チックは子どもには珍しくないが、医学ではASDやADHDとともに「神経発達症群」に分類されている（APA 2014, 79-84）。

ASDの常同行動は、ADHDの多動と不分明なところがある。ADHDの診断基準には、さまざまな種類の「多動性および衝動性」が挙げられている。「しばしば手足をそわそわ動かしたりトントン叩いたりする、またはいすの上でもじもじする」、「席についていることが求められる場面でしばしば席を離れる（例：教室、職場、その他の作業場所で、またはそこにとどまることを要求される他の場面で、自分の場所を離れる）」、「不適切な状況でしばしば走り回ったり高い所へ登ったりする（注：青年または成人では、落ち着かない感じのみに限られるかもしれない）」、「静かに遊んだり余暇活動につくことがしばしばできない」、「しばしば「じっとしていない」、またはまるで「エンジンで動かされているように」行動する（例：レストランや会議に長時間とどまることができないかまたは不快に感じる、他の人には、落ち着かないとか、一緒にいることが困難と感じられるかもしれない）」、「しばしばしゃべりすぎる」、「しばしば質問が終わる前に出し抜いて答え始めてしまう（例：他の人達の言葉の続きを言う、会話で自分の番を待つことができない）」、「しばしば自分の順番を待つことが困難である（例：列に並んでいるとき）」、「しばしば他人を妨害し、邪魔する（例：会話、ゲーム、または活動に干渉する、相手に聞かずまたは許可を得ずに他人の物を使い始めるかもしれない、青年または成人では、他人のしていることに口出ししたり、横取りすることがあるかもしれない）」（APA 2014, 58-59）。

黒柳徹子は『窓ぎわのトットちゃん』で、かつての自分の教室での様子を担任教師に語らせているが、これは典型的なADHD児童の行動だと見なされてきた。「まず、授業中、机のフタを、百ぺんくらい、開けたり閉めたりするんです。そこで私が、『用事がないのに、開けたり閉めたりしてはいけません』と申しますと、おたくのお嬢さんは、ノートから、筆箱、教科書、全部を机の中にしまっけてしまっけて、ひとつひとつ取り出すんです。例えば、書き取りをしますと申すね。するとお嬢さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン！ とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭をつっこんで筆箱から“ア、と書くための鉛筆を出すと、いそいで閉めて、“ア、を書きます。ところが、うまく書けなかつたり、間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭をつっこんで、ケシゴムを出し、閉めると、いそいでケシゴムを使い、次に、すごい早さで開けて、ケシゴムをしまっけて、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、“ア、ひとつだけ書いて、道具をひとつひとつ、全部しまっけてしまいます。鉛筆をしまっけて、閉めて、また開けてノートをしまっけて……というふうに。そして、次の“イ、のときに、また、ノートから始まっけて、鉛筆、ケシゴム……そのたびに、私

の目の前で、目まぐるしく、机のフタが開いたり閉まったり。私、目がまわるんです」(黒柳 1981, 13)。

私は「自分自身の全身を統制下に置くことに手を焼いている」。仲間のうち、全身の動き(粗大運動)も手先の器用さ(微細運動)も優れている者は稀な例と言える。微細運動に優れ、粗大運動に劣る者はそれなりに多い。私は粗大運動も微細運動も劣っている。

[25] ASD 者も ADHD 者も、しばしば「ワーキングメモリー」(作動記憶)が不足していることを嘆く。ワーキングメモリーの不足によって、行動に失敗したり大事なものごとを失念したりする危険が増す。感覚過敏(自注 [21] を参照)と多動(自注 [24] を参照)によって、その容量が圧迫されているのかもしれない。

部屋の整理、つまり「片付け」は ADHD 者(もしくは ADD 当事者、つまり「多動」がない注意欠如症者)の困りごととして、比較的よく知られている。デイル・ジョーダンは、ADD の成人が片づけできないのは「頭の中のイメージをきちんと保存できない」、「最初に受けた印象がすぐに変形してしまう」、「頭の中にあるパターンにまとまりがない」、「(ADD 成人の)脳は、時間、空間、モノに関して、整ったイメージを持続させることができない」からだと言っている(ソルデン 2000, 105)。

「私は部屋の整理という長年の問題を、自分の部屋を神話的空間めいたものへと仕立てることで解決した。自分の強い「こだわり」(自注 [24] を参照)を利用して、自分が特別に大切にしたいと感じるものだけを所有し、自分なりの楽園を構築するように工夫したのだ。そうすることで、部屋を「神話的空間めいたもの」に変貌させ、またその状態を維持しようとする強い思いが生まれた。

部屋をそのように整えているあいだ、ギュスターヴ・フローベールが『感情教育』で記述したフォンテーヌブロー宮殿の祝宴の間の記述が何度も思いだされた。「彼らは目が眩んでしまった。壮麗な天井は八角形の区画ごとに区切られ、金と銀とで飾られ、宝飾品よりも彫琢されている。しかも溢れるほどの絵画があり、それらは三日月と矢筒に囲まれた、フランスの紋章を上に乗せた巨大な暖炉から、ぐるっと回った反対側にある、部屋の幅だけある演奏家たちの席にいたるまで、広がっていた。円蓋の形をした十個の窓は大きく開けはなたれ、太陽が絵を煌めかせて、海のような青色の丸天井が、空の青へとどこまでも通じていた。森の梢が地平にぼんやりと広がり、その奥の方から、獲物を追いつめていることを伝える角笛が響いてくるような気がした。女精霊のニンフたちや森の男神シルヴァヌスに変装した貴族の姫君や領主たちが、木陰に集まって演じる、神話を題材に取った舞踊の音楽が、聴こえてくるような気がした」(Flaubert 1964, 321-322)。

大切な物事の失念は、ADHD 者の「注意欠如」に関する主要な困りごとと言える。これに関して、定型発達者から誰でもそういうことはあると反論されることもあるが、立入勝義が書くように、私たちの場合は、その困りごとの発生頻度が「晴れ時々曇り」ではなくて、「雨時々曇り」という違いがある(立入 2017, 84)。この違いは大きい。私の場合には、何年間もつねに同じ

カバンを使う、貴重品はすべてまとめてひとつの場所に収納する、なるべく細かな買い物をしないなどの工夫によって、この問題をほぼ解決している。

私たちの多くには、迷子の達人としての側面もある。情報の整理が困難という点で、片付けや失念と同種の問題と考えられるが、加えて、私たちがしばしば左右盲だからということや、空間の立体的把握が困難だということ（自注 [5] を参照）も関係していると推測される。綾屋が心のなかで道を撮影できると書くとき、彼女がこの問題と無縁ではないかと推測されるため、私は羨ましく感じる。「新しい道を歩いている際は、角を曲がるごと、目印になるものがあるごとに、道中の景色に対して、あえて意識的にシャッターを押すこともある。それは、帰りに迷子になったら困るという不安や、もし次回に来たときには、撮っておいた写真を引っ張り出して照合し「もう知っているから大丈夫」と思って安心したいという思いからくるものである」（綾屋 / 熊谷 2008, 89）。私にはこの能力はなく、碁盤目状で有名な京都の中心部でも道に迷うことが多い。だが iPhone を開いて地図アプリを展開し、さらにやはり iPhone に内蔵されているコンパスを併用するという手法で、街中での深刻な遭難を切りぬけてきた。

[26] 私にとって自分の「操縦」はつねに困難だが（自注 [4] を参照）、仲間たちの一部ほどではない。藤家は「疲れたときには歩くことさえ自然にできません。「右、左、右、左」と自分に言い聞かせながら歩きます」と、ニキは「私の場合は、ふだんはオートマティックに歩いているんだけど、その代わりオートマティックすぎて、はっと気がついたら歩いているかどうか、耳で聞かない限りはわかりにくいんです」と語っている（ニキ / 藤家 2004, 114-115）。私に関しては、歩くときは自動的にマイクロ過集中（自注 [37] を参照）が発生する。なかば神秘的な状態に没入してしまい、歩きやめたあとにそこから抜けだすのに時間がかかる。

歩いているときの身のこなしは悪いが、その原因は明らかに DCD だろう。ASD の「診断を支持する関連特徴」には、「奇妙な歩き方」が指摘されている（APA 2014, 54）。ブラウンズは徴兵検査で、医者に「斜めに傾いて」と指摘されたことを記述しているが（ブラウンズ 2005, 375）、私も独特の傾き方をしているとよく指摘される。

内観での「ズシーン、ズシーン」は、他者には「ペタリ、ペタリ、ペタリ」になる。ASD 者の主観的な体験世界と外界は、そのように断絶している。「ズシーン、ズシーン」と、「ペタリ、ペタリ、ペタリ」は同じく本質的と言え、どちらかが誤っているとは思えない。

「亡霊めいて歩いている印象」は、疲れているときにはもちろん高まる。私はよく長谷川和彦の映画『太陽を盗んだ男』を思いだしながら、疲労を引きずって歩いている。この映画の最後で、沢田研二が演じる主人公は、核爆弾の爆発を待ちながら、フラフラと街中を歩いてゆく。若かったころには、その沢田研二の歩き方をわざと真似た時期もあった。このような独特の「こだわり」にもとづいた行動、「厨二病」（中二病）と言われてしまうような行動は、「常同行動」（自注 [24] を参照）や「オウム返し」（自注 [31] を参照）に通じるだろう。

[27] この事情を綾屋は「所作の侵入」と「キャラの侵入」という用語で説明している。私は両者をまとめて「他者性の侵襲」と呼んでいる。

綾屋は「所作の侵入」について、「何気ないおしゃべりでも真剣な打ち合わせでも、話者に集中して話を15分も聞いていると、その人の顔の筋肉の動かし方や手の動かし方などに対し、「おやっ!？」という軽い衝撃が走る。無自覚ではあるが、そのときから自動でカメラの連続シャッターを押すように、記録が開始されている。そして次に自分が「表出する機会」を得たときには、自分が今まで使ったことのない筋肉を動かし、先ほど記憶された表情や動作を作り始めるのが自覚される」と説明する（綾屋 / 熊谷 2008, 104）。

この現象は、「テレビドラマや映画、舞台演劇を見ても生じる」（ibid.）。「本来の自分のキャラが消えるわけではないので、侵入してきた他者のキャラを異物として感じつづける苦しみがある。他者のキャラが大きく膨らんで押し寄せてくるのを感じ、押しつぶされて乗っ取られそうになりながら、それでも「自分」は消えずに存在しつづけ、小さくなって殻をかたくして、必死であえぎながら抵抗するのである」、「その異物に悩まされ、排出しようと葛藤する苦しみは、悪いものを食べたあと、食中毒になって苦しむ感覚に似ている」（綾屋 / 熊谷 2008, 110）。

「キャラの侵入」について、彼女は宴会を例として説明している。「談笑する人びとの対話の様子を眺めているうちに、それぞれのキャラ情報が、無意識のうちに大量に私のなかに蓄積されていき、家に帰ってひとり静かになったときにビデオ再生が始まる」（綾屋 / 熊谷 2008, 109）。つまり侵入的想起（自注 [38] を参照）だが、これによって「彼らの姿はしっかりと焼きつき、一定期間、何度もビデオ再生されることで、私のキャラを侵食しはじめる」（綾屋 / 熊谷 2008, 109-110）。

ASD や ADHD の当事者界限では、しばしば「自他分離」の重要性が話題になる。私たちの意識では、「自他」が頻繁に融合してしまう。その結果として、私たちの自我に対する「他者性の侵襲」は発生する。

[28] 上の自注 [27] で述べたとおり、私たちには、「他者性の侵襲」に無防備な面がある。この特徴によって、私たちのうちには、他者の長所を自分へと写しとることも得意とする者もいる。ウィリーは「まるでプロのパントマイム俳優のように、ほかの誰かのパーソナリティをそっくり拝借してしまうのだ。風邪をひいている人と接すると風邪が伝染するように、相手のパーソナリティが簡単に伝染してしまう」（ウィリー 2002, 96-97）と説明する。彼女はこれを「エコラリア」（自注 [22] を参照）の「発展したものにすぎない」と解釈している。

私たちの界限では、この現象は「擬態」と呼ばれている。「擬態」にはもちろん利点があり、人の能力を自分に写しとる魔法めいた力と言える。しかし、どちらかと言えば擬態はしばしば破壊に繋がるし（自注 [37] を参照）、擬態の精度は必ずしも高いとは言えない。ミラーニューロンに関する仮説（自注 [30] を参照）が正しければ、擬態の精度が必ずしも高くないことの説明はつくかもしれない。

[29] 「アスペルガー症候群」の概念を広めたローナ・ウィングは、この症候群と古典的自閉症（カナー型自閉症）に共通する特性、すなわち ASD の特性を「社会的相互作用」（social interaction）、「意思疎通」（communication）、「想像力」（imagination）の障害と考えたことで知られる（Wing 1981, 115-129）。

ウィングのいう「想像力の障害」について、ニキは「想像力が、世俗の生活の役にたってくれない障害」と説明し、「想像が足りない」、「想像がまちがっている」、「想像が過剰」という3種に区分している（ニキ 2007, 9-10）。このうち、特に「想像が過剰」という性質の意味合いは、否定的にも肯定的にもなるだろう。

藤家は、かつて外国というものをうまく想像できなかったという。「人がぼぼぼぼぼっているというのはわかるんですけど、その人に中身があるとは思わなかったです。それぞれ性格があったり、好みとか、そういう色々な要素があるというのがわからなくて、ただマネキンみたいにいっぱいいるんだなと思っていました」（ニキ / 藤家 2014, 37）。これは「想像が足りない」あるいは「想像がまちがっている」例と言える。しかし、マッキーの例のように、心のなかの空想世界が「もう一つの現実」と呼びうるような、幻想文学的な規模まで成長する事例があり（マッキー 2003, 136-142）、これは「想像が過剰」な例をよく体現している。

ウィングのいう「想像力」を、他者の心に対する想像力、つまり「共感」と考えれば、この「想像力」という語の含意はかなり分かりやすくなる。

フリスは、人間の共感能力を「本能的な同情」と「意図的な共感」のふたつに区別する（フリス 2009, 206-207）。前者は「自律神経系の反応を伴う、自然にあふれ出る単純な感情反応であり、それは心理化の能力を必要とし」ないもので「内面の哀れみの心」を作りだす（ibid.）。後者はそれに対して「心理化の能力が必須の条件」で、「心の状態を読みとる」ことを可能にし、それによって「他人が不幸に襲われたときの悲しみをたとえ自分は実際に感じなくても、それを理解して適切な応じ方をしてあげられ」るようになる（ibid.）。

ASD 者の共感の問題は「心の理論の障害」、つまり「相手の行動からその背後にある見えない意志を推論することの障害」（熊谷 / 國分 2017, 14）としても知られる。これを ASD 者に帰属する「障害」と見なして良いのかどうかについては、のちに自注 [33] で私見を述べる。

私と仲間たちは、「サイコパスと誹謗されることがあ」る。フリスは、ASD とサイコパシー（精神病質）の違いについて言及している。彼によると、ASD 者は「意図的な共感」（自注 [29] を参照）が弱いために、「周囲の人から冷たい人間だと誤解を受ける」（フリス 2009, 207）。そのために、しばしば ASD 者はサイコパス、つまり表面的には魅力的ながら良心や罪悪感が欠如した精神病質者と混同される。しかしフリスが指摘するように、サイコパスには「本能的な同情が欠如し」、他方で「心理化の技能は卓越」している点で ASD 者とは決定的に異なっている（フリス 2009, 209）。サイコパス児と ASD 児を比較すると、悲しみや恐怖を浮かべた人間の顔の写真を見たときに、前者では感情が高まらなかったのに対して、後者では「健常児」と同様に感情が高まったという（フリス 2009, 210）。

「雑談に苦しみを感じ」ということは、私たちのあいだでよく話題になる。私は「雑談サバイバル」や「雑談サバイバー」といった言葉を使って、この問題を検討している。米田衆介は、「アスペルガー障害」の「中核的特性」を、「注意、興味、関心を向けられる対象が、一度に一つと限られている」という「シングルフォーカス特性」、「同時的・重層的な思考が苦手、あるいはできない」という「シングルレイヤー思考特性」、「「白か黒か」のような極端な感じ方や考え方」をするという「知覚ハイコントラスト特性」の3点に見ているが(米田 2011, 64-65)、雑談が起こるとき、私たちはこれらの3つの特性によって処理しがたい言語空間に放りこまれている。焦点をどこに絞って良いのかが判然としないまま、多層的な話題が人々の「常識」というあやふやな基準に応じて移ろい、すべての印象は曖昧に動いてゆく。それが、私たちにとっては心理的負担になる。

「雑談サバイバル」の有効な方法として、雑談を「何を問題にしているか」という謎解き、あるいは研究の時間として把握しなおすことが有効と思われる。そうすることで、多くの雑談は「シングルフォーカス特性」、「シングルレイヤー思考特性」、「知覚ハイコントラスト特性」によって処理できるものへと変質する。ただし、それは相手が雑談の変質を許容してくれるような場合に限られるかもしれない。

「いわゆる「地雷」を踏むことにかけては名人級」という表現には、ブラウンズの記述が反響している。ドイツ語では「地雷を踏む」ことを「小鉢(ネプヒェン)を踏む」というが、ブラウンズは「自閉症者は、そのネプヒェンのすべてを踏むことにかけては達人だ」と書いている(ブラウンズ 2005, 11)。

私が「自分の辺縁に女性性を感じる」ことについては自注 [46] を参照。

「女心」に関する経験を、ブラウンズはつぎのように回想している。「バーバラがきいた。／「私があんたよりペーターのほうが好きだと、いや？」／バーバラは鮮やかな影だ。ペーターも鮮やかな影だ。答えは明白だった。／「ぜんぜん」／バーバラは泣きながら走って行ってしまった。どうして泣いたんだろう？」(ブラウンズ 2005, 162)。ブラウンズの用語「鮮やかな影」については自注 [30] を参照されたい。

この「いわゆる「女心」」は、女性の ASD 者にとっても難解なものだ。彼女たちはしばしば私に、女同士の共感の文化が疲れると吐露してくる。

バロン=コーエンは、「アスペルガー症候群」の由来になったハンス・アスペルガーの見解を再発見し、ASD 者の脳を「極端な男性型の脳」と呼んでいる。バロン=コーエンによると、「男性のすべてが男性型の脳を持っているわけでもなければ、女性のすべてが女性の脳を持っているわけでもない」(バロン=コーエン 2005, 21) が、人間にはシステム化に優れる「男性脳」と共感に優れる「女性脳」があり、システム化の能力に関しては、一般集団では女性よりも男性が優れ、ASD 当時者はさらに優れていて、他方で共感能力に関しては、一般集団の男性は一般集団の女性に劣り、ASD 者はさらに劣っている(バロン=コーエン 2005, 260-266)。

とはいえ、ASD 者はしばしば物事を「まとめる」のが困難だと語る。この事実は、彼らがシステム化に傑出した「極端な男性脳」を有しているという仮説に、あまり適合しないように見え

る。また ASD 者が共感に優れていないという見解は、自注 [33] に述べるように、必ずしも正確ではない。

[30] 私の「微弱な吃音」は、興奮しながら喋るときに発生する。他者との断絶感が強く意識されるからかもしれない。

「視線の同調圧力が疎ましく感じられ」ることを、ASD 者はよく悩んでいる。ASD の診断基準には、「視線を合わせること」の「異常」が挙げられている (APA 2014, 49)。内海は「ASD の基本障害」は「他者からこちらに向かってくる志向性に触発されない」ことだと述べる (内海 2015, 45)。村上靖彦は、私たちが視線を合わせることを苦手に行っている特性を持っていることに関して、「視線触発」という用語を使いながら、それが ASD 者にとって侵襲的な「不意打ち」として働くと指摘している (村上 2008, 20-21)。

村上は、「視線恐怖のために授業に出席するのが困難になってしまった自閉傾向を持つ学生」は「しばしば、「目を見て話さない」というしつけを受けてきており、しかもまじめであるためにそれを守ろうとしてかえって苦痛を増していた」こと、「「目を見て話さなくてもよい」とアドバイスすると、彼らは安堵する」ことを説明している (村上 2008, 21)。ブラウنزは、恋人から「あなたにとっては、私のまなざしなんてどうでもいいのね。前から気がついていただけ、二人で話すときだって、絶対に私の顔を見ないじゃない」と指摘されたことを回想している (ブラウنز 2008, 398)。

この問題は、なるほど私たちが他者からの志向性 (視線) に刺激されにくいために起こっているのだろうが、他方で私たちには、他者の影響に対する強い被刺激性も備わっている (自注 [27] を参照) ことは強調しておきたい。私は、この視線に刺激されにくいという問題を、むしろ周囲の視線からの刺激による感覚の過剰が原因だと考えている。私たちは「周囲世界による混乱の渦」という形で、周囲の事物から過剰な刺激を受け (自注 [7] を参照)、内面では侵入的想起によって、過去の記憶からの刺激 (自注 [38] を参照) を受けている。そのため、他者の視線に注意を促されることが困難だったり、視線に応えるために努力することにストレスを感じたりする。

「顔を忘れることでは卓越した水準にあ」るのも、ASD 者にはなじみ深い問題と言える。仲間によっては、相貌失認 (失顔症) を併発している例もある。

ガーランドは子どものころ、「人間とは一人ずつ顔が違うものだということを知らなかった」と語り (ガーランド 2000, 44)、初めて保育園に行ったときの経験を、「この世に顔のない人があんなに大勢いるなんて知らなかったし、あんなに完全に顔のない人がいるなんて知らなかった」と回想している (ガーランド 2000, 68)。ブラウنزは、人間を 2 種類に大別していたと述べている。「一方がよい生き物たちで、これは鮮やかな影。もう一方は僕に脅威を与える生き物たちで、これはコウモリ。鮮やかな影がなんの前触れもなく突然コウモリに変身することもあるし、その逆もある。それがどうしてなのかわからなかった」 (ブラウنز 2005, 16-17)。彼には「鮮やかな影」も「コウモリ」も等しく「水溜まりみたい」に見えていた (ブラウنز 2005, 17)。

私を含め、ASD 者の多くは、ガーランドやブラウنزほどの真正の相貌失認とは無縁だが、定型発達者に比べて顔の記憶の定着が曖昧な傾向がある。定型発達者には容易に区別できる仕事仲間、知人、芸能人などが、私にはほとんど同じ顔に見える。定型発達者にとっても、犬や猫の顔を見分けるのはしばしば困難だと思われるが、それと同じ事態だと言える。

「顔の表情」が「独特」なことが、私たちにはよく指摘される。ASD の診断基準の事例には、「顔の表情や非言語コミュニケーションの完全な欠陥」が挙げられている (APA 2014, 49)。

ブラウنزは、「ふつうの、にっこりした顔」をすぐに作れず、「気前のいいところ」を見せなくても、「しかめっ面」になってしまった経験を記述しているが (ブラウنز 2005, 144)、これを私はいまでも頻繁に経験する。つまり自然な表情で笑うことが難しい。東田は、「自分にとってとても楽しい思い出だったり、本の中の 1 ページだったり」が「思い出し笑いの強烈なもの」のように「突然頭の中にひらめく」ことで、「ものすごくハイテンションになる」ときがあると記しているが (東田 2010, 50)、私も普段の鬱屈した顔とは打って変わったように満面の笑みを浮かべることがあり、しばしば不気味がられる。

原因としては、視線の触発に弱いこと (この自注 [30] で前述)、共感が特殊なこと (自注 [29] を参照)、現実と妄想が「浸潤」していること (自注 [1] を参照) のほかに、ミラーニューロンの仮説が考えられる。脳の前頭葉に下前頭回と呼ばれる部位があり、そこには他者の運動に自動的に共鳴して、自分の運動と結びつけるためのミラーニューロンという神経が存在する。ASD 者は、このミラーニューロンの機能が弱いと考えられている (京都大学 2012)。

以上の理由から、私は写真や映像で見る自分の顔の表情に強い嫌悪感を感じる。これは、自分の性自認に関する曖昧さ (自注 [46] を参照) のほかに、私を「普通」ではないと見なす定型発達者の見解を内面化してしまって、自己を——部分的にであれ——否定する感情が形成されていることに起因しているだろう。

「対人距離が平均より狭い」ことは、診断基準でも、「対人的に異常な近づき方」をするということが例示されており (APA 2014, 49)、その実証的な研究もある (浅田 2015)。これには、特殊な空間感覚 (自注 [4] から [20] の「水中世界」や宇宙に関する知覚を参照) が関係していると考えられる。私は特に若いころ、対人距離が近いと指摘された経験が何度があり、この問題に関して慎重になった。

[31] ASD 者は私的言語、特異な言い回し、造語などを好む (Volden 1991, 109-130)。日本の作家のうち、私は特に大江健三郎と村上春樹に愛着を感じてきたが、それは彼らにそうした傾向を見たからにほかならない。私がハイデガーを好むのも (自注 [4]、[7]、[8] を参照)、同じ理由によるところが大きい。「現存在」、「世界内存在」、「心配り」、「情態性」、「被投性」、「時間性」、「歴史」、「出来事」、「組み立て」、「四方域」など、彼は好んで新しい語を铸造したり、既存の語に独自の意味を注入したりする。

子供のころに「誤った連想を楽しむ傾向があった」ことを、多くの仲間たちも証言している。ブラウنزは、〈Zob〉 (中央バスセンター) という略語を見て、〈動物園〉に準じるものだと

誤解し、興奮したことがあったと回想している（ブラウنز 2005, 216）。ホールは、母親が「メール・オーダー」、つまり通信販売を意味する語を口にしての聞いて、「メール」を男性を意味する「メール」と錯覚し、なぜ「フィーメール・オーダー」（女性販売）を使わないのかと尋ねたという（ホール 2001, 62）。私は小学生のころ、「アメニティ」という単語を見るたびに、愛好していたアニメ関連商品の専門店「アニメイト」と錯覚し、そわそわした。「想像の過剰」（自注 [29] を参照）が関係した現象と言えらるだろう。

「冗談の感性が個性的」なことについてブラウنزが書いている。彼は友人から、成績が良いと子どもでも結婚できると吹きこまれ、信じてしまう（ブラウنز 2005, 176-178）。つまり、私たちには定型発達者の冗談に関して感度が低いところがある。他方で、独特な冗談に関する感性がある。ブラウنزはクロスワードパズルを制作し、特に左上の角で〈MORIBUND〉（瀕死の）と〈MALIGNOM〉（悪性腫瘍）の〈L〉が交差する点を誇らしく感じたが、それを見せられた彼の母親は、息子の陰惨な発想に衝撃を受けて泣きだし、かすれた声で「あんまりだわ。あなたは無神経で冷酷よ」と言ったとのこと（ブラウنز 2015, 382-383）。私も若いころはブラウنزのように、しばしば定型発達者の冗談が理解できなかった。独自の冗談めいた感受性はいまでも有している。

私には「主語をオウム返しにするとときが稀にあ」る。ASDの「診断的特徴」には、「自分のことを言うとき「あなた」という単語を使用」することが例示されている（APA 2014, 53）。私にもこれはある。たとえば「マコトさんはどうしますか」と尋ねられて、「マコトさんは、そろそろ帰らせていただこうかなと考えているところです」と、「先生はいま、お時間はごぎいませしょうか」と尋ねられて、「はい、先生はいまお時間ありますですよ」等と答えることがある。そこには冗談の要素があり、完全に真剣というわけではないが、エコラリア（自注 [22] を参照）の性質が紛れこんでいると思われる。

「嘘がへた」なことは、ASD 者も ADHD 者もよく話題にする。前者は「シングルレイヤー思考特性」（自注 [22] を参照）の結果、本質的なことだけを語りたい傾向があるからだろう。後者は「不注意」（自注 [11] を参照）と「多動性および衝動性」（自注 [24] を参照）の傾向が原因だろう。

私の場合には、「思春期には話しつづけるときと黙りつづけるときが分裂していた」。多くの ASD 者は多弁に、一部の ASD 者は「選択性緘黙」に悩んでいる。

グランディンは、「人が話していることは、すべて理解していたが、私の反応は限られていた。応えようとしたのだが、話し言葉はほとんど出なかったのである。それは吃音にも似ていた」と語る（グランディン / スカリアノ 1994, 25）。私も興奮したときに話すと、軽く吃ってしまう（自注 [30] を参照）。女性の場合、「初潮を迎える頃」に、選択性緘黙が起こるという指摘があるが（シモン 2011, 95）、これは私が（身体が男性のものとはいえ）思春期に学校生活で黙りがちだった事実、ある程度まで一致しているかもしれない。ただし私に関しては、それは「選択性緘黙」と言えるほど明瞭なものではなかった。

[32] 「魔法の力を頼った」というのは、ASD 者が「相手に意志を伝えて、相手からお菓子をもらおうとしているというよりは、ある状況で「開けゴマ！」という呪文をとこなえとお菓子が出てくるといった感覚」を有しているという指摘を踏まえている（村上 2008, 125）。村上 は、「コミュニケーションではなくて呪文」、「本質的には対人関係は介在していない」と書いているが（ibid.）、この問題を考えるには、私たちの世界で「魔法」の力（「4.3.」を参照）が大きいことを理解しておく必要がある。

「過剰に「橋を焼く」く傾向は、ASD の診断基準にある「人間関係を発展させ、維持し、それらを理解することの欠陥」に対応している（APA 2014, 49）。「橋を焼く」という表現そのものは、シモンによる女性 ASD 者についての指摘に由来する。彼女はそれは「先制攻撃にも似てい」ること、「解雇される前に自分から辞める、捨てられる前に相手を捨てる、状況がぐちゃぐちゃになる前に立ち去る」ことと説明する（シモン 2011, 268）。

彼女は提言する。「これが悪いとは限りません。意地悪な人ばかりがいる嫌な場所がある一方で、精神や魂にとって、より健全で進歩的な環境が存在するからです。しかし、世界一周を2度行い、中年になって、それでもまだ橋を焼き続けているなら、そろそろ自分の身辺を調べ、何がどうなっているのかを考えた方がよいでしょう」（シモン 2011, 263）。

私は文字通り「世界一周を2度」おこなった経験があり、「中年になって」しまったため、「橋を焼き続けて」しまう傾向を改めた。もともと私が「橋を焼く」行動に耽っていたのは、自分が ASD/ADHD 者だと知らなかったからで、早くに診断を受ける機会があれば、やはり早くに反省する機会を得ていたはずと考える。

「炎の夢を見る」は、ジーン・リースの『サルガッソーの広い海』より。「胸壁に出ると涼しく、ほとんど叫び声を聞くことはできなかった。私はそこに静かに座った。どのくらいそのまま座っていたのか分からない。体勢を変えて、空を見た。空は赤く、私の全人生が収まっていた。振り子時計と、コーラおぼさんの煌びやかなパッチワークを見た。ラン、アフリカシタキヅル、ジャスミン、生命の木が、みな炎に包まれているのを見た。下の階のシャンデリアと赤い絨毯、いくつもの竹、いくつものシダ植物を見た。金や銀のシダ植物。庭の壁に生えた、柔らかい窓色のピロード状の苔を見た。人形の家、書物、水車小屋の娘を描いた絵を見た。オウムの声が聞こえてきて、知らない人を見ると「誰だね？ 誰だね？」とフランス語で呼びかけているのだった。しかも私を憎んでしまった男が「バーサ！ バーサ！」と叫んでいる声まで聞いてしまった」（Rhys 2016, 170、原文英語）。

[33] DSM-5 の ASD や ADHD に対する診断基準その他は、ここまでに引用した文言もしばしばそうであったように、異質なものを冷徹に観察する「健常者」（あるいは「定型発達者」）による独断的な視線に貫かれている。

ASD のコミュニケーションに関する診断基準には、「複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥があり」、かつ「相互の対人的-情緒的関係の欠落」や「対人的相互反応で非言語コミュニケーション行動を用いることの欠陥」や「人間関係を

発展させ、維持し、それらを理解することの欠陥」のあることや、「興味、情動、または感情を共有することの少なさ」が指摘されている（APA 2014, 49）。

コミュニケーションに関する「診断的特徴」としては、つぎのことが書かれている。「社会的コミュニケーションにおける言語的および非言語的な欠陥は、その人の年齢、知的水準、および言語能力のみならず、治療歴や現在受けている支援などの要因にも応じてさまざまな現れ方をする。完全に会話が欠如しているものから、言葉の遅れ、会話の理解が乏しい、反響言語、または格式張った過度に字義どおりの言語などまで、多くのものに言語の欠陥が認められる。形式言語技能（例：語彙力、文法）が損なわれていない場合でも、自閉スペクトラム症では相互的な社会的コミュニケーションに対する言語の使用は障害されている」（APA 2014, 52）。

以下の内容には、悪意めいたものさえ感じられないだろうか。「何か言語が存在するとき、それはしばしば一方的で、対人的相互性を欠き、意見を言う、感情を共有する、会話をかわすなどというよりはむしろ、要求する、分類することに用いられる」（APA 2014, 52）。さらに、つぎのようにも書かれる。「対人的相互反応に用いられる非言語的コミュニケーション行動の欠陥は、視線を合わせること（文化的な発達基準と比較して）、身振り、顔の表情、身体の向き、または会話の抑揚などの欠如、減少、あるいは特殊な使用によって明らかとなる」（APA 2014, 52）。

文化事情などに関する最小限の留保はされるが、それでも DSM-5 は「障害」の所在に関して鈍感な見立てしか持っていない。「対人的相互反応、非言語コミュニケーションおよび人間関係の基準に文化的な違いは存在するであろうが、自閉スペクトラム症を有する人は彼らの文化的背景の基準から考えて明らかに障害されている」（APA 2014, 56）。

熊谷は、ASD 者にしばしば指摘される「心の理論の障害」（自注 [29] を参照）に関して、つぎのように問題提起している。「自閉スペクトラム症ではない「定型発達者」が自閉スペクトラム症の人の「体を揺する」行動を見たとして、果たしてその行動の背後に隠れた意志を正確に推測できるでしょうか。自閉スペクトラム症の人が定型発達者の行動から意志を推測できないことも、それと同じレベルの現象にすぎません。双方とも、「心の理論」の実行に失敗しているはずなのに、なぜか自閉スペクトラム症の人だけが「心の理論の障害がある」と言われる。ここに、多数派によるグロテスクな論理的飛躍を感じずにはいられません」（熊谷 / 國分 2017, 14）。綾屋も、コミュニケーションや社会性は双方向に織りあげていくものなのに、診断基準が片方だけの問題とされることに疑問を提示している（綾屋 2018, 1-8）。

「脳の多様性」（「1.2.」の参照）の価値観を汲むことで、どのような考え方が導入されるだろうか。たとえば綾屋は、自分の空想世界への耽溺を意味する「オハナシ」について、その「世界は明瞭であるため、オハナシが再生されているときは、現実世界にいるときよりもずっと、「自分が世界とかかわりをもって生きている」と感じ、「自分はここに存在してもいいのだ」という感覚を強く味わっているかもしれない。たしかに植物や月や空と対話しているときの私は、どんなときよりも「私」らしい」（綾屋 / 熊谷 2008, 96）と述べている。「私には植物や空や月とならば、つながっている感覚がある。心がかよい合い、開かれて満ちていく楽しさや充足感がある」（綾屋 / 熊谷 2008, 124）とも述べる。その上で綾屋は、自分の内面世界や自然界と

は異なる関係性を、つまりほかの人間たちとの繋がりを求める。それはそれで不可解なことではないが、むしろ私たちが自分の内面世界や自然界とは深く繋がっているという「脳の多様性」を最大限に評価すべきではないだろうか。ニキがウィングについて注釈した「想像が過剰」（自注 [29] を参照）ということ、肯定的に受けとめるという方向性だ。

「心の理論」には、さまざまな誤解がある。ASD 者の多くは、単純な形で他者の心を測りがたいわけではない。私たちは、「なぜ彼や彼女がそのような動き、そのような話し方で、そのような言葉話すのか、といった人びとの「意図」の可能性をあまりにもたくさん推測してしまうために、ひとつに決めきれず、「読めない」のである」（綾屋 / 熊谷 2008, 80）。

また、ASD には共感に特殊な問題がある（自注 [29] を参照）という見解も、さらに検証の余地がある。ASD 者は ASD 者に相對したときに、各自の前頭前皮質腹内側部の活動が促進され、互いに似ていると自動的に判断し、この回路が定型発達者に相對したときには起こらなかったという実験結果がある（Komeda 2015, 145-152）。ここから私たちは、私たち仲間のあいだに、定型発達者が互いに有しているものと同様の共感があると推定できる。もしそうであれば、ASD に指摘される共感能力の低さは、実は少数派の私たちと多数派の定型発達者のあいだの断絶が誤解されたものということになる。

イギリスでは 4 歳から 18 歳までの、重度の知的障害がある者から知的水準が高い者までを含めた ASD 者の実態調査がおこなわれ、彼らは自分の母語の自分の方言を使った場合、短い会話を基本とした場合、客観的知識について語りあった場合、顔を突きあわせなかった場合、訓練された犬を介入させた場合、文字盤などを使った場合、発言の速度を遅くしなかった場合などに、従来想定されていた以上の社会的コミュニケーション能力を発揮することが実証された（Ochs / Solomon 2010, 69-92）。

つまり環境の調整によって、ASD 者はその力を最大限に発揮することができるようになる。環境調整の必要があるという条件付きならば、それは顧慮するに値しないと考えるのは、その人があまりにもこの問題に鈍感だということの意味する。というのも、そもそも私たちは日常的に、多数派の定型発達者に適合するようにデザインされた社会でしか生きられないように仕向けられているからだ。初めから環境を調整してもらうことで、定型発達者は彼らの能力を発揮できている。少数派としての私たちのための環境調整がないということは、端的に不平等であり、不公平に当たる。

村上は、「自閉圏の人から見ると、定型発達者の習慣は全くの異文化である」、「アスペルガー障害の人は、異文化に住んでいるが、自分の文化は理解してもらうことができず、文化が違うということすら知られていない、場合によっては自分でも定型発達とは異なる文化を生きていることに気がついていないまま、ずれから来るトラブルに苦しんでいるかもしれない」と書いている（村上 2008, 189）。この問題提起は、10 年以上が経過した現在でも有効性を失っていない。

私たちは、他者性の「侵襲」（自注 [27] を参照）、「擬態」（自注 [28] を参照）、あるいは「地獄行きのタイムマシン」（自注 [38] を参照）などによって、定型発達者よりもはるかに「他者性」に貫かれている側面があるのに、定型発達者からは自閉した世界に生きていると

独断的に決めつけられ、私たちの他者性は「なかったこと」にされてしまう。私たちの「声」は収奪されて沈黙を強いられている。

21世紀初頭に、「脳の多様性」運動で話題になったウェブサイトは、AS（アスペルガー症候群者）の反対の「脳典型者」（NT）をつぎのように笑った。「脳典型症候群者は脳生理学上の障害であり、社会問題への没入、優越性の妄想、同調への強迫観念によって特徴づけられる。脳典型者はしばしば、彼らの世界体験が唯一のものか、唯一正解のものと考えている。脳典型者はひとりぼっちでいることが困難だ。脳典型者はしばしば、他者の些細な違いと見えるものに対して寛容ではない。脳典型者は集団内では社会性または振る舞いが硬直し、よく機能不全な、あるいは破壊的な行動に、さらにはありえない儀式にすら執着するが、それらは集団のアイデンティティを維持するためなのだ。脳典型者は直接的なコミュニケーションを苦手とし、自閉スペクトラム人に比べてはるかに嘘をつく傾向がある」、「脳典型は遺伝に由来すると考えられている。検死解剖によると、脳典型者の脳は自閉人の脳よりも小さく、社会的振る舞いに関連する領域が発達しすぎている可能性がある」、「悲惨ながら、1万人のうち9,625人が脳典型者らしい」（Engdahl 2002）。

「人間の人間に対する搾取」という文言は、フリオ・コルタサルが語った「人類は、人間の人間に対する搾取が終わった日に、その名にふさわしいものとして始まる」（Cortázar 1985, 37、原文スペイン語）という予言より。

[34] 人は夢中になると、通常の水準を超えた没入感を体験する。この没入感は、スポーツ科学の分野では、自分が印象的で特権的な「区間」に入ったという感覚を得るために「ゾーン」と呼ばれている。ポジティブ心理学の分野では、大きな流れに運ばれているような感覚を得ることから、「フロー」と呼ばれている。「フロー」の名付け親、ミハイ・チクセントミハイによると、この現象は「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」で、「特異でダイナミックな状態」でもある（チクセントミハイ 2000, 66）。原則として、「知覚された挑戦と能力が行為者の平均水準より高いときに知覚される」ことが知られている（チクセントミハイ / ナカムラ 2003, 19）。

ASD 者や ADHD 者の界限では、この「ゾーン」ないし「フロー」は、「過集中」として知られ、私たちの日常でたやすく発生している。おそらく ASD の「こだわり」（自注 [24] を参照）や ADHD の衝動性（自注 [24] を参照）が、起爆剤として作用しているのだろう。

特別に深い過集中は強い印象を残すため、体験している時間が「突如として神が己に降臨するのを体験」するかのように、あるいは（そこまでいなくても）啓示の瞬間のように錯覚されることがある。ブラウンズは、テレビ番組で、ある作家が自分たちの仕事は物語を「語る」（エアツェーレン）ことだと表明するのを聴いたときに、ある夏の日、海岸で砂を「数え」（ツェーレン）たことを錯覚的に想起し（自注 [31] を参照）、自分は作家だという靈感を得る。「砂糖みたいにさらさらの砂で手が粉をまぶしたみたいだった。砂の粒は太陽の光で虹色に輝いてい

た。手が体から離れて空気の中を漂うような感覚を覚え、この上もなく幸せだった。僕の視線は何時間も華麗な砂へと吸い込まれていた」（ブラウズ 2005, 302）。

私たちはしばしば、私たちの仲間がオカルト、占い、宗教などに騙されやすいことを話題にするが、ひとつの理由は私たちの感覚過敏（自注 [21] を参照）に、別の理由はこの過集中にあると思われる。私たちのこの、いわゆる変性意識状態が騙されやすさを誘発する。綾屋は過集中を「エイエンモード」と呼び、そこには「時間感覚を失った「永遠」「エンドレス」の恐怖心」があると語る（綾屋 2008, 85-86）。しかし、私を含めて多くの ASD 者や ADHD 者は、至福として過集中を体験している。

「永遠と無限を見」という表現は、マルクス・アウレリウスの『自省録』より。「いま存在しているものを見る人は誰であれ、永遠から来たものも無限にあるものも、すべてを見たのだ」（Marcus Aurelius 2013, 46、原文はギリシア語だが、英語から重訳）。「6000 フィートの上空に立」という表現は、ニーチェが『この人を見よ』に書いた昂揚体験「人間と時間を超えて 6000 フィートの彼方」より（Nietzsche 1980, 335、原文ドイツ語）。「一瞬ごとの再生を夢見る」という表現は、フェルナンド・ペソアが『アルベルト・カエイロ』で歌った「ぼくは刻々と生まれ変わるのを感じる／この世界の永遠の新しさに向かって」（Pessoa 1986, 204、原文ポルトガル語）より。「水面が円を描いて波打つ」は、ムージルが『特性のない男』に書いた主人公の体験より。「表現しがたく運びさらされる体験だったにもかかわらず、彼は風景に沈みこんだ。世界が彼の眼を超えてくるたびに、世界の内実が音もない波になって、彼に打ちよせた。彼は世界の心臓の内側へと踏みこんでいた。彼とは遠く離れたところにいる恋人への距離が、すぐそばの樹木までの距離と等しくなっていた。内部感情が空間を無視して諸事物を結びつけ、それは夢のなかで、ふたつの事物が混ざりあうことなく互いに通過できる様子に似ていた。内部感情はすべての関係を変えていた。この状態は、しかしながらほかの点で夢とは共通していなかった。それは澄みわたり、透明な思考に満ちていた。この状態のなかでは、原因、目的、肉体的欲望に依拠して動くものは何もなく、噴水が水盤に果てしなく落ちてゆくように、あらゆるものがつぎつぎと新しい輪を作って広がっていった」（Musil 1978, 125、原文ドイツ語）。

「思わず体が炎や蒸気や電磁波を帯びているように夢想する」のは、少年時代に親しんだマンガ、車田正美の『聖闘士星矢』に登場する概念「小宇宙（コスモ）」や鳥山明の『ドラゴンボール』に登場する「超（スーパー）サイヤ人」の視覚的表現からの連想。美内すずえのマンガ『ガラスの仮面』では、ドジで冴えない主人公の少女が演劇にのみ天才を発揮し、降神体験のようにして役柄に取りつかれるという場面がしばしば登場するが、その際にも炎が揺らめくような視覚効果が用いられている。私たちはこの主人公、北島マヤが「いかにも ADHD だ」と語りあう。私は自身の「ディープ過集中」（自注 [37] を参照）を「ガラスの仮面の世界」とも呼ぶ。

[35] 過集中の体験はしばしば比類ない深度あるいは高度に達するために、私の意識は突きつめられてしまい、「人生がただ一度だけしかないということを覚悟とともに受け入れる」。私には、リルケが『ドゥイノの悲歌』で歌った詩が思いだされてくる。「一度だけ／どれもがわず

か一度だ。一度しかなく、それ以上はない。私たちも／一度しかない。再度は、絶対にない。でもこの／一度でもあったということは、ただ一度だけであれ／たしかに地上にあったということは、反論の余地なしと思われる」（Rilke 1996, 227、原文ドイツ語）。

この詩の連想から、エリック・シャレルのオペレッタ映画『会議は踊る』で歌われ、のちに宮崎駿のアニメ映画『風立ちぬ』にも挿入歌として採用された歌曲「たった一度のこと」が、ときには思いだされてくる。「もう二度とは起こらない。／こんな素晴らしいこと、本当のはずがないわ。／まるで奇跡みたいに／楽園から黄金の光が降りそそいでくる。／たった一度のこと。／もう二度とは起こらない。／もしかしたら、ただの夢かもしれない。／人生は一度しかありえない。／もしかすると、明日はもう過去のことになっているかもしれない。／人生は一度しかない。／だって、春にも五月は一度しかないでしょう」（原文ドイツ語）。この歌の甘く悲しい印象は、私に情緒的に作用し、それを「呪い」のように感じさせる。心が弱っていて、失敗などが起こりやすい兆候だからと言える。

[36] 京都の大原、三千院近くの小さな川・律川にかかる未明橋(右の写真を参照)。正確に言えば、このように強烈な色彩で迫ってきたわけではない。そのときの擬宝珠が有した異様に重たい迫真性を再現するために、色彩を強烈なものへと加工したのだ。



[37] 過集中の力は強く、「擬態」（自注 [28] を参照）にも威力を発揮するが、反動も大きく、ほとんどの場合、最終的には悪い結果がもたらされる。特に「擬態」のために「過集中」を使うと、「過剰適応」と呼ばれる状況を引きおこし、遅かれ早かれ自壊してしまう結末が待っている。

「無益な精神の炎」はゲオルク・トラークルの末期の詩「グローデク」の連想より。「夕方、秋の森が音を奏でる／死の兵器によって。黄金の平原と／青い湖。その上を太陽が／さらに暗鬱に転がる。夜が抱きしめるのは／死にゆく兵士。彼らの壊れた口の／荒れた嘆き。／それでも静かに湿地に集まる／赤い雲の群。そこに怒りの神が、／流された血が、月の涼やかさが住まう。／すべての道は黒い腐敗へと通じてゆく。／夜と星々との黄金の枝の下で／妹の影が揺らめいて、／沈黙の杜を抜けてゆく。／英霊たちを、血を流す頭部を見舞うために。／そして葦の内部で秋の暗いフルートが音を奏でる。／おお誇らかな悲哀よ！ その青銅の祭壇よ、／精神の熱い炎を、／いまでは強力な苦痛が養っている。／生まれることのない孫たちを」（Trakl 1915, 14、原文ドイツ語）。「私は恐怖してそれを振りかえる」という表現は、ダンテ・アリギエーリの『神曲』

より。「息を切らせながら深海から海岸へと流れでた者が、恐ろしい海水を振りかえり、見つめるのと同じようにして、私の心は、私を逃亡者と感じながら、後ろを振りかえり、誰も生かして返すことがなかった険しい道を見つめた」(Dante 1838, 2-3、原文イタリア語)。

挫折感を避けるために、私は「この体験を遠ざけるように努力した」。チクセントミハイは「フロー」(自注 [34] を参照)を浅く頻繁な「マイクロ・フロー」と深く稀有な「ディープ・フロー」に区別しているが(チクセントミハイ 1979, 33)、私はこれに倣って過集中を日常的な、それなくしては日々の生活に支障が出る「マイクロ過集中」と強力なパフォーマンスを叩き出す「ディープ過集中」に大別している。「マイクロ過集中」は恒常的で「普段使い」して良いものだが、「ディープ過集中」は「決して抜いてはならない伝家の宝刀」として、原則としての温存を自分の規律としている。気を抜くとすぐに「ディープ過集中」に陥るため、継続的な作業をおこなうときは、時間をおいて小休憩を入れることを心がけている。交互に温水浴と冷水浴をおこなうこと(自注 [12] を参照)にも効果がある。

過集中に「繰り返して襲われて、結果として事物を固定的に見ることからは自由になった」面がある。特に「ディープ過集中」の超越感、先に述べたニーチェの「人間と時間を超えて 6000 フィートの彼方」(自注 [34] を参照)は、ゲル化した状態(自注 [11] を参照)との落差が大きいので、私の体験世界の自由度を高めたと考えている。

[38] 「さまざまな時間跳躍を経験している」ことは、私たちのあいだでもよく話題になる。より冷静に言えば、私たちは侵入的想起(いわゆるフラッシュバック)をひっきりなしに体験しているのだ。綾屋は、これを「必ずしもトラウマと結びついた記憶ではないが、情報処理しきれずに飽和してしまった鮮明な記憶が次々に再生される現象」と説明する(綾屋 / 熊谷 2018, 88)。

綾屋が説明するように、「旅行で新しいところに行くというような、多くの見慣れない刺激に触れた際」には、「車窓からの風景が一枚の写真のように、バンッとふいに再現されたり、お弁当を買った売店のおばちゃん表情やおつりを渡すときの手つき、昼食をとった店の食卓にあった調味料の配置、天井にあった電灯の形まで、時間軸はバラバラでパッパッと映像が出現しつづけてたりする」(同所)。あるいは「一日の喧騒が終わり、落ち着いて休むころになると、次々と素早く切り替えて映し出されるスライドショーのように、その日に会話した人の表情が写真記憶としてパッパッと次々に頭の中に現れる」ことがあり、それも「時間軸はバラバラ」になっている(綾屋 / 熊谷 2018, 89)。

東田は「過去のできごとについては、昨日のことも 1 年前のことも、僕の中ではあまり変わりはありません」と語る(東田 2010, 98)。彼が言うには、「よくは分かりませんが、みんなの記憶は、たぶん線のように続いています。けれども、僕の記憶は点の集まりで、僕はいつもその点を拾い集めながら、記憶をたどっているのです」(東田 2007, 18-19)。ウィリーも同じことを述べている。「私の歴史は 点で記憶されている / 保存された静止画像 夜明けに見つけた朝顔のように / 小さく簡素だが、精緻でリアル。 / この瞬間の積み重ねが私、過去の点がそろ

って初めて私。／私は時を次々と再生して観る 集まれば私という人となる時たちを」(ウィリー - 2002, 106)。

私も綾屋や東田やウィリーのような記憶の在り方を共有している。この現象を日本で有名にした杉山登志郎は、蘇ってくる記憶の迫真性を重視して、「タイムスリップ現象」という名称を使っている。彼は、この現象を体験する ASD 児の臨床上の特徴を、「もともと優れた記憶能力をもつ、知的に高い、しかし不安定な自閉症の症例にしばしば見られる現象である」こと、「感情的な体験が引き金となり、過去の同様の体験が想起されること」、「その過去の体験をあたかも現在の、もしくはつい最近の体験であるかのように扱う」こと、「その記憶体験は、普通児において一般に想起することができない年齢のものまで含まれ、また、患者の言語開始前後の年齢まで遡ることがある」ことと要約している(杉山 2011, 47)。

なぜ「タイムスリップ現象」が起こるのかについて、杉山は「自己意識の成立が不十分」なために「自己の歴史性が不成立な状態」がもたらされ、「歴史性の流れの成立しない体験世界」で「現在の体験のみならず、未来の事象も過去の事象も心理的な距離を失い、現在に侵入するかたちで体験されるであろう」(杉山 2011, 61)と説明する。杉山によると、PTSD の場合には「繰り返し想起され、徐々にその苦痛が治まり、心理的な距離が保たれる」のに対して、ASD 児の場合には、「ある日突然に遙かな記憶が呼び覚まされることが多い」(杉山 2011, 53)。

この現象の辛さを、綾屋は「自分でコントロールすることができず、次から次へとスナップショットが脳裏に吐き出される感じは、気分が悪くて嘔吐が止まらない感覚や、泣きすぎて嗚咽が止まらない感覚とよく似ている」(綾屋 / 熊谷 2018, 90)と表現する。東田は、「僕たちが困っているのは、このバラバラの記憶が、ついさっき起こったことのように、頭の中で再現されることです。再現されると、突然の嵐のようにその時の気持ちが思い出されます」と述べる(東田 2007, 52)。いずれも大いに共感する。ただし、彼らの侵入的想起が、心的外傷とそれほど関係がないのに対して、私の事例は曖昧な問題を抱えている。

ASD に関連したものではなく、PTSD (心的外傷後ストレス障害) の、普通の意味でのフラッシュバックを、上岡陽江と大島栄子は『ドラえもん』に登場する遠隔空間の移動のための道具を重ねあわせて「どこでもドア」と呼んでいる(上岡 / 大島 2010, 172)。この現象に関して、「どこでもドア」の空間移動よりは時間移動の比喻が適切だと考えられること、また私に関しては悪夢的な記憶がほとんどだということから、私は自分の侵入的想起を「地獄行きのタイムマシン」と呼んでいる。

おそらく私には、ASD の特性に PTSD に似た症状が合併しているために、基本的に毎日、ほとんど一日中、「地獄行きのタイムマシン」に乗せられている。「PTSD に似た症状」と書いたのは、本当に PTSD と呼んで良いのかどうか判然としないからだ。DSM-5 には、「実際にまたは危うく死ぬ、重症を負う、性的暴力を受ける出来事」を「直接体験する」、他人が体験しているのを「直に目撃する」、近親者や親しい友人に起こったことを「耳にする」、あるいはその「強い不快感をいなく細部に、繰り返しまたは極端に暴露される体験をする」ことが PTSD の診断

基準として挙げられている (APA 2014, 269) 。私の体験は、そのようなことに比べれば、随分と「ぬるい」かもしれない。

私が小学生のころ、父は家庭外の女性と肉体関係を持ち、私は思春期まで父親と接したことがほとんどなかった。母は心の隙間を埋めてくれるカルト宗教「ものみの塔」に籠絡された。「ものみの塔」はキリスト教のプロテスタントを独自に変形させた新興宗教で、一般的にはその信者を意味する「エホバの証人」の名で知られる。

この宗教団体は 1964 年以降、子どもを肉体的暴力によって洗脳するという残忍な布教を開始した。彼らは考えた。「悪いことをした子供の心の中にはサタンが宿っています。子供の心の中からサタンを追い出すために、ムチを使ってサタンを追い出しなさい。これはエホバ神のご意志です」 (大下 2005, 128) 。彼らは勧めた。「子供が悪いことをした場合は、聖書に基づいて、子供が納得するまで時間をかけてよく言い聞かせ、子供が罪を認めたならば、椅子にひざまずかせて、自発的に子供にパンツを下ろさせて、親は皮のベルトで力一杯お尻を 20 回叩いてください。そして叩き終わった後、必ず子供を力一杯抱きしめてください。この場合のムチとは女性用のウェストベルトのことです」 (大下 2005, 128) 。

私の少年時代は、上のような教えが布告された 20 年以上ののちの 1980 年代にあり、母による強制によって、私はこの宗教による洗脳を受けた。大下勇治は説明している。「1980 年代になってからはムチのルールが変わり、私がいた 1970 年代のムチの 20 発制限がいつのまにか解除されて 1 回のムチは 100 発以上となり、聖書で子供に納得させるのもうやむやとなつて、お説教の後に一方的にムチになり、ムチの種類も、竹のものさしとか、足踏み式ミシンの皮ベルト、女性用のウェストベルト、男性用の細いベルトのみ使用 OK だったのが、水道ホース、ガスホース、布団叩き、木のハンガー、櫛の棒、アクリル棒、ステンレス製の靴べら、電気コード、自動車牽引用ワイヤー、鉄製チェーンなど、ありとあらゆる物がムチとして使用 OK となります。さらにげんこつで顔を殴りつけるのも OK となり、逆さ吊りにして風呂の水の中に長時間浸けたり、頭から水をかけて素っ裸で寒空の中に長時間立たせるのも OK となつて行きます」 (大下 2005, 153-154) 。1993 年には、このような体罰の結果として、子どもが実の親に殺された事例が発覚し、メディアによって報じられた。

「ものみの塔」は親に対して、「叩き終わった後、必ず子供を力一杯抱きしめてください」と伝えていたのだが、これに関して大下は指摘する。「暴力を振るった後に愛情を示すのは、ドメスティック・バイオレンスの夫が、妻を殴った後に愛情を示すのと同じやり方です」、「これにより子供は強度の依存症になり、親と宗教から逃げられなくなります」 (大下 2005, 157) 。自分の体験と成長過程を振りかえると、私にはこの指摘はきわめて妥当に思われる。このような少年時代の体験から、私は自分の苦痛への感受性の強さを呪いとして受けとめるようになった (自注 [21] を参照) 。

肉体的虐待を通じて教えこまれた教義を、私は中学生のころには愚かしいものと理解していたが、それから約 30 年が経過したいまでも、私は毎日何度も「地獄行きのタイムマシン」に乗せられる。私の脳裏を、カルト宗教の教義と宗教の名のもとにおこなわれた肉体的な暴力の思い出

が、洗脳を解くために学んだ伝統的な諸宗教の教義、大小さまじまの人生の辛い体験と混じりあって、つぎつぎと駆けてゆく。私の内部から怒りや恥や苦悩や戸惑いが湧きあがり、この全身を苛む。悪夢の氾濫する河を泳いでいく——それが私の基本的な、自分の人生に抱くイメージだ。

[39] ASDの常同行動は自動運転のようにして発生する。ニキ・リンコは、ASD者には「世間一般には通じない、私だけの「俺ルール」」（ニキ 2005, 35）があると表現する。たとえば「贈り物とは、ピンク色のリボンがついているもの」と信じた場合、私たちはそれを墨守する（ニキ 2005, 58-62）。自宅で温水と冷水を交互に何度も浴びるという行為を1日に複数回反復するとき（自注 [24] を参照）、私は「俺ルール」になかば支配されているだろう。

その他、収集物の並べ方（自注 [42] を参照）などの所有物の管理方法にも、私には他者には理解が困難な「俺ルール」がある。青系統の色を好む私（自注 [14] を参照）は、自分の持ち物は一定以上の割合で青系統でなければならないと考えてしまうし、何かを書くときも、水色や群青色のペンを使ったり、あるいは画面上で複数の青系統の色を使いわけて書いていき、最後に黒に統一したりする。このような「俺ルール」は、私には「地獄行きのタイムマシン」（自注 [38] を参照）を振りはらうものとして役立っている。

[40] 「呪いの浄化方法はしばしば不気味で、ときとして人から忌避の対象になる」。「地獄行きのタイムマシン」（自注 [38] を参照）は、私に関わらない、また陰惨すぎることはない、しばしばユーモアあるいは上質な雰囲気を感じられるトラウマ的表現に触れたときに、すぐれて発動しにくくなる。そのため私は、私にとってそのような印象を有する詩や小説をこよなく偏愛してきた。

ランボーは「母音」で歌う。「Aは黒、Eは白、Iは赤、Uは緑、Oは青。母音。／ぼくはいつか、おまえたちの秘められた出生について語ろう。／Aは残酷な悪臭の周りをぶんぶん飛び交う輝くハエたちの黒いコルセット。陰の入江。／Eは蒸気と天幕の天真爛漫さ。誇り高い氷河の槍。セリの花の身震い。／Iは真紅。吐かれた血。怒り、あるいは改悛の陶酔のなかでの美しい唇の笑み。／Uはいくつもの循環。緑の海の神々しい震え。動物があちこちにいる牧草地の平和。錬金術師の勤勉な大きな額に／刻まれた皺の平和。／Oは奇妙な甲高い響きに満ちた至上の喇叭。／諸世界と諸天使をつらぬく静寂。おお終末よ。その眼が放つ紫の光線」（Rimbaud 1895, 7、原文フランス語）。

ポオは「アッシャー家の崩壊」で書く。「彼のその発言の超人間的な熱量に呪文の力が宿っていたかのようにだった。——彼が指で差したその巨大なアンティークの鏡板は、重厚な黒檀の入り口をゆっくりと後ろへと動かした。突風の仕業だった。——扉がなくなってみれば、そこに立っていたのはまさしく、大柄で死装束を身にまとったアッシャー家のマデリン嬢だ。彼女の白い服は血塗られ、その衰弱した体のあちこちに、懸命にもがいたであろう痕跡があった。しばし彼女は、部屋の入り口でガタガタと震えながら、よろめいていた。——そうして呻くような低い叫びをあげながら、彼女は自分の兄上に、ずっしりとのしかかってきた。彼女は荒れくるい、断末魔をあ

げながら、兄の体を床に押しつけていた。ところで彼の方は、すでに予期していたとおり、この恐怖の犠牲者になってしまったのだ」(Poe 2014, 55、原文英語)。

ガーランドは書いている。「ハンス・クリスチャン・アンデルセンや「グリム童話」も手にとったが、読んだのは残酷な結末の、陰惨な話ばかりだった。切り落とされた足、凍え死ぬ子どもたち、予測のつかない不運。災難に襲われる人々。私は自分を探していた。もしかして、ページをめくるうちに、突然私の話が見つかるんじゃないかしら？」(ガーランド 2000, 135)。私もグロテスクな民間伝承を愛好するが、たしかにそれはある種の共感を求めていることだ。ブラウズがクロスワードパズルの制作に陰惨な発想を持ちこんだのも(自注 [31] を参照)、同じような事情があるのではないだろうか。

私のこの方面での探求は、人生の長い時期を彩った。大江健三郎の奇怪な作品や無数の怪奇小説を読み、レイ・ハリーハウゼンの特撮映画、ルネ・ラルーのアニメ映画『ファンタスティック・プラネット』、石井輝男の映画『江戸川乱歩全集 恐怖奇形人間』などに夢中になった。そして、特に恐怖の味わいを持ったマンガの収集。中沢啓二、日野日出志、徳南晴一郎、白川まり奈、まちだ昌之、飯島市朗、榎岡かずお、諸星大二郎、永井豪、宮崎駿、安部慎一郎の作品を、私は大量に集め、悦に入った。マンガに次いで夢中になったのは、サイケデリック・ロックやアシッド・フォークの邪悪な悦楽に満ちた音色だった(自注 [41] を参照)。

[41] 「無音の音で自分を浄化」するのは、方法として標準的なものだろう。綾屋は石川賢治の月光写真展を訪れたときに、「写真のなかへ溶けていく」感覚を得たという。「薄暗い青い光。虫の声。自分が森のなかで暮らす野生動物であるかのような気分になってくる。遠くで他の動物が歩き、カサカサと葉が擦れ、枯れ枝がパキッと折れる音も聞こえてきそう。全身が耳。あらゆる気配が耳で感受する」(綾屋 / 熊谷 2008, 178)。私にもその感覚はなじみ深い。

自分を「詩の世界で浄化」することも、それほど稀な方法とは言えないだろう。私は本稿に記したさまざまな詩を原文でも翻訳でも読み、また自分で訳すことによっても、自分を「浄化」してきたと感じる。

「蛍光色を浴びること」も「浄化」をもたらす。ASD 者は、蛍光色には催眠効果を感じる傾向があるようだ。ウィリアムズは大学生活の始まりをつぎのように描写している。「教室に行くなり、わたしは度肝を抜かれた。なんと巨大な部屋、なんと大きな壁、なんとたくさんの人、なんとまぶしい蛍光灯。わたしは教室に行くたびに、蛍光灯を消して歩いた。蛍光灯がついていると、なぜか眠くなってしまうのだ」(ウィリアムズ 1993, 171)。ジャクソンも書いている。

「光る物が好きなのは小さいころからで、自分の部屋にはいろんな照明器具をいっぱい置いてるよ。ラヴァランプっていう、中にいろんな色の透明の液体が入ってて、比重の差でゆらゆら動くやつでしょ。ディスコの照明に使うような回るライトでしょ、UFO みたいなやつでしょ、それにマジック・マッシュルーム(あ、ドラッグ関係のことを心配する人がいるといけなから解説しとくけど、これは幻覚キノコじゃないよ。表面に小さなライトがいっぱいくつついた、丸いキノコみたいな電気スタンドだよ)でしょ。この手の灯りって、なんか催眠効果に似たものがあつ

て、とにかく気持ちが落ちつくんだよ」（ジャクソン 2005, 97）。私も蛍光色にはすぐに陶酔を誘われる。右の写真は、陶酔しながら撮影し、陶酔を反芻しながら加工した大阪新世界の通天閣だ。眠たくなる感覚が、私には心地よい休息のなかでの「浄化」を連想させる。

「自分の呪いと共振する爆音」でも「浄化する」という主張は、奇異に感じられるかもしれない。爆音の音楽を好む定型発達者は珍しくないが、聴覚過敏（自注 [22] を参照）がある ASD 者にはなじみにくい。しかし、「地獄行きのタイムマシン」（自注 [38] を参照）を止めるためには、爆音で音楽を聴き、自分の感覚を麻痺させるのが有効なのだ。



私の音楽遍歴は、アニメや特撮番組の主題歌等（いわゆる「アニソン」）から始まった。思春期のころには、上の世代の「昭和歌謡」を好むようになり、20代にはサイケデリック・ロックやアシッド・フォーク、ミニマル・ミュージック、民族音楽などの熱心な収集家に転じた。30代の一時期、EDM の特にバウンス系を好んだこともある。いま私はこれらのジャンルのそれぞれを愛好しているが、私が気に入る楽曲はほとんどつねにどことなく強迫的な印象があつて、かつユーモアが感じられるものに限られるし、上に挙げたようなジャンルには、そのような曲調の楽曲がそもそも多い。そうした音楽は、グロテスクでユーモラスな物語（自注 [41] を参照）と同様に、「地獄行きのタイムマシン」への抑止力を持つ。

自分でも音楽の作曲や演奏を楽しめたら良いと思うものの、DCD のせいか楽器を演奏できず、歌もしばしば「音痴」と笑われてしまう。ブラウنزが木製のリコーダーでテレマンのデュエットを演奏して陶酔するときの描写を、私は羨ましく感じる。「突然、なにかが開いた。音が、いつもよりもいっばいに響き渡った。音は、音の硬さを失い、まるで雲のクリームみたいにふわふわになった」（ブラウنز 2005, 198）。

音楽的な感受性が作品全体に横溢する作品として、10代後半の私にはトーマス・マンの『魔の山』が特権的な位置づけを有していた。30代には村上春樹の長編小説がそのような位置づけを得た。

[42] 私の人生は、つねに何かを夢中で収集し、整理することに彩られてきた。そのために費やした金銭、時間、労力がまったく惜しくないと言えば嘘になる。私の仲間たちもよく自分の収集癖について語るから、収集は ASD のシステム化（自注 [29] を参照）の傾向と連動していると思われる。私たちは収集活動をつうじて、安全な仕方です「俺ルール」（自注 [39] を参照）を満足させているのだ。

ASD の診断基準の例として、「おもちゃを一行に並べ」ることが挙げられている (APA 2014, 49)。ASD 児は、しばしば「平面にびっしりオブジェを規則的に敷き詰めて、曼陀羅を作り上げる」ことを好む (村上 2008, 117)。私も一時期、自分の収集物を自分なりの規則に沿って並べて撮影する遊びに夢中になった (右の写真を参照)。このような遊びは、上に書いた ASD 者の「システム化」や「俺ルール」の明瞭な現れと言って良いだろう。



知識の収集にも、物の収集と同じような快感があった。私が 10 代だった時期はインターネット黎明期に属し、現在ほど情報化が進んでいなかったため、刺激的な蘊蓄を収集することが魅力的に感じられ、私は「雑学の王様」になることを目指して生きていた。日本に Wikipedia が進出したころ、私は多くの新規項目を立項し、「情報の民主化に貢献している」と考えていた。Wikipedia がすっかり一般的になった 30 代には、私は自分の雑学がそれ自体では価値を失っていると感じ、そのため語学能力を鍛え、海外経験を積むことで自己形成のやり直しを図ろうとした。だが、インターネット上の機械翻訳の精度が飛躍的に向上していくのを見るにつれ、また海外で実際に得た体験も多くがそれほど稀有なものではないと実感するようになるにつれて、語学能力や海外経験を過大に評価する傾向から解放された。

私とその仲間たちは、多くの場合、ごく狭い領域の物事に熱中する。ブラウンズは学校時代に、歴史や地理に熱中したことを思いかえしている (ブラウンズ 2005, 311-313)。シモンは、女性の ASD 者が、たとえば 1940 年から 1945 年の間に作られた飛行機エンジン全種、石灰岩の洞窟の構造、野球選手の打率、道路にある車の名などに夢中になると述べている (シモン 2011, 29)。知識の収集癖に関して、男性と女性の ASD 者のあいだで大きな違いはなさそうだ。

東田は、電車の時刻表やカレンダーの暗記を楽しいと説明し、「時刻表やカレンダーは誰が見ても同じだし、決まったルールの中で表されているのが分かりやすいのです」(東田 2007, 104) と述べている。ホールは語る。「ぼくは円周率にもものすごく興味がある。だれも正確な数値を見つけたことがないから。ぼくは、円周率について何でも書いてある本を読んだ。円周率は永遠に続くものだと思われている。無限大のひとつの例なんだ。おおぜいの人たちが何千年も調べてきた。今のところ、510 億桁までわかってる。円周率の、少数第百万位の数字は 1。きみは知らなかったでしょ！」(ホール 2001, 67)。

特に、フリスが紹介するある ASD 者の回想は、私に自分の趣味の変遷を思いださせる。「11 歳から 18 歳の間は、数字に興味があり、それは実際極めて強いものでした。4 歳半からおよそ

13歳までは、ルパートベアに大変関心をもっていました。およそ7歳から13歳までは、天文学にとっても興味がありました。この数年間は、外国語を学ぶことにとっても関心を持ってきました」（フリス 2012, 123）。私の場合は彼と同じようにして、日本の特撮ヒーロー、昆虫、日本のアニメ、星座、日本史、世界史、少女マンガ、怪奇マンガ、明治・大正・昭和のレトロな道具や商品、前衛的なポップ音楽のレコード、人体模型や動物の剥製、昔の市井の人が書いた味わいのある落書き、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、アイスランド語、ラテン語、古典ギリシア語、ロシア語、中国語、韓国語、などに情熱を注いできた。

外国語学習に関してはジャクソンがつぎのように語っている。「ASの子どもたちには、大好きな科目はラテン語とか、ドイツ語って子が多いよね。もっと多いのは、情報（パソコン）の時間。ってことは、科目によって、ASの脳みそに向いてる科目ってのがあるのかも」（ジャクソン 2005, 97）。私はラテン語への熱意を途中で冷ましてしまい、パソコンが得意とはとても言えないが、ドイツ語の教員を務めているから、その点では典型的なASD者なのかもしれない。

[43] 飲食物は体内で消化され、栄養や排泄物になるが、私には昔から、好きな飲食物を取りこめば体を「浄化」（自注 [41] を参照）することができる、嫌いな飲食物を取りこめば体が汚染されるというイメージがあった。ウィリアムズも子供時代について書いている。「その頃わたしが口にしたものといえば、卵に牛乳を加えて煮詰めたカスタードと、ゼリーと、とろりとしたベビーフードと、果物とレタスとハチミツと、パンの白い部分にカラフルなスプレー砂糖をふりかけたものだけ。色とりどりのスプレー砂糖は、まるでわたしの夢のようにきれいだった。事実わたしは、きれいだなあと思うものや、さわって気持ちのいいものや、自分のフィーリングにぴったりくるものだけを食べたのだ。たとえばわたしは、ふわふわした手ぎわりのウサギが大好きだった。ウサギはレタスを食べる。だからわたしもレタスを食べた。わたしは色のついたガラスも大好きだった。輝くように透き通るゼリーは、色ガラスによく似ている。だからわたしはゼリーが好きだった。また、他の子たちと同じように、わたしも砂や花や草やプラスチックのかけらなどを口に入れた。他の子たちと違っていたのは、十三歳になってもまだ、花や草や樹の皮やプラスチックを口に入れていたことだ。これも、夢の中のきらめきに入っていこうとしていたのと同じことだった。わたしは何かを好きになると、心が吸い寄せられるように魅了されて、そのままその物と一体になってしまいたくなる。人間にはなじめないというのに、物ならば、自分の一部のようにまでしてしまうのが、うれしくてしかたない」（ウィリアムズ 1993, 21）。以上の観念のゆえに、私が人生の多くで過食傾向が強かったことは残念だ。

過食は、私の人生が収集活動の連続によって織りなされていたことに並行している。私の収集物は、自宅に「神話的空間」（自注 [25] を参照）を出現させるものだった。過食もそのようなものと信じることができれば良かったが、実際には過食は言うまでもなく不健康をもたらした。私は何度もパブロ・ネルーダの詩「スプーンへのオード」を思いだした。「スプーン／人間の手が作った／最古の／盆地。いまでも／金属や樹木でできた／おまえの形のなかに／原始的な

手のひらの／型が見える／そこでは／水が／爽やかさを／野生の／血が／火と狩猟の／動悸を／運んでいた」(Neruda 1973, 442、原文スペイン語)。この詩を思いだしながら、私は食事が私に水だけでなく血をも運び、私を獣に近づけ、理想としての植物(自注[12]を参照)から遠ざけるのだと天を仰いだ。

私は暴飲の時期も経験した。酒は、上に書いた「好きなものを食べて自分を清める」という誤った観念を満足させるに留まらず、「他者性の侵襲」(自注[27]を参照)や「地獄行きのタイムマシン」(自注[38]を参照)を停止させるために顕著に有効だった。だが、私たちには依存症になりやすいという側面がある(自注[21]を参照)。私もその危険な道を進んでいたが、そのときの私はまさに、心的外傷が嗜癖を刺激し、嗜癖が心的外傷を刺激する「下降スパイラル」のなかにあったと言えよう(ナジャヴィッツ 2020, 145)。

私は支援者たちの助言に従い、早い段階で自分を立てなおすことができた。依存症にはいまなお根本的な治療薬がなく、問題を抱えた場合は医者やカウンセラーと合わせて自助会を利用することになる。それらの自助会では「自分なりに理解できる神」を信仰することが求められるのだが、そのような方針にもとづいた会合は、私にとって、カルト宗教に絡んだ侵入的想起を引きおこすトリガーだらけということになった。私は苦悩にまみれることになったが、これに関する記述は別稿に譲る方が良いだろう。

[44] 本稿を書いている時点で当事者研究は現在、東京池袋にある「べてぶくろ」で起こった醜聞によって揺れている(渋井 2020, 129-131)。私としては、まずは法の裁きによって問題が解決されることと、問題の施設が自浄作用を果たすことを期待している。加えて、当事者研究の手法がさらに洗練されたものになるように、私自身も検討と実践を重ねていきたいと考えている。もちろん、自分自身が主催する当事者研究で類似の問題が起こらないように注意するように心がけたい。その上で、私は当事者研究を支持する。

[45] 小学校のときに、転校後の最初の自己紹介を終えると、級友からの質問で「男なん？女なん？」と質問された。第二次性徴期に入る前、人は一般に中性的だが、私は輪をかけて中性的だった。思春期が近づくと、性の目覚めは男同士の同性愛に関する創作物によって初めて喚起され、女同士の同性愛に関する創作物がそれを促進した。それらの影響もあって、思春期には私の性自認、性的指向、恋愛指向などは混乱してしまった。

中学生のときに、歴史に対する愛好が始まった。欧米の歴史も好んだが、そのころもっとも友人たちと夢中になったのは、日本史と中国史だった。私たちは横山光輝のマンガ『三国志』、陳舜臣の小説『小説十八史略』、司馬遷の歴史書『史記』、コンピューターゲーム『信長の野望』、NHKテレビの大河ドラマなどを楽しみ、熱烈に語りあった。このような歴史熱は、私にとっては男性性への憧れを体現するものだった。

このような傾向に並行して、当時放映中だった『美少女戦士セーラームーン』(武内直子原作)や、少年の主人公が水をかぶることで少女に変身する『らんま 1/2』(高橋留美子原作)などが、

私の女性性への憧れを掻きたてた。私は少女マンガの収集を始め、初めは自分と同時代のものに関心が集中していたが、徐々に自分が生まれる前の過去の作品へと遡るようになった。萩尾望都、大島弓子、山岸涼子、竹宮恵子らに私は帰依した。もっとも愛好したのは、最初期の萩尾が影響を受けていた矢代まさこだった。もっとも大事な作品は萩尾の『ポーの一族』、ついで内田善美の『星の時計の Liddell』だった。少女マンガのヒロインたちに感情移入するとき、私には深い安らぎが訪れた。20歳のとき、集めた少女マンガの単行本は8,000冊を超えていた。

男性性と女性性それぞれへの憧れは、徐々に分裂を濃くした。少年から青年になるにつれて、前者は大っぴらにして良いもの、後者はそれまで以上に秘匿せねばならないものと感じられた。

私は平成の時代に、大正時代の「教養主義」を生きようとした。それは私にとって、男性性を追求しながら、ひそやかに女性性への憧れに支えられた行為だった。というのも、教養主義に対する関心は、教養小説に感化された1970年代の少女マンガの影響で生まれたものだったからだ。実際に読んだフリードリヒ・ニーチェ、トーマス・マン、フョードル・ドストエフスキー、レフ・トルストイらの作品はおおむね「男くささ」が強いものだったが、私にはこの方向性を探求するのが自分の在り方として正しいように錯覚された。私は20歳になるかならないうちから、日本の昔の学者のようなヒゲをはやし、古風な印象のメガネをかけて、自分をカモフラージュすることにした。

20代の後半、趣味の合う音楽批評家との出会がきっかけとなって、教養主義への幻想は解除された。さまざまな音楽（自注 [40] のサイケデック・ロックやアシッド・フォークなど）が奏でる、男たちと女たちの魅惑的な音の空間が、私を未知の世界へと誘った。それらの音楽は、男性性への憧れと女性性への憧れを最良の形で止揚するものとして私に作用した。

30代になって、映画が私にとって真に親しいものになった。ジャン＝リュック・ゴダールの『気狂いピエロ』、スタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』、セルゲイ・パラジャーノフの『ざくろの色』、フランシス・フォード・コッポラの『ゴッドファーザー』、マーティン・スコセッシの『タクシー・ドライバー』、北野武の『あの夏、いちばん静かな海。』、陳凱歌の『さらば、わが愛/霸王別姫』、クエンティン・タランティーノの『パルプフィクション』、リチャード・リンクレイターの『恋人までの距離 ビフォア・サンライズ』、ファティ・アキンの『愛より強く』、ペドロ・アルモドバルの『抱擁のかけら』、アブデラティフ・ケシシュの『アデル、ブルーは熱い色』、ガイ・リッチーの『コードネーム U.N.C.L.E.』、ジョージ・ミラーの『マッドマックス 怒りのデスロード』、ジョン・カーニーの『シング・ストリート』などを、私は何度も鑑賞した。これらの映画も、私にとっては男性性と女性性の高次元での止揚なのだった。

[46] 若いころは、書物を読んで、女性的な印象の男性という描写に出会ったり、女性が男性に欲望をもって見られている場面に出会ったりしたときには、自分がそのような登場人物たちだったら良かったと夢見たことがあった。

たとえば、20歳のころに読んで強く印象に残ったハーマン・メルヴィルの小説『ビリーバッド』。「彼は若かった。体格はすっかりと発育していたが、見た目は実際よりもずっと若く見えた。まだなめらかな顔には思春期の余韻が残されていて、自然な顔色の純潔さは女性的でしかなかった。とはいえ、航海経験のために、肌のうちの百合色の部分はまったく抑制されてしまって、薔薇色の部分は日焼けすることで、にぎやかにぎわめいているのだった」(Melville 2017, 7, 原文英語)。

また、同じころに読んだヴィクトル・ユーゴーの詩「水浴のサラ」。「サラ。この気だるい美女は／身を揺らしている／ハンモックに包まれて。／噴水の水盤では／満杯になっている／イリッソス川から引かれた水。／脆くゆらゆらするさまを／映しだしている／透きとおった水の鏡。／この色白の水浴び女は／身をかがめている、／自分の姿を見ようとして。／ハンモックの網が／揺れるごとに／水面をさっと掠めると／波だつ水に見えるのだ／ほんの一瞬だけ／彼女の美しい足が。彼女の美しいうなじが。／サラは恥ずかしげに足を／水面につける／水に映る彼女の姿が揺れる／美しい足は、大理石がバラ色に染まるよう／はしぎながら／水の爽やかさにもそしらぬ顔」(Hugo 1964, 638, 原文フランス語)。

私は「疑似的なXジェンダーの不定性」ということになると思う。Xジェンダーとは「LGBTQ+」の「Q」(ジェンダー・クイア)にあたり、「ノンバイナリー・ジェンダー」とも呼ばれる(ただし「Q」には「クエスチョニング」の意味もある)。Xジェンダーには、性自認が男性でも女性でもある両性、男性でも女性でもない無性、男性と女性が一定の比率で交じりあっている中性、男性と女性が日や時間帯や状況によって入れかわる不定性がある。私は「まったくの男性」と感じているときが人生の3割、「男性よりの中性」と感じているときが4割、両性や無性と感じているときが2割、「女性よりの中性」と感じているときが1割、という感覚で生きている。

私たちASD者には、トランスジェンダーやXジェンダーとしての性自認、つまり性別違和を訴える例が珍しくない。シモンは「ほとんどの場合、本質的に、私たちAS者〔アスペルガー症候群者〕は、身振りなどの癖や行動において、両性具有的」だと述べる(シモン 2011, 83)。ガーランドは、アスペルガー症候群者について「トランスセクシュアリティ」を有する割合は一般集団よりも大きいと指摘する(ガーランド 2007, 126)。スウェーデンでおこなわれたASD者の顔の研究によると、男性は男性的特徴が少なく、女性は女性的特徴が少なかったという

(Bejerot et al. 2012, 116-123)。オランダでおこなわれた調査は、性別違和の外来を受信した少年少女のうちでは、ASD者は7.8%に達すると報告している(Vries et al. 2010, 930-936)。アメリカではASD者とADHD者の親に対してインタビューがおこなわれ、前者では5.4%が、後者では4.8%が自分の子どもに性別違和があると回答したという(Strang et al. 2014, 1525-1533)。これらの百分率の割合がどれほど高いかは、DSM-5で、性別違和の「有病率」が出生時が男性の成人では0.005~0.014%、出生時が女性の成人では0.002~0.003%とされていること(APA 2014, 447)からも明らかだろう。

このような性別違和の原因がどこにあるのかは判然としていない。大村豊は「性同一障害は彼らの自己イメージを結ぶ能力のつたなさから、自己の性的イメージの混乱が生じるのかもしれない

い。あるいは、不適応の原因を自己の性的属性に求めて、反対の性に同一化することで不適応を解決しようとする独特のファンタジーなのかもしれない」（大村 1999, 43）と考察している。山口貴史は、ASD 者はアイデンティティ構築が困難なこと、感覚過敏ゆえに二次性徴への困惑が大きいこと、認知が極端で思考が独特なこと、根源的な問いを好み、またそれにこだわることを挙げている（山口 2018, 210-212）。

私の考えを述べよう。第1の可能性としては、肉体的な問題、すなわち脳の神経細胞（ニューロン）やホルモンなどの内分泌系の問題が考えられるべきだろう。しかし第2の可能性として、「他者性の侵襲」（自注 [27] を参照）が関与している可能性がある。父母や兄弟姉妹、身近な友人、恋人、あるいは文化的コンテンツに感化され、自分のなかの性差が不分明になっているというわけだ。ただし第3に、むしろ ASD 者や ADHD 者は周囲の人々への同調性が低いことから、世間の規範や因習から自由に成長することができ、男らしさや女らしさに関する固定観念に縛られていないという可能性もある。また第4に、私たちは「解離」しやすい傾向にある。私の仲間には何人かの解離性同一性障害者、つまり多重人格者がいて、ひとりの人間の中に複数の男女の人格が宿ることは稀ではない。この解離によって、多重人格には至らない、性自認の揺らぎが生じているのかもしれない。第5に、ASD には強い「こだわり」（自注 [24] を参照）や知覚ハイコントラスト特性（自注 [29] を参照）があり、それは白黒思考にも繋がりやすいため、多くの人々がそのまま受けとめたり、気にせずいたりする自分の性自認や性的指向の曖昧さを、なんとかして突きとめようとして躍起になり、結果としてこの問題が顕在化しているという可能性がある。アメリカでの調査は ADHD 者に関しても報告しているが、ASD と ADHD は併発しやすいため（「1.2.」を参照）、それらの ADHD 者の一部が ASD 者でもあったという可能性は否定できない。

「発達障害」と LGBTQ+ の関係は、取り扱いが難しい面がある。かつてレズビアン (L)、ゲイ (G)、バイセクシュアル (B) は治療の対象だった。1973 年、アメリカ精神医学会は、同性愛行為を精神障害と見做さないと決議した。それから 20 年近くが経った 1992 年、WHO (世界保健機関) が ICD-10 (「疾病および関連する保健問題の国際統計分類」第 10 版) から同性愛を除外した。さらに、トランスジェンダー (T) に対する扱いも、変更が起りつつある。2019 年、ICD-11 で性同一性障害が「精神障害」の分類から除外され、「性の健康に関連する状態」という分類の中の「性別不合」に変更された。

LGBTQ+ の歴史は、性の問題が精神疾患と見なされる伝統からの解放の歴史だった。ところが、「発達障害」と LGBTQ+ は上に述べたように有意に関係がある。この問題を解消するためにも、「発達障害」は精神疾患ではなく「脳の多様性」（「1.2.」を参照）の問題だと認識の変更をおこなうことが望ましい。

[47] 「私は男として女に、男として男に、女として男に、女として女に惹かれるかのよう
に混乱」する。それはあくまでも混乱あるいは幻惑だが、自分の実際の性的指向のように感じられる迫真性を帯びている。

ハン・ガンの小説「エウロパ」には、切実に女性になりたいと考え、女装をするが、性的な欲求を抱く相手は自分のその願望を支援してくれる女性に置かれている、という男性が登場する。初めてこの小説を読んだときに、これは私のための小説ではないかと錯覚された。ふたりは散歩し、女装をする主人公は「偏見と嫌悪、軽蔑と恐怖の視線」を向けられる。すると彼らは「腕を組むか、手をつなぐ。にっこりと目で笑いながら僕の顔を見上げる。そんなとき僕はずっと前に見た短編映画のワンシーンを思い出すこともある。一組のレズビアンが明るい陽射しに照らされた通りを、腕を組んで歩いている。お互いの頬や肩や腕を愛撫しながら、微笑みかけ、キスを交わしながら、ビルの角を次々に曲がる。十分近く沈黙の中で彼女たちの睦まじい午後を写していたカメラは、二人が消えた角を追いかけて曲がり、鈍器で頭を殴られ、血を流して死んでいる彼女たちを最後に上から撮る。血だまりの中に並んで横たわる彼女たちの体の上に、エンドクレジットが重なる」（ハン 2019, 77-78）。

しかし、のちに改めて読みかえたときは、この小説の細部が私に親密な意味合いをもっていたために、錯覚が発生していたのだと理解された。彼らが「初めてキスをした」のは「噴水の前」と語られるが（ハン 2019, 76）、噴水は私にはきわめて親密に作用する（自注 [34] [46] [50] を参照）。夜の散歩が「僕にとって幻の森か海の中を歩くようなものだ」と語られるが（ハン 2019, 77）、これも私には自分の仲間の世界観だという印象をもたらす（自注 [13] を参照）。そして、この作品は私たちにとってなじみ深い宇宙空間のイメージ（自注 [15] から [20] を参照）を提示する。作品中で、つぎのような歌が歌われる。「エウロパ、／あなたは木星の月／岩の代わりに／氷におおわれた月／地球の月みたいに白いけど／地球の月みたいな／傷はない」（ハン 2019, 85）。

「自分の名前に親しみを感じ」るのは、私の名前の音「マコト」が男女に共通して使われるから、またこの名は多くの場合欧米では女性の名前と思いきまれてしまうからだとすることに原因がある。〈MAKOTO〉という音の〈KO〉は、外国人には日本女性に多い「～子」と混同される。人によってはマンガやアニメの女性キャラクターを通じて、〈MAKOTO〉は女性名だと理解している場合もある。私は多くの外国人たちに、日本では「ツバサ」、「ユウキ」などとともに、「マコト」は男女通性の名だということ、英語圏の「クリス」（Chris）やフランス語圏の「ドミニク」（Dominique）などに似ていると説明してきた。

「男たちと女たちの植物めいた不思議さに呆然と」するとき、私にはポール・セザンヌの水浴する男女たちを描いた作品群が連想されている。青みを帯びて描かれる彼らの姿は、私に植物的人間という理想（自注 [13] を参照）を思いださせる。

「植物を礼賛する」ときに私が何度も思いだす詩は、与謝野晶子の「五月禮讚」。「五月は好い月、花の月、／芽の月、香の月、色の月、／ポプラ、マロニエ、プラタアヌ、／つつじ、芍薬、藤、蘇枋、／リラ、チュウリップ、罌粟の月、／女の服のかがろと／薄くなる月、戀の月、／巻冠に矢を背負ひ、／葵をかざす京人が／馬競べする祭月、／巴里の街の少女等が／花の祭に美しい／貴な女王を選ぶ月、／わたしのことを云ふならば／シベリアを行き、独逸行き、／君を慕うてはるばると／その巴里まで著いた月、／菖蒲の太刀と幟とで／去年うまれた四男目の／ア

ウギユストをば祝ふ月、／狭い書齋の窓ごしに／明るい空と棕櫚の木が／馬來の島を想はせる／
微風の月、青い月、／プラチナ色の雲の月、／蜜蜂の月、蝶の月、／蟻も蛾となり、金糸雀も／
卵を抱く生の月、／何やら物に誘られる／官能の月、肉の月、／ヴウヴレエ酒の、香料の、／踊
の、樂の、歌の月、／わたしを中に萬物が／堅く抱きしめ、纏れ合ひ、／呻き、くちづけ、汗を
かく／太陽の月、青海の、／森の、公園の、噴水の、／庭の、屋前の、離亭の月、／やれ来た、
五月、麥藁で／細い薄手の硝杯から／レモン水をば吸ふやうな／あまい眩暈を投げに来た。」(與
謝野 1980, 67-80)。

[48] 「呪いの力が私をつねに性的なものから遠ざけもする」のは、少年時代の私を洗脳し
たカルト宗教(自注 [38] を参照)が未婚者の純潔を奨励し、夫婦間でも性的行為の原則的忌
避を教えこんでいることが、洗脳の解けたあとにも微弱な余波を残しているからだろう。

「写真をとるときにも呪われている」と感じるのは、私が写真のなかでは、つまり他者の視点
から見れば「男でしかない」ように見えること、あるいは「どことなく女じみたところがある不
気味な男」に見えることに関係している。

[49] 「死を思う」機会は、ASD 者には多い。ASD 者は平均よりも 18 歳寿命が短いという
研究結果がある(Cha 2016)。知的障害や LD(学習障害)を併発している場合は 30 年、そう
でない場合は 12 年短いと指摘される。かつて「アスペルガー症候群者」と呼ばれた層でも、自
殺リスクは一般集団の 2 倍に達する。多くの ASD 者は 40 歳を迎えるまでに死ぬ。原因は「社
会のおよび文化的圧力」にあり、順応を強制され、孤立して希死念慮に囚われ、自殺する。

「神仏が絢爛と顕現する時空」は、第一にはカルト宗教を通じて知った聖書の記述が想起され
ている。旧約聖書には、「エルサレムのどの門も、サファイアとエメラルドで、そのすべての城
壁は、高価な宝石で造られる。エルサレムのもろもろの塔は、黄金で、その胸壁は、純金で造ら
れる。エルサレムの通りは、ルビーや、オフィルの石でちりばめられる。エルサレムのどの門も、
喜びの歌をうたい、エルサレムの家々は唱える。「ハレルヤ。ほめたたえよ。イスラエルの神を」
と」とある(日本聖書協会 2001, トビト記 13 章 16-18)。新約聖書には、「都の城壁は碧玉
で築かれ、都は透き通ったガラスのような純金であった。都の城壁の土台石は、あらゆる宝石で
飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、第
五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十はひす
い、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。また、十二の門は十二の真珠であって、どの門も
それぞれ一個の真珠でできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった」と
ある(日本聖書協会 2001, ヨハネの黙示録 21 章 18-21 節)。私は正確にはこれらの記述に、
まずはそのカルト宗教が独自に使用している「新世界訳」という版を通じて接したが、その本を
開くのは私には不気味すぎる行為と感じられるため、ここでは日本で標準的に用いられている版
から引用した。このような絢爛たる描写への抵抗感も作用して、私はキリスト教そのものにも打
ちとけられない。

私はのちに仏教の経典『華嚴経』にも似た感性の記述があると感じ、その宗教的空間にも苦手意識を覚えた。「神仏が絢爛と顕現する時空」の第二のイメージに当たる。「仏が初めて至高の悟りを開くと、大地は堅固になり、金剛で組成された。極上の宝輪、さまざまな蓮台、清浄な宝玉がきらびやかに飾られ、さまざまな色彩が広く深く顕現した。宝玉のできた垂れ布は光をまばゆく放ち、たえず美しい音色をあげ、さまざまな宝玉を連ねた網や、極上の香りを放つもろもろの華纓は、隅々にまで広がって垂れていた。珠玉の宝王は変幻自在にして、無数の宝を雨のように降らし、もろもろの極上の蓮台が地上で点在していた。宝石のできた樹木は列をなし、その枝や葉は光の茂みになっている。仏が悟りを開いたこの場では、仏の神力によって、すべてが荘厳で、陰影がキラキラと移ろっている。悟りを開いたときにあった菩提樹は高々と姿を見せる金剛製で、幹は瑠璃できており、特別な存在感を放っている。種々さまざまな宝石で枝ができていて、宝石のできた葉が広がって、まるで雲のように見える。蓮台の色もさまざまで、枝分かかれしては陰影をなし、宝玉が果実のようにになっている。輝きながら、火を放ちながら、蓮台と交差している。菩提樹は周囲のことごとくを光で明るくし、その巧妙のなかで宝玉を降らせる。宝玉のなかには菩薩たちがいて、まるで雲のようにして同時に出現する。如来の神力のために、菩提樹はつねに極上の音色を奏で、多種多様な仏法を説き、果てることがない」（高楠 / 渡邊 1925, 1、原文漢文）。

これらの光景に対する抵抗感は、撮影した写真を加工する際の私の趣向と対比すると、いささか不可解に見えるかもしれない。私は自分の写真で、実際には豪華絢爛と言えないものを、その迫真性を強調するために煌びやかに演出することをおこなっている。つまり、自分が好むのはときにはつましいもの、ささやかなもの、ときには誇大すぎてユーモラスなもの、キツクなものだという意識があるため、それを豪華趣味と混同されたくないという思いがある。両者は、しかしながら容易に混同されかねないため、私の心中に反発が生まれてくるのだと思われる。

私の死に関する慰めは、それが「別の空間へと抜けることや地水火風の変転のようなものだと考え」ることにある。前者で想起されているのは、ジョルジュ・ペレックが『さまざまな空間』で書いた「生きること。それは、互いに衝突しないように、可能なかぎりの努力でもって、ある空間から別の空間へと移動することだ」（Perec 1974, 14、原文フランス語）より。私はこれを「生きること」だけでなく「死ぬこと」にも妥当すると考える。後者で想起されているのは、ヘラクレイトスの自然哲学について、ディオゲネス・ラエルティオスが伝えた文言「火が濃縮され、凝縮すると水分が絞りだされ、水が生じる。そしてそれが凝結すると土に転じる。これが下り道である。また逆に土が弛むと、そこから水が生じ、そしてそれから自余のものは生じる。彼は、ほとんどすべてを海からの蒸発に帰している。これが上り道である。蒸発は大地からも海からもなされる」（日下部 2000, 258）より。私は死に関しても、このような自然の摂理が関与すると考える。

「若くしてへちまを眺めて死んだ俳人」は、辞世の句として「をと、ひのへちまの水も取らざりき」を詠んだ正岡子規のこと。

[50] 「自然の神気」は、ヴァルター・ベンヤミンが語る自然界の「アウラ」（つまり「オーラ」）を指している。「いったいアウラとは何か？ 時間と空間とが独特に纏れあい、ひとつになったもので、どれほど近くにあってもはるかな一回限りの現象だ。ある夏の午後、ゆったりと憩いながら、地平に横たわる山脈や、憩う者に影を投げかけてくる木の枝を眼で追う——これが、その山脈や枝のアウラを呼吸することにほかならない。この描写を手がかりとすれば、アウラの現在の凋落の社会的条件は、たやすく見て取れよう」（Benjamin 1991, 479、原文ドイツ語）。

「噴水」から連想される記憶は多々あるが、もっとも心に残っているのはコンラート・フェルディナンド・マイヤーの「ローマの噴水」。「水流が噴きあげられ 降りそそいでくる／そうして大理石盤が縁まで満たされ／ヴェールで覆われるかのように 満ちあふれ／つぎの盤の底へと落ちてゆく／その盤も満杯になり／さらにつぎの盤に波打ちながら水を押しよせさせる／どの盤も受け 同時に与えて／流れては安らっている」（Meyer 1962, 22、原文ドイツ語）。

[51] 「排泄、性的衝動、身の回りの清掃など」を含んだ自己エスノグラフィーを、今後の課題としたい。

4. 考察

4.1. 二部構成、間テクスト性、多言語

私の自己エスノグラフィーは、それほど長くない「体験世界の記述」（「3. 1.」）と、長大な「体験世界への自注」（「3. 2.」）に分裂したが、これは私の内面性に即応している。

第一に、私たちは——ASD 者も多くの場合には意識しないことだが——普段からバイリンガルとして生きている。自分たちの脳に即して話せば、それは自分たちの感じ方に忠実なものになり、私の場合はあの「体験世界の記述」が生まれる。それは「脳の多様性」の少数派に属する者たちの言語様態と言って良い。しかし、私たちはこの言語様態が多数派には通じないことを経験上、熟知している。そこで、言語を変換する必要がある。すなわち第二言語としての「定型発達者の言語様態」に翻訳しなければならない。そうすると、私の場合はあの「体験世界への自注」が生まれてくる。吃音者は、吃りそうな単語を予覚しながらしゃべり、類語に言い換えたり、国語辞典の説明文のように言い換えたり、中途半端な言い方をして冗談を装うが(伊藤 2018, 120-132, 195)、私たち ASD 者も同様の作業を引切り無しにおこなっている、あるいはおこなおうとして失敗していると言える。失敗を避けるためには、会話のテンプレートを大量に用意するという方策があるが、これによって特定の「キャラ」を演じざるを得なくなり、自分が「うまくいく方法」に乗っ取られて、何のためにその人格を演じているのか分からなくなるという、吃音者にも共通する悩み(伊藤 2018, 199-210)が発生する。

第二に、ASD、AC、PTSDには、しばしばアレキシサイミア（失感情症）がつきまとう。ASDとアレキシサイミアの相関性は、fMRIによる脳内スキャンニングによっても確かめられている（Silani 2008, 97-112）。アレキシサイミアは、「感情の気づきの問題は共感性、また想像力・空想力などとも大いに関連している」（小牧 2020）と言われ、ASDには共感性や想像力の特殊性が指摘される（自注 [29]、[33]を参照）ことから、そのあたりにアレキシサイミアの原因が潜んでいるかもしれない。さらにACの典型的問題として、「悪夢のようだった子ども時代から感情を抑え込んできて、そうするとひどく傷つくので、自分の感情を感じることや表現することができなくなっていた」ということがあり（アダルト・チルドレン・アノニマス 2015, 3）、この影響と考えることもできる。PTSDの患者の一部は、アレキシサイミアに悩まされることが指摘されている（Frewen et al. 2008, 171-181）。私がアレキシサイミアを崩そうと努力することで、「体験世界の記述」が生まれてくる。しかし、それは多数派には自己完結的で閉鎖性の強いものにはしか見えない。そこで、私は異文化理解の能力によって耳を澄ませ、第一次的な自分の体験世界を「体験世界への自注」へと翻訳していく。

多くのASD者やADHD者は、多弁という傾向もある。アレキシサイミアと多弁は一見すると逆の傾向にも見えるが、アレキシサイミアゆえに、つまり自分の感情を把握しがたいために、言葉数を費やして現実理解を得ようとしている可能性がある。かつ、翻訳作業はいわゆる「意識」的なものになるため、言葉数が増えてしまうということもある。こうして、私にも多弁の傾向がある。それを正確に再現すれば、資料の博搜を好み、若干の銜学的な香りも漂う「自注」が成立する。

ふたつの自己エスノグラフィーは、私の生の現実を別々の角度から再現したものと言って良い。両者は互いに補完的な意味を有し、ふたつが揃って私は私を「等身大の自分」（「1.1.」を参照）として提示することができる。

私が当事者研究を通じて発見した「等身大の自分」には、これまでの文学研究者としての遍歴が、深々と刻印されている。私は自分自身に、「間テキスト性」（intertextuality）を見た。さまざまな社会状況や歴史状況、生活環境、規範、通念などを「テキスト」の背景、「コンテキスト」と見なせば、それらの「コンテキスト」から生まれてくる諸思想、諸観念、そして「文化的コンテンツ」（「1.4.」を参照）が「テキスト」に当たる。人は、コンテキストのなかに身を浴しながら、さまざまなテキストを吸収し、「間テキスト性」として生成される。さらに言えば、この「間テキスト性」は、大量の異質な声によって織りなされた、バフチンのいうポリフォニーなのかもしれない。

もちろん、その動態は単純ではない。人はテキストの感化を進んで受けいれたり、逆に拒絶したりすることで、自分の編みあげを進めてゆく。私が「自注」で言及したり訳出したりしたさまざまな文化的コンテンツは、私の構成要素なのだ。しかも私の場合は、「他者性の侵襲」（自注 [27]を参照）や「エコラリア」（自注 [22]を参照）によって、文化的コンテンツが際立って自我に浸透している。

私にとって、文学作品を中心とするさまざまな文化的コンテンツは人生の掛けがえのない仲間でもあった。英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、アイスランド語、ラテン語、古典ギリシア語、ロシア語、中国語、韓国語などの学習をおこない、その実力は言語ごとにさまざまだが、学んだことは生涯の財産になった。綾屋は月や植物を仲間とし、また手話によって他者とつながろうと考えたことを記している（綾屋 / 熊谷 2008, 178-187; 125-167）。私にとっても月や植物は仲間だったが、それ以外には多くの文化的コンテンツが、身近な仲間だった。そして外国語はもちろん、未知の他者とつながるための、比類ない手段だった。

4. 2. 芸術効果、心的外傷後成長、スティグマ低減効果

「多重スティグマ」（「1. 2.」を参照）を抱えた私にとって、多くの文化的コンテンツが高次の意味合いでの「慰め」だった。文化的コンテンツによって精神の高まりを感じる事が、私の何よりの生きがいになった。それらはまた、侵襲的想起を阻止してくれる力も持っていた（自注 [40] を参照）。

心的外傷からの回復には、「情動脳と仲良くなる」ことが必要だと指摘するベッセル・ヴァン・デア・コークは、穏やかな呼吸などによって「過覚醒に対処する」こと、「いまここ」への集中を促す「マインドフルネスを活用する」こと、誰かと絆を結んで「かかわり合う」こと、音楽、演劇、舞踊、スポーツなどによる「リズムの共有と同調」を利用すること、体の緊張を放出させるために「触れる」こと、強制された受動性を撥ねかえすために「行動を起こす」ことを重視している（コーク 2016, 338-358）。私の場合は文化的コンテンツによって「過覚醒に対処」し、「マインドフルネス」を体感し、その創作物のなかの人物や作者、また話題を共有できる友人や知人と「かかわり合」い、「リズムの共有と同調」に酩酊し、書物のページをめくったり、映画館に出かけたり、レコードを「dig する」（探索し収集する）ことを通じて、いろいろなものに「触れ」たし、「行動を起こし」もした。

文化的コンテンツのあるものは娯楽性が強く、私たちを時空の彼方へと拉致する役目を果たすが、あるものは芸術性が強く、私たちの意識を「いまここ」へと釘づけにする。私は芸術のその「マインドフルネス」の機能を簡潔に「芸術効果」と呼んでいる。心的外傷や嗜癖によって感情が過剰になったり不足していたりするとき、感情を「健全な中間レベル」に戻すために安全な場所へと「着地」（グラウンディング）しなければならないと指摘されているが（ナジャヴィッツ 2020, 166）、私にとって好ましい文化的コンテンツは、まさに「いまここ」への着地をもたらしつつあった。

「芸術効果」に支えられて私が実現したものを、私は「心的外傷後成長」（Posttraumatic Growth, PTG）と見なしている。心的外傷後成長を客観的に測定するのは容易ではなく、尺度は存在するものの（Park / Rechner 2014, 73-74）、当事者の語りや態度に依拠しているため、真に成長していると言えるのかどうかを実証するのは困難と言える。この概念を提唱したりチャード・テデスクとローレンス・カルフーンは、アメリカでの心的外傷後成長の報告には「自己高揚バイ

「アス」が含まれていること、つまり「心的外傷体験の負の側面を否認する傾向がある被調査者は必ずいくらか存在する」ことを認めている (Calhoun / Tedeschi 2014, 25)。日本では反対に、「艱難辛苦汝を玉にす」という、まさに心的外傷後成長を表現した箴言が知られてきた一方で、「秘すれば花」の価値観によって、成長を語る機会は疎外され、自己卑下が奨励されるという文化事情がある (宅 2012, 179)。だが、「自己高揚バイアス」があるとしても、また普段は「秘すれば花」として無言でいても、「艱難辛苦汝を玉にす」を信じるということで、その信じる力が私たちが強力に支援するという実質的な効果を軽んじる必要はない。

私は、私が心的外傷後成長を遂げたと信じることに決めて以来、「地獄行きのタイムマシン」(自注 [40] を参照) に悩まされる機会を低減することができた。心的外傷後ストレス障害と心的外傷後成長は、心的外傷体験ののちの二律背反する心理的過程というわけではなく、両者が同時に発生することは稀ではない (宅 2016, 196-199)。私は悪夢に倒されないようにするために、これからも心的外傷が私を押しあげてくれたと信じつづける。

芸術効果は、私の「多重スティグマ」を「あやす」ような力を持っていたが、それでも私はスティグマから完全に自由になったことはなかった。アーヴィング・ゴッフマンは『スティグマの社会学』で、スティグマは暴露されれば当事者の信頼が損なわれるため、当事者はそれを回避するためにパッシング、つまり自己に関する情報操作、隠蔽工作をおこなうことを、多様な例を挙げて説明している (ゴッフマン 1980, 69-170)。それらの記述を読むと、私にもさまざまなことが思いあたってくる。私は長年、自分が ASD/ADHD と知らず、また AC が自分の問題とは自覚せずに生きてきたが、制御できない精神のおよび身体的な困難を平然たるものへと装うために、いわゆる「変人キャラ」として、自分が生きる場所で受け入れられようと苦闘したことを思いだす。「未熟」、「幼稚」、「おとなになれない人」と誹謗される機会を減らすために、髭を生やしたり、老成して見える眼鏡をかけたたりして、毎日を扮装者として過ごした。カルト宗教によって洗脳されていた事実を隠しつつも、青年時代は自分の洗脳を解くために宗教や神秘的体験について熱心に学ぶ日々を送っていたが、自分がそのような領域に関心を持つのはあくまで学術的な理由にもとづいているのだというふりをして、ときには自分をカルトではない宗教の教育を受けた人間だと苦し紛れの嘘をついたこともあった。自分の性自認や性的指向の揺らぎにうろたえながら、動揺を隠すために、LGBTQ+ に関して開明的な立場を表明したり、性的少数者の援助者 (アライ) に見えるように、つまり自分が当事者には見えないようにしたりという工夫に心を砕いた。

本稿を通じて、私は自分の「多重スティグマ」を、これまでよりもはるかに低減させることに成功した。当事者の語りはスティグマを低減させる効果があると言われる (熊谷 2020, 184-185)。坂口恭平も、多くの人は他者の声をインプットすることで不可能性に捉われており、自分の好むことを声に出してアウトプットすることで、自分のための「薬」を生成ことができると述べる (坂口 2000, 257-258)。熊谷は、周囲の人間が当事者に与える「公的スティグマ」、それを当事者が内面化した「自己スティグマ」、この装置を循環させている制度や因習などの「構造的スティグマ」があると整理している (熊谷 2020, 182-183)。「自己スティグマ」が低減

できたとしても、「公的スティグマ」はむしろ増幅するのではないのかということ、また「構造的スティグマ」を真に低減させることができるのかを、これから検証していくことになるだろう。

4. 3. 修正版社会モデル、魔法の世界、価値観のユニヴァーサル・デザイン

現在の国際的な「障害」理解の雛形を提供する WHO の ICF（国際生活機能分類）は、つぎのように説明する。障害理解の片方には、「障害という現象を個人の問題としてとらえ、病気・外傷やその他の健康状態から直接的に生じるものであり、専門職による個別的な治療というかたちでの医療を必要とするものとみる」医学モデルがあり、他方には「障害を主として社会によって作られた問題とみなし」、「障害は個人に帰属するものではなく、諸状態の集合体であり、その多くが社会環境によって作り出されたものである」と考える社会モデルがあると。ICF は「これらの 2 つの対立するモデルの統合」をおこなう（世界保健機関 2002, 17）。

このモデルに対応するように、私たちの界限ではしばしば発達障害はそれ自体が障害ではないという言葉が流布している。私たちには特殊な発達特性（「発達凸凹」）があり、それが環境への不適応を起こすことによって、実質的な発達障害が出現するという考え方のことだ。「発達障害」の要因を個人の特性だけに見る医学モデルも、環境だけに見る社会モデルも採用せず、個人と環境の組み合わせの悪さという総合性に見いだしている点で、この考え方は国際的に標準的な障害理解と言える。

実は、このような障害理解は DSM-5 にも影響を与えていないわけではない。DSM-5 では、ASD の診断として「その症状は、社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている」こと（APA 2014, 50）、ADHD の診断基準として、「これらの症状が、社会的、学業的、または職業的機能を損なわせているまたはその質を低下させているという明確な証拠がある」こと（APA 2014, 59）が挙げられている。これは DSM-5 が、個人の内部に障害を発見して事足りると考える医学モデルだけではなく、社会的な形で障害が顕在化することによって、初めて障害が診断されるべきという社会モデルを、微弱な形ながら取りこんでいることを意味している。もともと、DSM-5 ではその傾向は「なま煮え」のようになっていて、原則的には医療モデルが濃厚だということは、上の文言で障害の発生源を個人に見ていることから、またすでに指摘した一方的な立場（自注 [33] を参照）からも、明らかだろう。

医療モデルと社会モデルの総合は、かなり説得的な見解ではある。しかし、ともすれば障害はなかば社会の責任だが、なかば個人の責任だという論理を導き、DSM-5 のように、問題発生の要因が究極的には個人に押しつけられる結末を導きかねない。私としては、個人と環境の不適合に障害の発生を見ることには同意できても、原則としてその発生を社会が抑止しなければならないと考える。つまり、いわばそのような「修正版社会モデル」によって、「脳の多様性」（「1. 2.」を参照）の理念が実現されるべきだと考える。

まず、私と仲間たちは異文化を生きているということが認められるべきだろう。パワン・シンハラは、ASD 児は出来事の予測がしづらく、彼らには物事がデタラメに起きているように体感

されるため、世界が秩序だった場所ではなく「魔法」のように現れてくることを指摘している (Sinha 2014, 15220–15225)。成人の ASD 者にとっては、世界はつねに「魔法」のようとは言えないにせよ、私たちには予想できないはずのことを予想して不安がる傾向があり、結果として、やはりときとして「魔法」が私たちを翻弄している。

定型発達者の世界にも、そのような形での「魔法」はあるだろう。逆に、私たちの世界にも現実はある。だから片方は現実世界に生き、片方は魔法世界に生きていますと切り分ければ、誇張になる。だが、定型発達者は魔法が混じった現実の世界に生き、私たちは現実的要素を持ちあわせた魔法の世界に住んでいる、という控えめな分け方ならば、妥当かもしれない。そのように異文化の並存を認識して、「脳の多様性」を把握することが、上に述べた「修正版社会モデル」の課題になるだろう。もちろん現状のなかで、ASD 者が現行のルールを破った場合などに、その人を「魔法の世界の住人」として許容する必要はなく、現行のルールが生きているあいだは、あくまでも現行のルールに沿って問題が解決されねばならない。

「脳の多様性」に関して、重度の知的障害を有する ASD 者などに「脳の多様性」を見るのは無理があり、「脳の多様性」は恵まれた ASD 者らの自己満足的な主張だという見解がある。知的障害がない場合のみを「脳の多様性」に算入するべきという見解 (Jaarsma / Welin 2012, 20–30) には、一定の説得力がある。ある場所や家族内に、重度の知的障害を持った ASD 者、軽度の知的障害を持った ASD 者、平均的な知能を有する ASD 者、優秀な ASD 者、天才的な能力を持つ ASD 者のうち、複数のタイプを抱えこんでいる場合、それを分断するには困難が伴うかもしれない。しかし、定型発達者でも重度の知的障害が伴う場合には特別な介助の必要が生まれるのだから、ASD 者の場合でも、それは同様と言える。

また、「脳の多様性」の理念が中途半端に浸透している段階で、現状では不可欠な「障害者支援」が打ちきられるということも、決してあってはならない。「脳の多様性」を認めた社会は、多様性を維持するために必要な支援が整えられた社会と考えるべきだ。先にも書いたように (自注 [33] を参照)、定型発達者も、彼らにとって暮らしやすい世界が構築されてきたという形で支援を受けていることは、忘れられてはならない。

私は決して医学の進歩を見くびっているわけではない。いつか医学が「脳の一様性」を実現できる水準に達する可能性もあるかもしれない。しかしそれでも私は、その一様性よりも「脳の多様性」が認められ、かつ十分に支援された時代に、より大きな幸せを見る。私と仲間たちには、定型発達者には得られないさまざまな体験が起こっているのだ。

私は現在、「脳の多様性」を実現するためのユニヴァーサル・デザインやインクルーシヴ・デザイン、問題の当事者が関与するコ・プロダクション (共同創造) に関する研究会を運営している。変えられるべき「デザイン」は、必ずしも物理的なものばかりではない。通念、規範、価値観、言語運用といった人々の精神的な「デザイン」も変えていく必要がある。熊谷晋一郎は書く。

「当事者研究は、少数派同士が、自分の体験の中で繰り返されたり、互いの体験の中で繰り返されたりしているパターンを発見し、そこに新しい言葉をあてはめていくことで、「言葉のユ

ニバーサルデザイン」を実現する実践ともいえるだろう」（熊谷 2020, 27）。当事者研究を通じてユニヴァーサル・デザインの模索に、私はこれからも携わっていきたいと考えている。

おわりに——脆弱性の連帯へ

本稿は「1.1.」から「1.4.」に書いたとおり、当事者研究、「脳の多様性」の理念、ASD/ADHD 研究、実験的エスノグラフィー、文学研究と文化研究の未開地の探索のために書かれた。私は、類似する研究を今後もおこなっていくつもりでいる。

つぎのテーマとしては、マイノリティ同士の連帯はどこまで可能かという問いになるだろうか。たとえばバイセクシュアルの女性と統合失調症の男性がいたとして、両者が特に共通する利害関係を持たない場合、マイノリティ同士だからということで本格的な連帯を実現するのは、かなり困難なことではないだろうか。さまざまなマイノリティ同士が共同で催しなどをおこなうときにだけ、連帯すれば充分なのかもしれないが、この問題はもっと深く探る価値がある。弱さによってつながる「脆弱性の連帯」という可能性、何かの問題の「当事者」だと覚悟することにつながる「当事者」の連帯など、この問題系にはさまざまな可能性が眠っている。

資料（引用・言及したものに限る）

浅田晃佑（2015）「自閉症スペクトラム障害におけるコミュニケーション空間の特性理解」（科学研究費助成事業——研究成果報告書）。

アダルト・チルドレン・アノニマス（2015）『ミーティング・ハンドブック』、第3版、ACA 事務局。

綾屋紗月 / 熊谷晋一郎（2008）『発達障害当事者研究——ゆっくりしていねいにつながりたい』、医学書院。

綾屋紗月 / 熊谷晋一郎（2010）『つながりの作法——同じでもなく違うでもなく』、日本放送出版協会。

綾屋紗月（2018）「ソーシャル・マジョリティ研究とは」、『ソーシャル・マジョリティ研究——コミュニケーション学の共同創造』、綾屋紗月（編著）、金子書房、1-21 ページ。

池上英子（2017）『ハイパーワールド——共感しあう自閉症アバターたち』、NTT 出版。

石原孝二（2013）「当事者研究とは何か——その理念と展開」、『当事者研究の研究』、石原孝二（編）、医学書院、11-72 ページ。

泉流星（2003）『地球生まれの異星人——自閉者として、日本に生きる』、花風社。

伊藤亜紗（2018）『どもる体』、医学書院。

入矢義高 / 溝口雄三 / 末木文美士 / 伊藤文生（1996）『碧巖録』下巻、岩波書店。

岩永竜一郎 / ニキ・リンコ / 藤家寛子（2008）『続 自閉っ子、こういう風にできてます！——自立のための身体づくり』、花風社。

- 岩永竜一郎 / ニキ・リンコ / 藤家寛子 (2009) 『続々 自閉っ子、こういう風にできてます！——自立のための環境づくり』、花風社。
- 岩波明 (2015) 『大人の ADHD——もっとも身近な発達障害』、筑摩書房。
- ウィリアムズ、ドナ (1993) 『自閉症だったわたしへ』、河野万里子 (訳)、新潮社。
- ウィリアムズ、ドナ (2008) 『ドナ・ウィリアムズの自閉症の豊かな世界』、門脇陽子 / 森田由美 (訳)、明石書店。
- ウィリー、リアン・ホリデー (2002) 『アスペルガー的人生』、東京書籍。
- 上岡陽江 / 大嶋栄子 (2010) 『その後の不自由——「嵐」のあとを生きる人たち』、医学書院。
- 内海健 (2015) 『自閉症スペクトラムの精神病理——星をつぐ人たちのために』、医学書院。
- 頼原退蔵 (1939) 『去来抄・三冊子・旅寝論』、頼原退蔵 (校訂)、岩波書店。
- 遠藤周作 (1999) 『遠藤周作文学全集』、第 2 巻、新潮社。
- 大江健三郎 (2018) 『大江健三郎全小説 1』、講談社。
- 大下勇治 (2005) 『昼寝するぶた——ものみの塔を検証する！』、総合電子リサーチ。
- 大村豊 (1999) 「その他の障害」、『高機能広汎性発達障害——アスペルガー症候群と高機能自閉症』、杉山登志郎 / 辻井正次 (編著)、ブレーン出版、42-44 ページ。
- ガーランド、グニラ (2000) 『ずっと「普通」になりたかった。』、ニキ・リンコ (訳)、花風社。
- ガーランド、グニラ (2007) 『自閉症者が語る人間関係と性』、石井バークマン麻子 (訳)、東京書籍。
- 共同訳聖書実行委員会 (2001) 『聖書——新共同訳 旧約聖書続編つき』、日本聖書協会。
- 京都大学 (2012) 「自閉症スペクトラム障害でミラーニューロン回路の不全」 (www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/news_data/h/h1/news6/2012/120815_1.htm)
- 京都大学 (2016) 「自閉症児は黄色が苦手、そのかわり緑色を好む——発達障害による特異な色彩感覚」、京都大学「研究・産官学連携——最新の研究成果を知る」 (www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2016/161223_2.html)
- 空海 (1984) 『弘法大師空海全集』、第 6 巻、弘法大師空海全集編輯委員会 (編)、筑摩書房。
- 日下部吉信 (2000) 『初期ギリシア自然哲学者断片集』、第 1 巻、筑摩書房。
- 熊谷晋一郎 (2009) 『リハビリの夜』、医学書院。
- 熊谷晋一郎 / 國分功一郎 (2017) 「来たるべき当事者研究——当事者研究の未来と中動態の世界」、『みんなの当事者研究』、熊谷晋一郎 (編)、金剛出版、12-34 ページ。
- 熊谷晋一郎 (2018) 『当事者研究と専門知——生き延びるための知の再配置』熊谷晋一郎 (責任編集)、金剛出版。
- 熊谷晋一郎 (2020) 『当事者研究——等身大の〈わたし〉の発見と回復』、岩波書店。
- グランディン、テンプル / スカリアノ、マーガレット M. (1994) 『我、自閉症に生まれて』、カニングハム久子 (訳)、学研。

- グランディン、テンプル (1997) 『自閉症の才能開発——自閉症と天才をつなぐ環』、カニン
グハム久子 (訳)、学研。
- 黒柳徹子 (1981) 『窓ぎわのトットちゃん』、講談社。
- コーク、ベッセル・ヴァン・デア (2016) 『身体はトラウマを記録する』、柴田裕之 (訳)、
杉山登志郎 (解説)、紀伊國屋書店。
- ゴッフマン、アーヴィング (1980) 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティテ
ィ』石黒毅 (訳)、せりか書房。
- 河野哲也 (2013) 「当事者研究の優位性——発達と教育のための知のあり方」、『当事者研究
の研究』、石原孝二 (編)、医学書院、74-111 ページ。
- 國分功一郎 (2017) 『中動態の世界——意志と責任の考古学』、医学書院。
- 小牧元 (2020) 「失感情症 (アレキシサイミア)」、厚生労働省 e-ヘルスネット (<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-04-006.html>)。※年号は閲覧年。
- 坂口恭平 (2020) 『躁鬱大学』 (<https://note.com/kyoheisakaguchi/m/m17c5c94dfa47>)
- 坂口恭平 (2020) 『自分の薬をつくる』、晶文社。
- サックス、オリヴァー (1997) 『火星の人類学者——脳神経科医と7人の奇妙な患者』、吉田
利子 (訳)、早川書房。
- 渋井哲也 (2020) 「性暴力を「なかったことにされたくない!」、『週刊女性』、8月18・25
日合併号、主婦と生活社、129-131 ページ。
- シモン、ルディ (2011) 『アスパーガール——アスペルガーの女性に力を』、牧野恵 (訳)、
スペクトラム出版社。
- 杉山登志郎 (2011) 『杉山登志郎著作集1——自閉症の精神病理と治療』、日本評論社。
- 砂川芽吹 (2015) 「自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきた
のか——障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて」、『発達心理学研究』、日
本発達心理学会 (編)、26 (2) 号、87-97 ページ。
- 世界保健機関 (編) (2002) 『国際生活機能分類——国際障害分類改定版』、障害者福祉研究
会 (編集)、中央法規出版。
- ソルデン、サリ (2005) 『片づけられない女たち』、ニキ・リンコ (訳)、WAVE 出版。
- 高楠順次郎 / 渡邊海旭 (1925) 『大正新脩大蔵経 第十卷 華嚴部下』、大蔵出版。
- 宅香菜子 (2012) 「アメリカにおける PTG 研究——文化的観点から」、『PTG 心的外傷後成
長——トラウマを超えて』、近藤卓 (編著)、金子書房、170-182 ページ。
- 宅香菜子 (2016) 「PTG: その可能性と今後の課題」、『PTG の可能性と課題』、宅香菜子 (編
著)、金子書房、196-212 ページ。
- 立入勝義 (2017) 『ADHD でよかった』、新潮社。
- チクセントミハイ、M. (1979) 『楽しみ社会学——不安と倦怠を越えて』、今村浩明 (訳)、
思索社。

- チクセントミハイ、ミハイ / ナカムラ、ジーン (2003) 「フロー理論のこれまで」、『フロー理論の展開』今村浩明 / 浅川希洋志 (編)、世界思想社、1-39 ページ。
- 道元 (2006) 『原文対照現代語訳 道元禅師全集3 正法眼蔵3』、水野弥穂子 (訳注)、春秋社。
- ナジャヴィッツ、リサ・M. (2020) 『トラウマとアディクションからの回復——ベストな自分を見つけるための方法』、近藤あゆみ / 松本俊彦 (監訳)、浅田仁子 (訳)、金剛出版。
- ニキ・リンコ / 藤家寛子 (2004) 『自閉っ子、こういう風にできてます!』、花風社。
- ニキ・リンコ (2005) 『俺ルール! ——自閉は急に止まれない』、花風社。
- ニキ・リンコ (2007) 『自閉っ子におけるモンダイな想像力』、花風社。
- ニキ・リンコ / 藤家寛子 (2014) 『10年目の自閉っ子、こういう風にできてます! ——「幸せになる力」発見の日々』、花風社。
- バロン=コーエン、サイモン (2005) 『共感する女脳、システム化する男脳』、三宅真砂子 (訳)、日本放送出版協会。
- ハン・ガン (2019) 『回復する人間』、斎藤真理子 (訳)、白水社。
- 東田直樹 (2007) 『自閉症の僕が跳びはねる理由——会話のできない中学生がつづる内なる声』、エスコアール出版部。
- 東田直樹 (2010) 『続・自閉症の僕が跳びはねる理由——会話のできない高校生がたどる心の軌跡』、エスコアール出版部。
- 樋口直美 (2020) 『誤作動する脳』、医学書院。
- 藤家寛子 (2004) 『他の誰かになりたかった——多重人格から目覚めた自閉の少女の手記』、花風社。
- ブラウズ、アクセル (2005) 『鮮やかな影とコウモリ——ある自閉症青年の世界』、浅井晶子 (訳)、インデックス出版。
- フリス、ウタ (2009) 『自閉症の謎を解き明かす』、富田真紀 / 清水康夫 / 鈴木玲子 (訳)、東京書籍。
- フリス、ウタ (2012) 『ウタ・フリスの自閉症入門——その世界を理解するために』、華園力 (訳)、中央法規出版。
- ホール、ケネス (2001) 『ぼくのアスペルガー症候群——もっと知ってよぼくらのことを』、野坂悦子 (訳)、東京書籍。
- マッキーン、トーマス・A. (2003) 『ぼくとクマと自閉症の仲間たち』、ニキ・リンコ (訳)、花風社。
- 宮沢賢治 (1975) 『宮沢賢治全集』、第3巻、筑摩書房。
- 向谷地生良 (2005) 「序にかえて——「当事者研究」とは何か」、浦河べてるの家『べてるの家の「当事者研究」』、医学書院、3-5 ページ。
- 村上靖彦 (2008) 『自閉症の現象学』、勁草書房。
- 村上春樹 (1999) 『スプートニクの恋人』、講談社。

- 村上龍 (1994) 『五分後の世界』、幻冬舎。
- 文部科学省 (2020) 「特別支援教育 1. はじめに」 (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/001.htm)
- 山口貴史 (2018) 「自閉スペクトラム症男子の性同一性形成の障害 (思春期を中心に)」、『精神療法』44 (2) 号、208-214 ページ。
- 與謝野晶子 (1980) 『定本與謝野晶子全集』、第 10 卷 (詩集 2)、講談社。
- 吉濱ツトム (2016) 『地球の兄弟星〈プレアデス〉からの未来予知——2070 年までの世界とアセンション』、ヒカルランド。
- 米田衆介 (2011) 『アスペルガーの人はなぜ生きづらいのか? ——大人の発達障害を考える』、講談社。
- ローソン、ウェンディ (2001) 『私の障害、私の個性。』、ニキ・リンコ (訳)、花風社。
- Alighieri, Dante (1838), *La divina commedia. I quattro poeti italiani coi migliori commenti antichi e moderni*. Firenze (Passigli).
- American Psychiatric Association (編) (2014) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』、日本精神神経学会 (日本語版用語監修)、高橋三郎 / 大野裕 (監訳)、医学書院。
- Bejerot, Susanne et al. (2012), “The Extreme Male Brain Revisited. Gender Coherence in Adults with Autism Spectrum Disorder,” *The British Journal of Psychiatry*. Vol. 201, pp. 116-123.
- Benjamin, Walter (1991): *Gesammelte Schriften*. Unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Bd. I/2, Frankfurt am Main (Suhrkamp).
- Calhoun, Lawrence G. / Tedeschi, Richard G. (2014) 「心的外傷後成長の基礎——発展的枠組み」、『心的外傷後成長ハンドブック——耐え難い体験が人の心にもたらすもの』、宅香菜子/ 清水研 (監訳)、医学書院、2-30 ページ。
- Cha, Ariana Eunjung (2016), “People on the Autism Spectrum Live an Average of 18 Fewer Years than Everyone Else, Study Finds,” *The Washington Post*. March 19, 2016. (<https://www.washingtonpost.com/news/to-your-health/wp/2016/03/18/people-on-the-autism-spectrum-live-an-average-of-18-years-less-than-everyone-else-study-finds/>)
- Clarke, Arthur C., *Childhood's End*. London (Tor).
- Cortázar, Julio (1985), *Textos políticos*. Barcelona (Plaza & Janés).
- Davis, Naomi Ornstein / Kollins, Scott H. (2012), “Treatment for Co-Occurring Attention Deficit / Hyperactivity Disorder and Autism Spectrum Disorder,” *Neurotherapeutics*. Vol. 9 (3), pp. 518-530.
- Eliot, T. S. (1944), *Four Quartets*. London (Faber and Faber).

- Ellis, Carolyn / Bochner, Art (2000), "Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity. Researcher as Subject," N. Denzin & Y. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research*. Ed. by Norman K. Denzin / Yvonna S. Lincoln. 2nd edition. Thousand Oaks, CA / London (Sage Publications), pp. 733–768.
- Engdahl, Erik (2002), Institute for the Study of the Neurologically Typical. (<http://erik-engdahl.se/autism/isnt/>)
- Fiene, Lisa / Brownlow, Charlotte (2015), "Investigating Interoception and Body Awareness in Adults with and without Autism Spectrum Disorder," *Autism Research*. Vol. 8 (6), pp. 709–716.
- Flaubert, Gustave (1964), *L'Éducation sentimentale. Histoire d'un jeune homme*. Introd., notes et relevé de variantes par Édouard Maynial, chronologie par Jacques Suffel. Paris (Garnier).
- Frewen, Paul A. et al. (2008), "Clinical and Neural Correlates of Alexithymia in Posttraumatic Stress Disorder," *Journal of Abnormal Psychology*. Vol. 117, pp. 171–181.
- Heidegger, Martin (1954): *Vorträge und Aufsätze*. Pfullingen (G. Neske).
- Heidegger, Martin (2001): *Sein und Zeit*. Tübingen (Max Niemeyer).
- Herder, Johann Gottfried (2002): *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*. (Werke, Bd. 3/1). Hrsg. von Wolfgang Pross. München (C. Hanser).
- Hugo, Victor (1964), *Œuvres poétiques*. T. 1, éd. Pierre Albouy. Paris (Gallimard).
- Jaarsma, Pier / Welin, Stellan (2012), "Autism as a Natural Human Variation. Reflections on the Claims of the Neurodiversity Movement," *Health Care Analysis* Vol. 20 (1), pp. 20–30.
- Kafka, Franz (1994): *Drucke zu Lebzeiten*. (Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe). Hrsg von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main (S. Fischer).
- Komeda, Hidetsugu et al. (2015), "Autistic Empathy toward Autistic Others," *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. Volume 10 (2), pp. 145–152.
- Mach, Ernst (1886): *Beiträge zur Analyse der Empfindungen*. Jena (Gustav Fischer).
- Maréchal, Garance (2010). "Autoethnography," *Encyclopedia of Case Study Research*. Vol. 2. Edited by Albert J. Mills, Gabrielle Durepos. Thousand Oaks, CA / London (Sage Publications), pp.43–45.
- Marcus Aurelius (2013), *Meditations, Books 1–6*. Translated with an introduction and commentary by Christopher Gill. Oxford (Oxford University Press).
- Melville, Herman (2017), *Billy Budd, Sailor*. Mineola / New York (Dover).

- Meyer, Conrad Ferdinand (1962): *Gedichte Conrad Ferdinand Meyers. Wege ihrer Vollendunghrsg.* Hrsg. und mit einem Nachwort und Kommentar versehen von Heinrich Henel. Tübingen (Max Niemeyer).
- Moravia, Alberto (1976), *Romanzi brevi. Racconti surrealisti e satirici.* (Opere complete di Alberto Moravia, vol. 6). Milano (Bompiani).
- Musil, Robert (1978): *Der Mann ohne Eigenschaften* (Gesammelte Werke, Bd.1), Hrsg. von Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt).
- Musil, Robert (1981): *Prosa und Stücke* (Gesammelte Werke, Bd.6), Hrsg. von Adolf Frisé. 2. verb. Aufl. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt).
- Neruda, Pablo (1973), *Obras completas.* (Colección Cumbre). 4. ed. aumentada. Vol. 2. Buenos Aires (Editorial Losada).
- Nietzsche Friedrich (1980): *Sämtliche Werke.* Kritische Studienausgabe in 15 Bänden. Bd. 6. Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. München / Berlin / New York (Deutscher Taschenbuch Verlag / De Gruyter).
- Ochs, Elinor / Solomon, Olga (2010), “Autistic Sociality,” *Ethos. Journal of the Society for Psychological Anthropology.* Vol. 38 (1), pp. 69–92.
- Park, Crystal L. / Rechner, Suzanne C. (2014) 「人生で出会うストレスフルな経験後の成長を測定するうえで生じる問題点」、『心的外傷後成長ハンドブック——耐え難い体験が人の心にもたらすもの』、宅香菜子/ 清水研 (監訳)、医学書院、66–97 ページ。
- Perec, Georges (1974), *Espèces d'espaces.* Paris (Éditions Galilée).
- Pessoa, Fernando (1986), *Obra Poética.* Seleção, organização e notas de Maria Aliete Galhoz. Rio de Janeiro (Nova Aguilar).
- Poe, Edgar Allan (2014), *Edgar Allan Poe.* Mineola / New York (Dover).
- Rhys, Jean (2016), *Wide Sargasso Sea.* Introduction by Edwidge Danticat. New York (W. W. Norton).
- Richardson, Laurel (1999), “Feathers in our CAP”, *Journal of Contemporary Ethnography.* Vol. 28(6), pp. 660–668.
- Richardson, Laurel (2000), “Evaluating Ethnography, ” *Qualitative Inquiry.* Vol. 6 (2), pp. 253–255.
- Rilke, Rainer Maria (1996): *Gedichte, 1910 bis 1926* (Werke. kommentierte Ausgabe in vier Bänden, Bd. 2). Hrsg von Manfred Engel und Ulrich Fülleborn. Frankfurt am Main (Insel).
- Rimbaud, Arthur (1995), «Voyelles», *Poésies complètes.* Avec préface de Paul Verlaine et notes de l'éditeur. Paris (L. Vanier).

- Rousseau, Jean-Jacques (1964), *La nouvelle Héloïse, Théâtre, Poésies, Essais littéraires*. (Œuvres complètes, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond. T. 2.) Paris (Gallimard).
- Silani, Giorgia et al. (2008), “Levels of Emotional Awareness and Autism. An fMRI Study,” *Social Neuroscience*. Vol. 3 (2), pp. 97–112.
- Sinha, Pawan (2014), “Autism as a Disorder of Prediction”. *PNAS. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. Vol. 111 (42), pp. 15220–15225.
- Strang John F. et al. (2014), “Increased Gender Variance in Autism Spectrum Disorders and Attention Deficit Hyperactivity Disorder,” *Archives of Sexual Behavior*. Vol. 43 (8), pp. 1525–1533.
- Trakl, Georg (1915): „Grodek“, *Brenner Jahrbuch 1915*. Innsbruck.
- Valéry Paul (1933), *Album de vers anciens, La jeune Parque, Charmes, Calepin d'un poète*. Paris (Éditions de la N. R. F.).
- Volden, Joanne / Lord, Catherine (1991), “Neologisms and Idiosyncratic Language in Autistic Speakers,” *Journal of Autism and Developmental Disorders*. Vol. 21 (2), pp. 109–130.
- Vries, Annelou L. C. de et al. (2010), “Autism Spectrum Disorders in Gender Dysphoric Children and Adolescents,” *The Journal of Autism and Developmental Disorders*. Vol. 40, pp. 930–936.
- Wing, Lorna (1981), “Asperger's Syndrome. A Clinical Account,” *Psychological Medicine*. Vol. 11 (1), pp. 115–129.

謝辞

この研究の出発点は、京都発達障害支援センターの光岡裕之さんとの出会いを経て、京都障害者職業センターのスタッフたち、および利用者たちと交流した経験にある。私は自分が第一に「障害」の当事者として、第二に支援者として活動できる場所を探し、「当事者研究」に行きあたった。オンラインとリアルとで、ともに当事者研究に取りこんでくださった方々、Twitter内の「発達障害界限」の方々にも感謝する。個人情報保護を期するべく、個々人への言及を避け、知的財産の無断使用などはおこなわなかったが、多くの人から得た「気づき」がなければ、この研究が生まれることはなかっただろう。

本稿は、2020年8月8日に開催された「エスノグラフィーとフィクション研究会」研究発表会でおこなった口頭発表に依拠している。質問、意見、感想を寄せてくれた参加者の皆様にも心からの感謝を表明したい。